

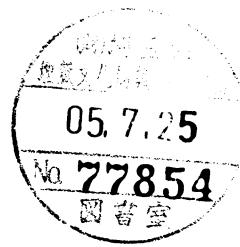
草加市

東地総田遺跡

東武ストア谷塚店建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2005

株式会社 東武ストア
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団





1 遺跡遠景（空中写真）



2 異形器台（第7号溝跡出土）

序

埼玉県の東南部に位置する草加市は、古くから新田開発が行われ、江戸時代には大都市江戸の消費を支える穀倉地帯として知られていました。埼玉名産のひとつとして有名な草加煎餅は、草加の米と野田の醤油が出合ったまさに絶妙な特産品ということができるでしょう。

昭和30年代後半からの高度経済成長期には、首都東京に近接する立地条件のよさから、この草加の地にも都市化の波が急激に押し寄せました。東洋一といわれた大規模な住宅団地である松原団地の造成や、東武鉄道と営団地下鉄（現東京メトロ）日比谷線との相互乗り入れなど、住宅や交通の整備に伴い人口が急増し、今や人口23万人を超える大都市へと変貌を遂げております。

このたびの東武ストア谷塚店の建設にあたりましては、予定地が自然堤防上に立地する東地総田遺跡の範囲内にありました。建設にあたり、事業地内の遺跡の取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねましたが、その結果、やむを得ず、記録保存の処置を講ずることとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育委員会および草加市教育委員会の調整により、当事業団が株式会社東武ストアの委託を受けて実施いたしました。

発掘調査の結果、古墳時代や江戸時代の遺構や遺物が発見されました。特に今からおよそ1,700年前の古墳時代前期の溝跡からは、千葉県や茨城県で類例のみられる「器台形土器」が発見されるなど、往時の草加の人々の生活や、ものの流通を知る上で貴重な資料を得ることができました。これらの成果の一端は、現地説明会を開催して公表しましたが、近隣にお住いの方々をはじめ、県内外から210名もの方々が見学に訪れました。

本書は、調査の成果をまとめた報告書であります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本報告書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育委員会および草加市教育委員会をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました株式会社東武ストア並びに地元関係者各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成17年6月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 福 田 陽 充

例 言

1 本書は、草加市谷塚町に所在する東地総田遺跡
第2次調査の発掘調査報告書である。

なお、第1次調査は、草加市教育委員会により
昭和61年7月19日から7月28日まで実施され、
『草加市の文化財(12)』(草加市教育委員会1987)
に報告されている。

2 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する
指示通知は、以下のとおりである。

東地総田遺跡第2次 (HGSTSUD)

埼玉県草加市谷塚町字西地総田耕地922番地
平成16年8月26日付け 教文第2-35号

3 発掘調査は東武ストア谷塚店建設事業に伴う埋
蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉
県教育委員会および草加市教育委員会が調整し、
株式会社東武ストアの委託を受け、財団法人埼玉
県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4 発掘調査事業は、I-3の組織により実施した。
調査は、平成16年9月1日から平成16年10月29日
まで実施し、木戸春夫が担当し、渡辺慎太郎の補
助を受けた。

整理・報告書作成事業は、平成17年4月8日か
ら平成17年6月30日まで実施し、瀧瀬芳之が担当
した。

5 遺跡の空中写真撮影は、中央航業株式会社に委
託した。

6 発掘調査時の写真撮影は木戸・渡辺が行い、遺
物の写真撮影は大屋道則が行った。

7 出土品の整理・図版作成は、瀧瀬が行い、兵ゆ
り子、大和田瞳の補助を受けた。

8 本書の執筆は、I-1は埼玉県教育局生涯学習
部生涯学習文化財課が、IIは渡辺が、IIIは木戸が、
他は瀧瀬が行った。

9 本書の編集は、瀧瀬が行った。

10 本書に掲載した資料は、平成17年度以降、埼玉
県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

11 本書の作成にあたり、下記の方々・機関から御
教示・御指導・御協力を賜った。記して感謝の意
を表します（敬称略）

草加市教育委員会 浦田厚司 川口武彦
佐々木彰

凡 例

- 1 遺跡全体におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第Ⅳ系（原点：北緯 $36^{\circ}00'00''$ 、東経 $139^{\circ}50'00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位はすべて座標北を示す。
- 2 遺跡におけるグリッドは、国土標準平面直角座標に基づいて設置した、 $10\text{m} \times 10\text{m}$ 方眼を基本グリッドとしている。
- 3 グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から南へA、B、C……、東西方向は西から東へ1、2、3……とした。（例 C-4グリッド）
- 4 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

S D 溝跡 S E 井戸跡
S K 土坑 Pit ピット（小穴）

- 5 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。
遺構図

溝跡 1:60 1:80 1:120
井戸跡・土坑・ピット 1:60

遺物実測図

土器 1:2 1:4

石製品 1:4

土製品・鉄製品 1:2

木製品 1:4 1:8

錢貨 1:1

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図等は個別に縮尺率を設定した。

- 6 遺物のうち、須恵器は断面を黒塗りにした。

- 7 木器の木取りについては、断面図に年輪方向を模式的に図示した。ただし、年輪の横断面が断面図にあらわれない場合や、木取りを確認していない木器の断面図は白ぬきである。
- 8 遺構断面図等に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
- 9 遺物観察表については次のとおりである。
 - ・口径・器高・底径は、cmを単位とする。
 - ・（ ）内の数値は復元推定値、〔 〕内の数値は残存値である。
 - ・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。

雲：雲母 片：片岩 角：角閃石
長石：長石 石英：石英 砂粒：砂粒子
赤粒：赤色粒子 白粒：白色粒子
黒粒：黒色粒子 褐粒：褐色粒子
橙粒：橙色粒子 針：白色針状物質
小礫：小礫

- ・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けた。
- ・残存率は図示した器形の部分に対する割合を示した。

- 10 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図を使用した。
- 11 土層および土器類の色調の表記は、『新版標準土色帖』2002年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に従った。

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	10
1. 発掘調査に至る経過	1	1. 溝跡	10
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	2. 井戸跡	22
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	3. 土坑	31
II 遺跡の立地と環境	4	4. ピット	36
1. 地理的環境	4	5. 遺構不明出土遺物	38
2. 周辺の遺跡	5	V 調査のまとめ	39
III 遺跡の概要	8		

写真図版

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第16図 井戸跡 (2)	25
第2図 遺跡周辺の地形	6	第17図 井戸跡 (3)	26
第3図 周辺の遺跡	7	第18図 井戸跡出土遺物 (1)	27
第4図 遺跡全体図	9	第19図 井戸跡出土遺物 (2)	28
第5図 第1・5号溝跡	11	第20図 井戸跡出土遺物 (3)	29
第6図 第2号溝跡	12	第21図 土坑 (1)	32
第7図 第3・4号溝跡	13	第22図 第9号土坑遺物出土状況	33
第8図 第6・8号溝跡	14	第23図 土坑 (2)・ピット	34
第9図 溝跡出土遺物	15	第24図 土坑出土遺物	35
第10図 第7号溝跡	17	第25図 ピット全体図	37
第11図 第7号溝跡遺物出土状況	18	第26図 遺構不明出土遺物	38
第12図 第7号溝跡出土遺物 (1)	19	第27図 第1次調査区位置図	40
第13図 第7号溝跡出土遺物 (2)	20	第28図 第1次調査遺構出土遺物	41
第14図 井戸跡 (1)	23	第29図 粗製器台形土器の類例	43
第15図 第2号井戸跡遺物出土状況	24	第30図 近世遺構遺物接合関係図	45

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	6	第5表 土坑出土遺物観察表	36
第2表 溝跡出土遺物観察表	16	第6表 ピット一覧表	36
第3表 第7号溝跡出土遺物観察表	21	第7表 遺構不明出土遺物観察表	38
第4表 井戸跡出土遺物観察表	30		

図版目次

口絵	1 遺跡遠景（空中写真）	4 第11号土坑
	2 異形器台（第7号溝跡出土）	5 第12.13号土坑
図版1	1 遺跡遠景（空中写真）	6 第14号土坑
	2 遺跡全景	7 第14号土坑遺物出土状況
図版2	1 第1号溝跡	8 土製勾玉出土状況
	2 第2号溝跡	図版8 1 第1号溝跡出土遺物（第9図1）
図版3	1 第7号溝跡	2 第1号溝跡出土遺物（第9図2）
	2 第7号溝跡異形器台出土状況	3 第7号溝跡出土遺物（第12図6）
	3 第7号溝跡遺物出土状況近景①	4 第7号溝跡出土遺物（第12図23）
	4 第7号溝跡遺物出土状況近景②	5 第7号溝跡出土遺物（第12図24）
	5 第7号溝跡遺物出土状況近景③	図版9 1 第2号溝跡出土遺物（第9図19）
図版4	1 第3.4号溝跡	2 第7号溝跡出土遺物（第12図4）
	2 第6号溝跡	3 第7号溝跡出土遺物（第12図5）
	3 第8号溝跡	4 第7号井戸跡出土遺物（第18図13）
	4 第1号井戸跡	5 第2号溝跡出土遺物（第9図15）
	5 第2号井戸跡	6 第13号井戸跡出土遺物（第20図5）
	6 第2号井戸跡遺物出土状況	図版10 1 第1号溝跡出土遺物（第9図6）
	7 第3号井戸跡	2 第7号溝跡出土遺物（第12図13）
	8 第4号井戸跡・第4号土坑	3 第7号溝跡出土遺物（第12図9）
図版5	1 第5号井戸跡	4 第7号溝跡出土遺物（第12図21）
	2 第6.8.17号井戸跡	5 第7号溝跡出土遺物（第13図27）
	3 第7号井戸跡	6 第7号溝跡出土遺物（第13図28）
	4 第9号井戸跡・第2.3号土坑	図版11 1 第7号溝跡出土遺物（第13図40）
	5 第10.15号井戸跡	2 第7号溝跡出土遺物（第13図45）
	6 第11.12号井戸跡	3 第7号溝跡出土遺物（第13図35）
	7 第13号井戸跡	4 遺構不明出土遺物（第26図2）
	8 第16号井戸跡・第15号土坑	5 第7号溝跡出土遺物（第13図31）
図版6	1 第1号土坑	6 第7号溝跡出土遺物（第13図29）
	2 第5号土坑	7 第7号溝跡出土遺物（第13図33）
	3 第6号土坑	8 第7号溝跡出土遺物（第13図32）
	4 第9号土坑	図版12 1 第8号井戸跡出土遺物（第18図15）
	5 第9号土坑遺物出土状況	2 第12号井戸跡出土遺物（第19図5）
図版7	1 第7号土坑	3 第12号井戸跡出土遺物（第19図2）
	2 第8号土坑	4 第12号井戸跡出土遺物（第19図4）
	3 第10号土坑	5 第16号井戸跡出土遺物（第20図8）

- | | | |
|--------|--------------------|-------------------|
| 6 | 第2号土坑出土遺物（第24図1） | 図版15 1 羽口（第9図25） |
| 7 | 第12号井戸跡出土遺物（第19図7） | 2 鉄滓（第18図10） |
| 図版13 1 | 第9号土坑出土遺物（第24図7） | 3 火打金（第18図9） |
| 2 | 遺構不明出土遺物（第26図7） | 4 錢貨（第26図8） |
| 3 | 土錘（第9図10） | 5 錢貨（第26図9） |
| 4 | 土製勾玉（第26図6） | 6 錢貨（第26図10） |
| 5 | 土人形（第9図11） | 7 錢貨（第26図11） |
| 6 | 円盤状土製品（第18図17） | 8 錢貨（第26図12） |
| 図版14 1 | 石臼（第19図18） | 9 錢貨（第26図13） |
| 2 | 石臼（第19図20） | 図版16 1 桶底板（第18図1） |
| 3 | 石臼（第20図7） | 2 桶（第18図3） |
| 4 | 石臼（第20図10） | 3 竪杵（第18図5） |
| 5 | 砥石（第19図15） | 4 部材（第18図16） |
| 6 | 砥石（第19図16） | 5 部材（第20図2） |
| 7 | 砥石（第19図17） | |

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課は、開発事業に伴う埋蔵文化財の保護を行うため、市町村教育委員会における専門職員の配置など、埋蔵文化財保護行政の体制整備を推進してきた。ただし、大規模開発事業や突発的事業に伴う埋蔵文化財の保護について、当該教育委員会のみでは対応が困難であると認められる場合は、県教委が協力、支援等を行っている。

平成16年4月28日に株式会社東武ストア取締役社長から新店舗建設に係る埋蔵文化財の有無及びその取扱いについての照会文書が草加市教育委員会へ提出された。草加市教育委員会から当課に職員派遣の依頼があり、5月中旬に確認調査を実施した。その結果、古墳時代前期を主体とする遺構・遺物が検出された。

確認調査の結果をうけて開発事業計画と埋蔵文化財の保護について三者で協議を継続し、現状保存が可能な区域、発掘調査を要する区域の詳細な絞り込みを行い、保護層の確保が困難な箇所を中心に、再度の確認調査を実施することで合意し、7月下旬に2回目の確認調査を実施した。

その結果、約900m²が発掘調査を要する区域であることが確定した。発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団を実施機関とし、事業団、株式会社東武ストア、草加市教育委員会、文化財保護課（当時）の四者により調査方法、期間、経費などについて協議が行われ、平成16年8月23日付で、「株式会社東武ストア谷塚店建設予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定」が締結された。

その結果、調査は平成16年9月1日から平成16年10月29日まで実施された。

なお、文化財保護法第57条の2の規定による埋蔵文化財発掘の届出が株式会社東武ストア取締役社長から平成16年8月18日付けで提出され、それに対する保護上必要な指示は平成16年8月27日付け教文第3-420号で行った。また、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査の届出に対する指示通知番号は次のとおりである。

平成16年8月26日付け 教文第2-35号

(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

東地総田遺跡の発掘調査は、平成16年9月1日から平成16年10月29日まで実施した。今回の調査は第2次調査である。なお、第1次調査は、草加市教育委員会により昭和61年7月19日から7月28日まで実施されている。

調査に先立つ8月26日から重機による表土除去作業を行った。9月1日から調査を開始し、補助員による遺構確認作業に着手した。8日からは、確認された遺構の精査を実施した。遺構確認と精査の結果、溝跡、井戸跡、土坑、ピットを検出した。遺構精査の後、遺物出土状況や遺構の写真撮影および図面作成を行い、遺跡の記録保存に万全を期した。

この年は例年に比べ降雨が多く、また2度の台風の直撃を受け、発掘区全面が冠水するなど、作業は幾度か中断を余儀なくされたが、10月23日には空中写真撮影を実施し、現地調査を完了した。その後、安全確保のための埋め戻しを行い、すべての作業を終了した。

本遺跡の調査は短期間ではあったが、周辺が住宅地ということもあり、調査中は近隣の住民の来訪が多く、地元の保育園の園児たちの団体見学もあった。こうした要望に応えるため、10月10日に草加市教育

委員会と共に現地説明会を開催した。当日は前日の台風の影響により、発掘区が冠水していたため、調査区内に立ち入ることはできなかったが、台風一過の好転に恵まれたこともあり、県内外から210名もの見学者が訪れた。そのうち、地元草加市からの見学者は169名を数え、地域の歴史に触れ、理解を深めていただく、またとない機会となった。

(2) 整理・報告書の作成

東地総田遺跡の整理事業は、平成17年4月8日から平成17年6月30日まで行った。

4月11日から、出土遺物の水洗・注記、接合・復元作業および写真や図面整理を開始した。遺構図に関しては、図面整理を経て第二原図を作成し、スキヤナーで取り込んだ後にコンピュータによるトレース作業および土層注記を挿入し編集する作業を進めた。遺物についてもコンピュータを活用しながら実測を進め、トレースの後、版下の作成を行った。続いて遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進めて編集作業に着手した。

6月下旬に大部分の作業を完了させて、印刷業者を選定し、平成17年6月末に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査(平成16年度)

理 事 長 福田 陽 充
副 事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 中村 英 樹
(管理部)

副 部 長 村田 健 二
主 席 田中 由 夫
主 任 長滝 美智子
主 任 福田 昭 美
主 任 菊池 久
主 事 海老名 健
主 事 石原 良 子

(調査部)

調 査 部 長 宮崎 朝 雄
調 査 部 副 部 長 坂野 和 信
主席調査員(調査第一担当) 昼間 孝 志
統 括 調 査 員 木戸 春 夫

(2) 整理作業(平成17年度)

理 事 長 福田 陽 充
副 事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 保永 清 光
(管理部)

副 部 長 村田 健 二
主 席 高橋 義 和
主 任 宮井 英 一
主 任 長滝 美智子
主 任 福田 昭 美
主 事 菊池 久
主 事 海老名 健

(調査部)

調 査 部 長 今泉 泰 之
調 査 部 副 部 長 坂野 和 信
主席調査員(資料整理第一担当) 磯崎 一
統 括 調 査 員 灌瀬 芳 之

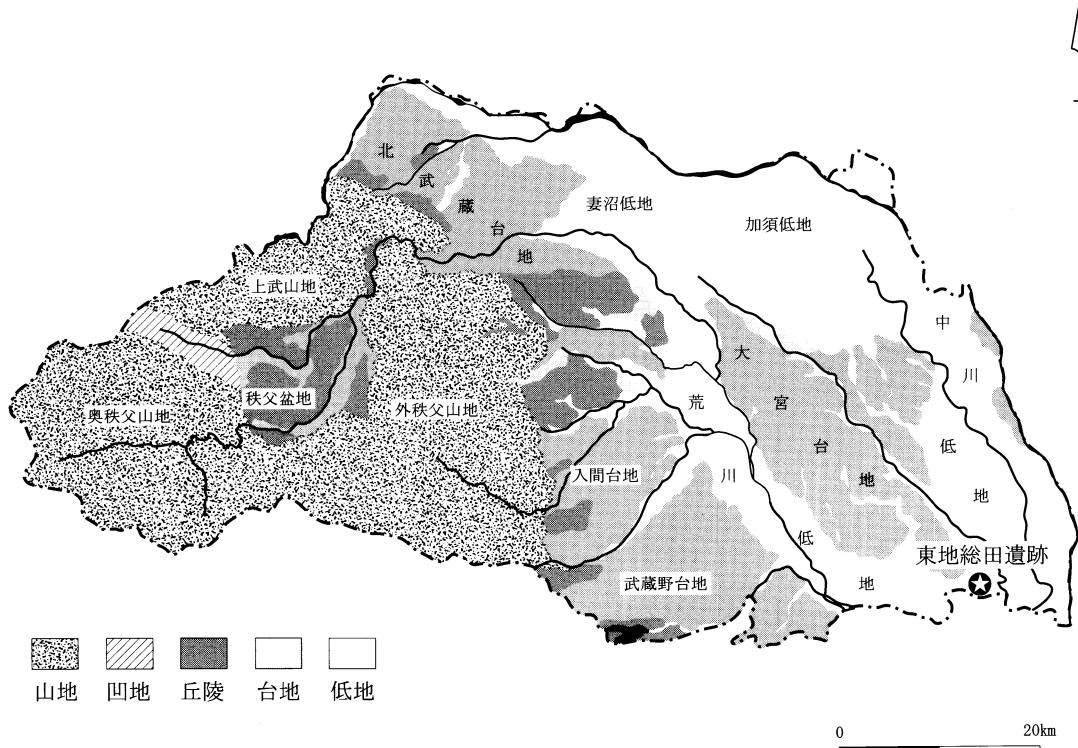
II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

東地総田遺跡は草加市谷塚町字西地総田に所在する。草加市は埼玉県の東南端に位置し、東京都との都県境にあたる。そのため、日光街道である国道4号や東武伊勢崎線などを利用して都内に通勤する人々のホームタウンともなっている。東地総田遺跡は東武伊勢崎線谷塚駅の南西約100mに位置しており、遺跡の周辺にも住宅街が広がっている。

草加市は、埼玉県東部に形成された中川低地南部の一角にあたる。中川低地は、西を大宮台地や安行台地、東を下総台地に囲まれた南北に長い沖積低地で、元荒川、吉利根川、中川といった県内の主要な河川が流れている。草加市内の標高は2~4mと県内で最も標高の低い地域の一つである。

草加市南端、本遺跡の南方約300mには東京都足立区との境界である毛長川が東に向かって流れている。現在の毛長川は小さな川であるが、毛長川の両脇に沿って蛇行する旧河道によって形成された低地の範囲などからかつては流域幅200mを超える大河川であったといわれている。これを旧入間川や旧荒川などとする見解もあるが、近年では自然堤防の地質調査の結果などから、旧利根川と旧荒川が合流して出来たものとする見解もある（大矢2003など）。この大宮台地の西側を南下し、中川低地南部を東に向かって横切る河川によって形成された自然堤防上に、本遺跡をはじめ多くの遺跡が立地している。



第1図 埼玉県の地形

2. 周辺の遺跡

毛長川両岸の自然堤防上に遺跡が多く分布するようになるのは古墳時代前期以降である。それ以前の時期には縄文海進の影響によって居住できる環境が整っていなかったせいか、現在のところ土器片が出土しているのみで定住の痕跡は確認されていない。

古墳時代の毛長川流域における遺跡の分布は、本遺跡のある左岸よりも対岸の右岸に遺跡が多く確認されており、規模も大きい傾向にある。毛長川の左岸には本遺跡をはじめ、蜻蛉遺跡（2）、西地総田遺跡（3）、御殿稻荷遺跡（4）、高稻荷古墳（6）などがある。

本遺跡の南西約500mに位置する蜻蛉遺跡では古墳時代前期初頭の方形周溝墓などが検出されている。これは毛長川流域の遺構としては対岸の舍人遺跡で検出された方形周溝墓と並んで最も古い時期の遺構であり、毛長川周辺における開拓のはじまりを考えるうえで重要である。また、古墳時代後期の円墳なども検出されている。

西地総田遺跡は本遺跡の南西約400mに位置し、器台や小型丸底壺が多く出土していることから祭祀に関わる性格が想定されている。

上流の川口市内にある高稻荷古墳は土取りのため現在では失われてしまっているが、かつては全長75mの前方後円墳であった。独立丘陵の最高所に立地しており、かなり遠方まで見渡すことができたという。墳丘の形態などから古墳時代の古い段階のものとされている。県内最古級にして最大規模であることから、この周辺の首長層の墓であった可能性が考えられている。

対岸の毛長川右岸には、東国有数の祭祀遺跡として著名な伊興・谷下・狭間遺跡（以下「伊興遺跡」）（8）をはじめ、舍人遺跡（7）や氷川神社境内遺跡（9）、東伊興遺跡（11）、花畠遺跡（12）、法華寺境内遺跡（13）、白旗塚古墳群（14）、大鷦神社境内遺跡（15）、延命寺境内遺跡（16）といった集落や白山塚古墳（17）、一本松古墳（18）といった古

墳など多くの遺跡が立地している。

伊興遺跡は古墳時代前期から営まれる祭祀遺跡や集落跡などさまざまな性格を持つ遺跡である。勾玉や管玉、石製模造品、土製模造品といった祭祀遺物が多く、銅鏡や子持勾玉のように通常の祭祀遺跡では出土することが稀な遺物も出土している。祭祀遺物の量、質ともに関東有数の遺跡である。

舍人遺跡は集落跡で、蜻蛉遺跡の方形周溝墓と並んで毛長川流域では最古の時期である古墳時代前期初頭の方形周溝墓群や古墳時代集末期から奈良時代にかけての堅穴住居群などが検出されている。

ほかにも、天保元（1830）年に成立した『新編武藏風土記稿』などの記述から、現在では失われてしまったが毛長川流域には十数基の古墳が分布していたと推定されており、これらの遺跡が毛長川の両岸にまたがって遺跡群を形成している。

これらの遺跡群は古墳時代前期に、それまで遺跡がなかった所に一斉に形成される。何故そのような地域に東国有数の祭祀遺跡である伊興遺跡や県内最大級の高稻荷古墳をはじめとする遺跡群が突然出現したのかという事に対し、現在以下の二説がある。

一つは、いわゆるS字状口縁甕に代表される東海系の土器がこれらの遺跡から多数出土している事や後述するようにこの地が水上交通の要衝であったと考えられる事から、東海地方をはじめとする地方の人々が大和政権の東国経営によって動員されて移住したとするものである（高橋1985aなど）。

それに対して、大宮台地南部に立地する集落が弥生時代後半に急増して弥生時代終末期に形成を終えるのと対応するように周辺の自然堤防上の遺跡が弥生時代後半に出現し古墳時代まで継続して営まれることを水田耕作に向いた低湿地を開拓したためととらえ、同様に毛長川流域も大宮台地南部に住んでいた人々が可耕地を求めてこの地を開拓したとする見解もある（『川口市史』1986など）。

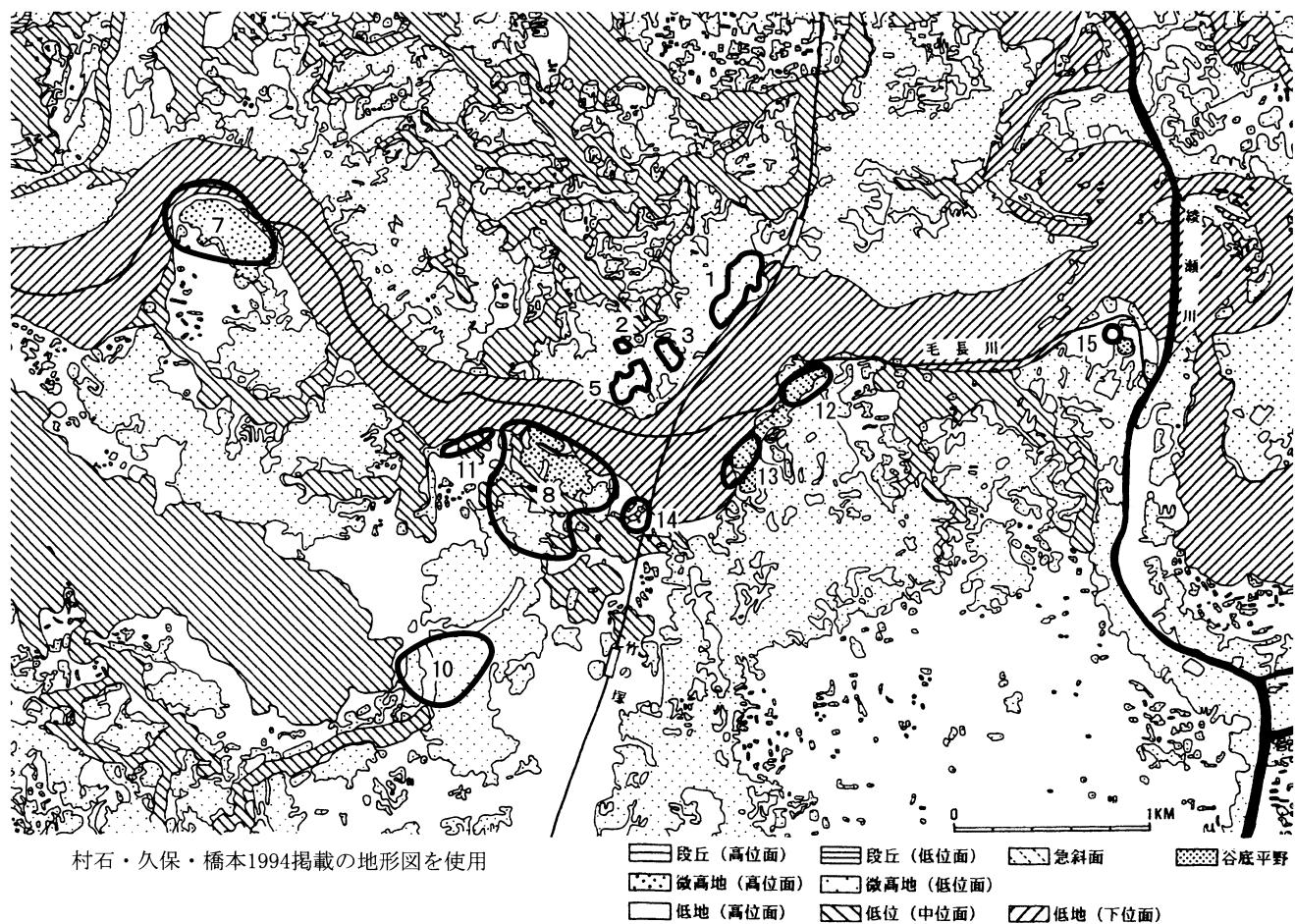
また、毛長川流域は水上交通の要衝であったと言

われている（高橋1985aなど）。前述のように毛長川は当時、大宮台地の西側を南下し、中川低地南部を東に向かって流れ、現在の毛長川からそう遠くない場所で奥東京湾に注いでいたと推定されているが、非在地系の土器や古式須恵器などの分布からこれらの遺物がこの河川を経由して北武藏に伝わったと指摘されている。当該地域はその河口の近くであるために、中央と北武藏を結ぶ水上交通の拠点であったととらえられている。また、伊興遺跡ではそれを裏付けるかのように準構造船を模したような舟形の木製品が出土している。

奈良時代になると毛長川流域は武藏国足立郡に編入される。足立郡の郡衙はさいたま市の氷川神社付

近に比定されている。奈良・平安時代には古墳時代から継続して集落が形成されるものが多い。本遺跡をはじめ、前述の西地総田遺跡、蜻蛉遺跡、伊興遺跡、舍人遺跡などはいずれも継続して集落が形成される。また、草加市No.6遺跡（5）や若宮八幡神社遺跡（10）など、このころから本格的に開発がはじまる遺跡もある。

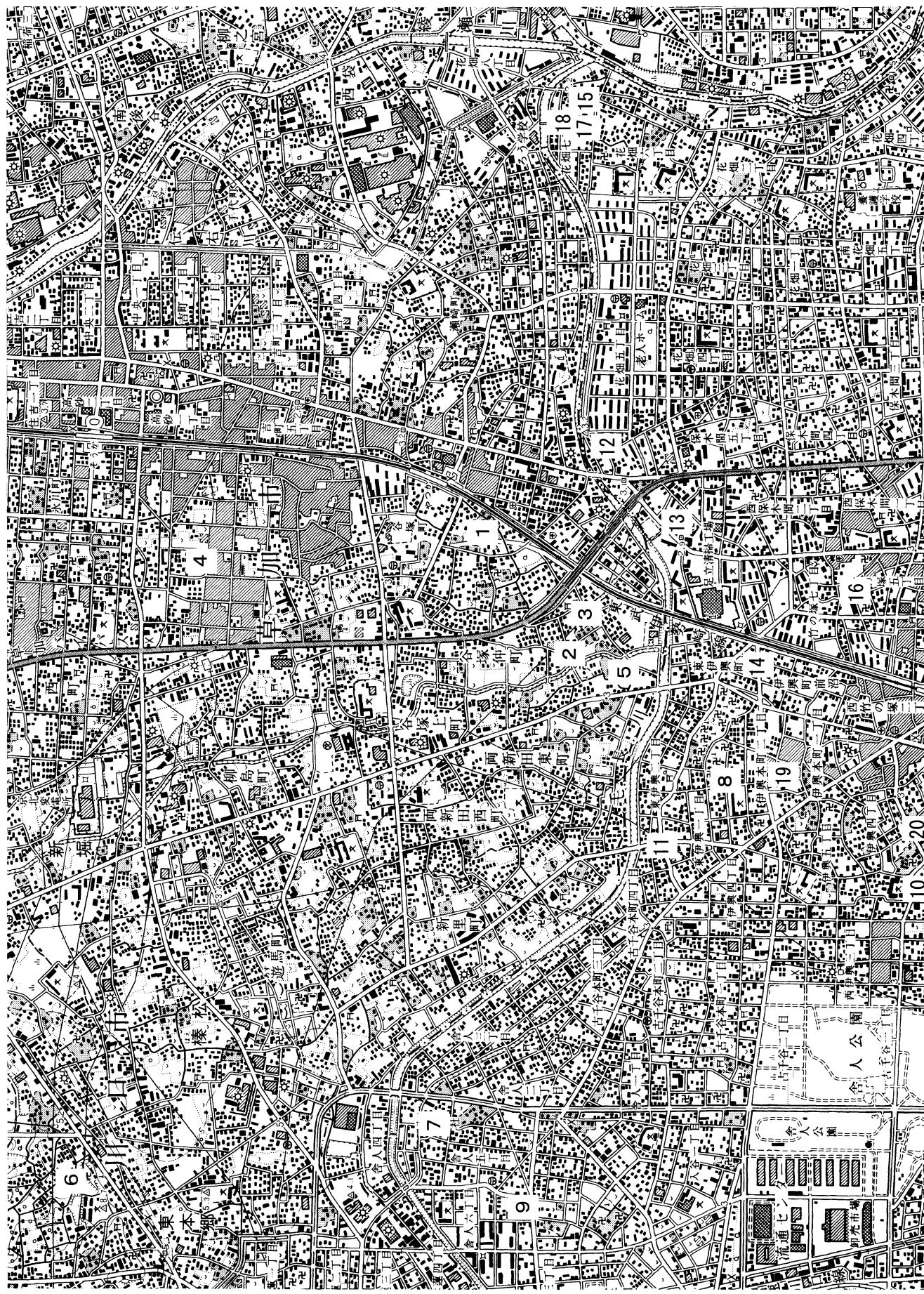
中世の遺構、遺物は本遺跡や蜻蛉遺跡、伊興遺跡、舍人遺跡などでも確認されており、毛長川右岸には伊興遺跡内にある伊興経塚、経塚遺跡（19）、六万部経塚（20）といった経塚もみられる。伊興経塚からは経筒などとともに星兜鉢が出土している。



第2図 遺跡周辺の地形

第1表 周辺遺跡一覧表

1	東地総田遺跡	2	蜻蛉遺跡	3	西地総田遺跡	4	御殿稻荷遺跡	5	草加市No.6遺跡
6	高稻荷古墳	7	舍人遺跡	8	伊興・谷下・狭間遺跡	9	水川神社境内遺跡	10	若宮八幡神社遺跡
11	東伊興遺跡	12	花畠遺跡	13	法華寺境内遺跡	14	白旗塚古墳群	15	大鷦鷯神社境内遺跡
16	延命寺境内遺跡	17	白山塚古墳	18	一本松古墳	19	経塚古墳	20	六万部経塚



第3図 周辺の遺跡

III 遺跡の概要

今回調査したのは、東地総田遺跡の南端部分にあたり、面積は900m²である。

検出した遺構は古墳時代前期から近世までの溝跡8条、井戸跡17基、土坑15基、ピット105基である。

古墳時代前期の遺構は、溝跡3条である。

第1号溝跡は、長さ約28m、幅約3～5.5m、深さ約0.7mである。南西から北東方向に延び、ほぼ直角に曲がって、北西方向に続く。南西端は撓乱によって壊されているが、両端とも調査区外に延びる。また、南西部には幅約1mの土橋状の地山の掘り残しが見られた。遺物は、ミニチュア土器や高坏脚部破片などが少量出土した。

第2号溝跡は、第1号溝跡の南側に検出された。長さ約23m、幅約2.5m、深さは約0.3mで、第1号溝跡より規模が小さい。第1号溝跡と平行に、南西方向から北東方向に延びるが、その先は第1号溝跡とは逆に南東方向にほぼ直角に曲がる。南東端は近世の第6号溝跡によって壊されているが、両端とも調査区外に続く。遺物は少なく、第1号溝跡と同様に高坏脚部や台付甕破片などが出土した。

第7号溝跡は、第1号・2号溝跡の間にあり、これらと同様に、ほぼ直角に曲がる平面形を示す。南東側は比較的深いが、北東側は浅くなり消滅している。近世の複数の井戸跡によってかなり破壊されている。検出された長さは約16m、幅は約1～3m、深さ約0.3mである。この溝からは、今回の調査中最も多くの遺物が出土した。台付甕、壠、壺などが主体である。また、千葉県で見られる「異形器台」に類似する特殊な器形の土器も出土した。

平安時代の遺構は検出されなかったが、須恵器高台付塼などの破片が、他時期の遺構に混入して少量出土した。

中近世の遺構は、溝跡3条・井戸跡13基・土坑7基である。

第3号・4号溝跡は、古墳時代前期の第1号溝跡

を、一部壊して掘り込まれていた。両者は平行し、長さは約10mである。遺物は少なく、第4号溝跡から擂鉢片が出土した。

井戸跡は、湧水が著しく底面まで検出できなかつた。すべて素掘りの井戸で、平面形態は円形のものがほとんどである。遺物は陶磁器類のほかに、桶などの木製品が少量出土した。

土坑は、平面形態が円形と長方形のものが検出された。第9号土坑は、直径約1.5m、深さ約0.4mの円形で、唐津産皿、瀬戸産片口の他、擂鉢片が2個体分出土した。他の遺構からは、在地産のかわらけ・焙烙などの土器類が出土している。

他に、時期不明の溝跡や土坑、ピットがある。ピットは、円形と方形の二種類がある。大きさはともに20～40cmで、深さは様々である。これらのピットは位置も不規則であることから、掘立柱建物などの可能性は低い。

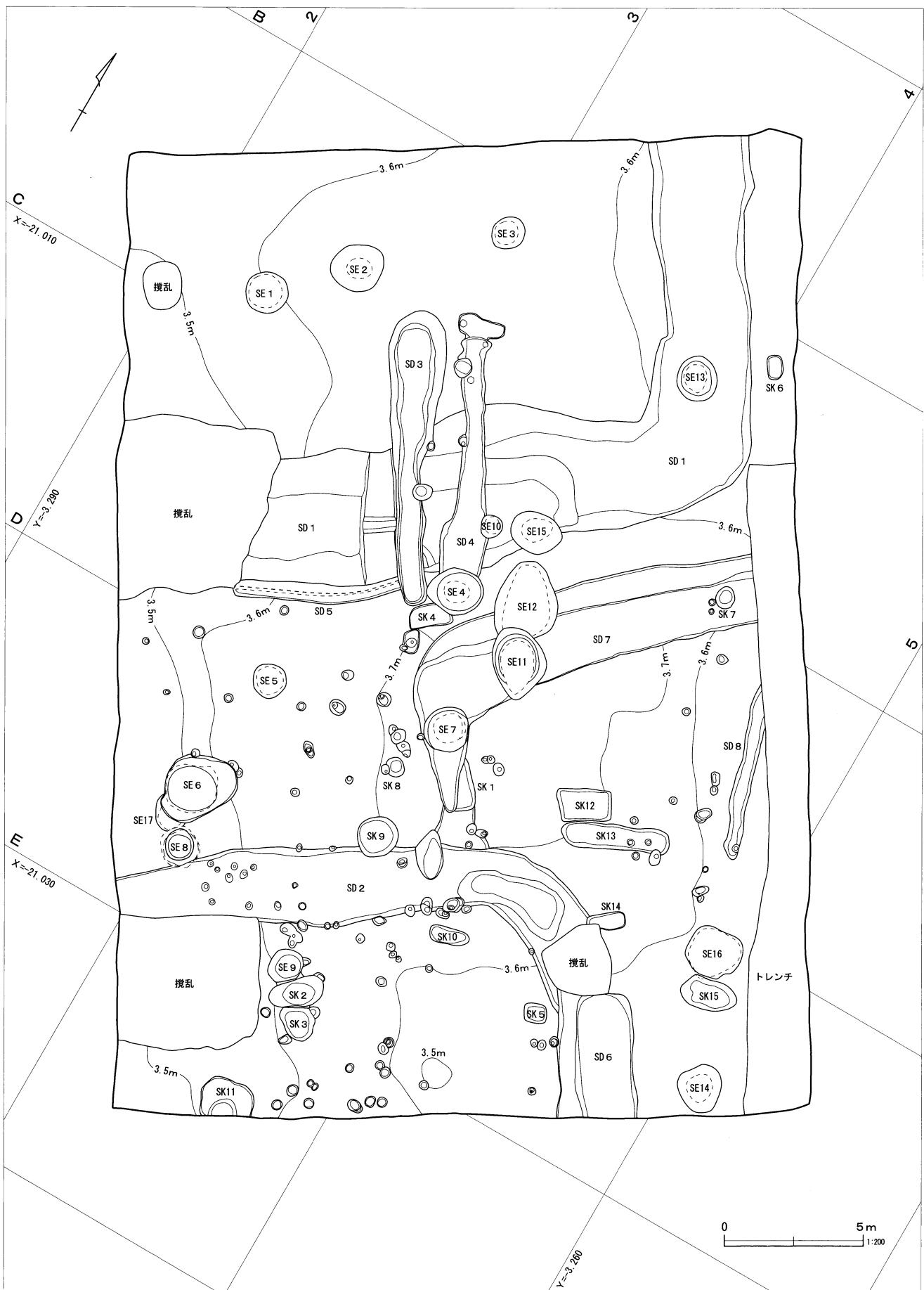
今回の調査では、住居跡は確認できなかつたが、古墳時代前期を中心に近世までの遺構・遺物が検出された。

古墳時代前期の第1号・2号溝跡は、ほぼ直角に曲がる溝で、第1号溝跡には土橋状の施設も認められた。溝跡の性格は明らかではないが、周溝墓などある一定の区画を意図している可能性が高い。また、遺物は第7号溝跡から集中して出土しており、この時期に人々の活動が最も盛んであったことが窺える。

平安時代から中世にかけては、遺物が僅かに出土しただけで、人々の生活の中心的な場所ではなかつたと考えられる。

近世になると、人々の活動が再び活発になり、溝や多くの井戸が掘られた。これらの溝や井戸は飲料水の確保を始め、農業用にも使われたであろう。

検出された遺構のほとんどは水に関係するものであり、低地に位置する遺跡の特徴をよく表している。



第4図 遺跡全体図

IV 遺構と遺物

1. 溝跡

溝跡は本遺跡の主体となる遺構で、今回の調査では8条の溝跡が検出された。このうち、第1号・2号・7号溝跡は古墳時代前期に、第3号・4号・6号溝跡は近世に属するものである。

第1号溝跡（第5図）

A-3、B-3・4、C-2・3グリッドに位置する。検出された部分はL字形で、南西辺の傾きはN-51°-E、北西辺の傾きはN-31°-Wである。南西辺中央部分を第3・4号溝跡にほぼ直角に切られ、南西辺南側を並行して走る第5号溝跡に切られている。その他に、第4・10・13・15号井戸跡に切られる。

溝跡は南西から北東方向に向かって約17m伸びてほぼ直角に曲がり、北西方向へ約11m続き、調査区外へと伸びる。南西の端は攪乱を受けているが、調査区外へ伸びるものと考えられる。全体的に掘り込みは緩やかである。幅は、南西辺のほうが北西辺よりも広くなる。もっとも広い部分で5.6m、狭い部分で3.0mである。南西端から約4mのところには、幅約1mの土橋状の地山の掘り残しが存在する。土橋の中央には幅48cm、深さ約10cmの浅い溝状の掘り込みが検出された。溝跡の深さは、この土橋の部分を除いて、およそ40~70cmの間で上下するが、総じて南西端へ向かって深くなる傾向にある。土層の堆積は、自然に埋没した状況を示している。この溝跡の帰属時期を示す古墳時代前期の遺物は第3~5層から出土し、第1層と第2層には平安時代の遺物が含まれていた。

遺物は、土師器甕・壺・高坏・ミニチュア土器、土錘などがある。その量は規模に比して少なく、土器はすべて破片である。混入する上層の遺物として、平安時代の須恵器片や江戸時代の土人形などがある。後者は切り合う第3・4号溝跡のいずれかに帰属する遺物と推定される。

第2号溝跡（第6図）

D-2~4グリッドに位置する。第1号溝跡と相对するように検出され、同様にL字状を呈している。北西辺の傾きはN-56°-E、北東辺の傾きはN-60°-Wである。北東辺の大半を第6号溝跡と攪乱によって壊されている。北西辺の南西端も攪乱の影響を受ける。その他に、第8号井戸跡と第9・14号土坑に切られ、第7号溝跡と接する。

溝跡は南西端から北東へ15mほど伸びたところでほぼ直角に方向を変え、南東方向に向かって約8m伸びて調査区外へと続く。南西側も調査区外へ伸びるものと考えられる。全体的に掘り込みは緩やかで、底は平坦である。幅は3m前後、深さは20cm前後であるが、コーナー部分はさらに10cmほど深く掘り込まれている。埋土の状況は自然堆積を示している。コーナー近くの第7号溝跡と接する位置には、第7号溝跡へ突出している箇所があるが、第7号溝跡との新旧関係は把握できなかった。

遺物はすべて破片である。埋土中層から土師器甕・台付甕・高坏などが出土した。第7号溝跡との接地点を中心に、遺物が出土している。

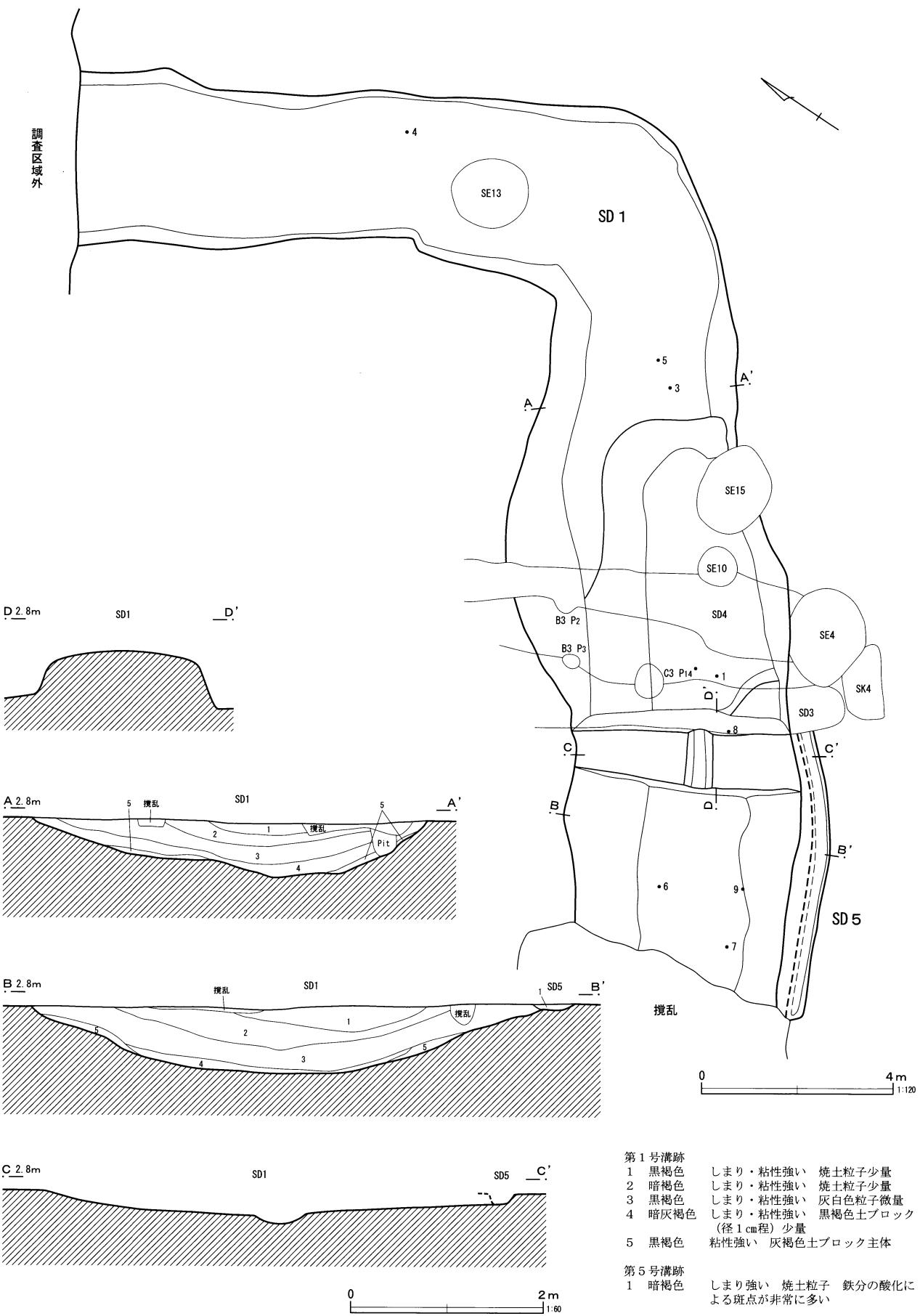
第3号溝跡（第7図）

B-2・3、C-2・3グリッドに位置する。第1号溝跡を切り、第4号井戸跡に切られている。傾きはN-29°-Wである。長さは10.6m、幅は1~2m、深さは約40~100cmで、南半分が細く浅く、北半分が広く深い。掘り込みは急でしっかりしている。埋土に地山土ブロックが多く含まれていることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

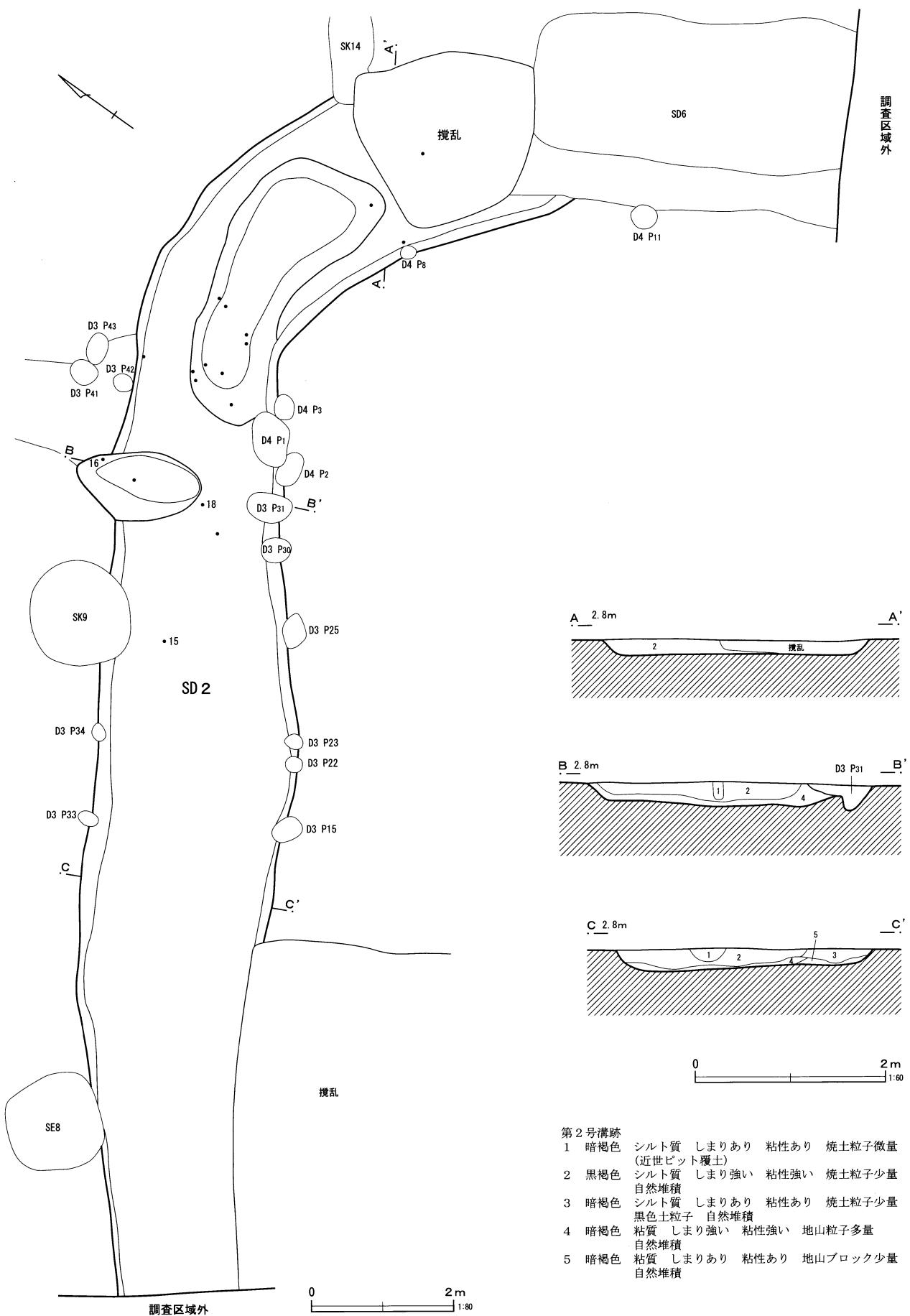
遺物は、かわらけの他に、混入遺物として須恵器片、土師器甕の破片などがある。

第4号溝跡（第7図）

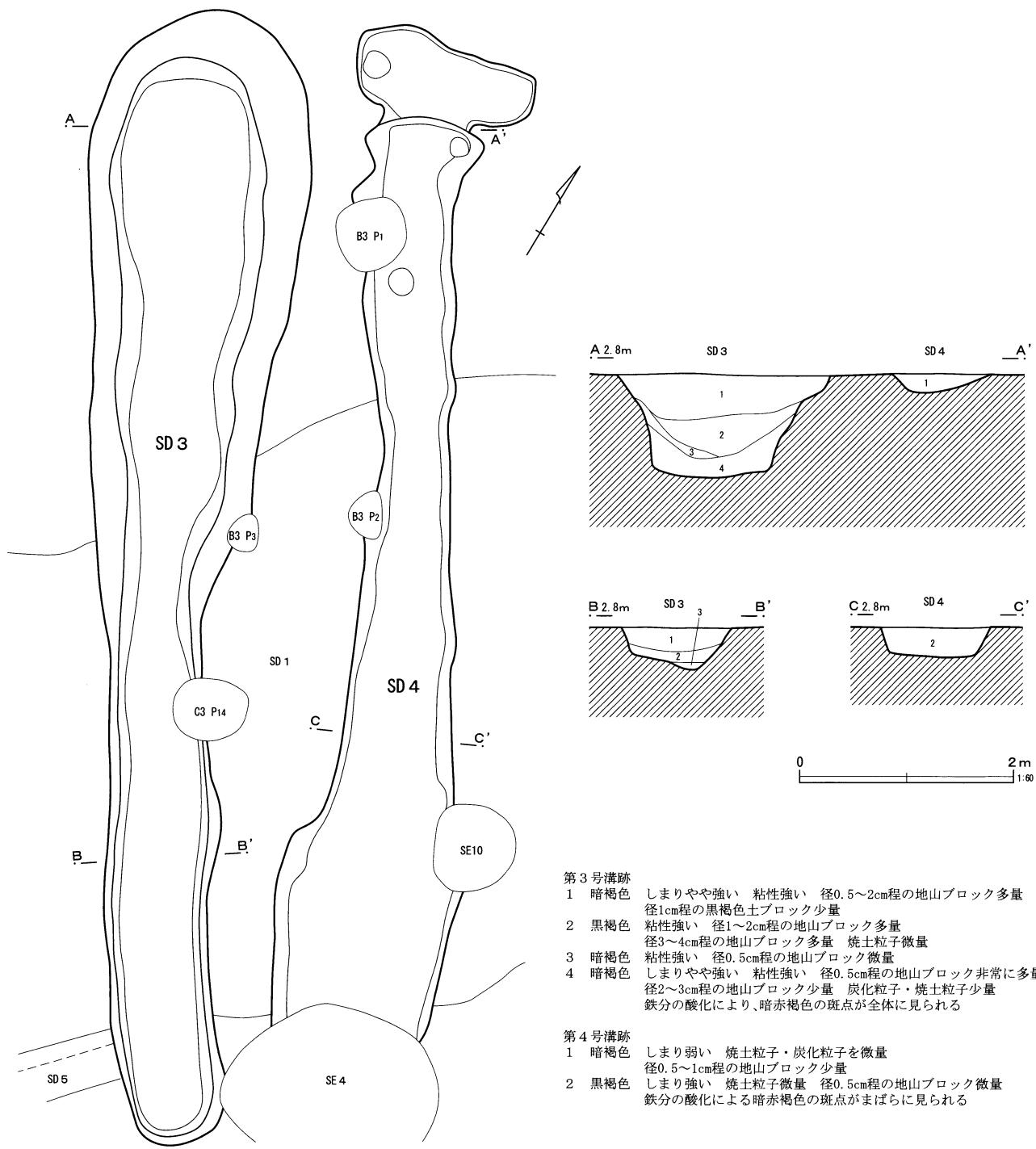
B-2・3、C-2・3グリッドに位置する。第1号溝跡を切って構築されている。第4・10号井戸



第5図 第1・5号溝跡



第6図 第2号溝跡



第7図 第3・4号溝跡

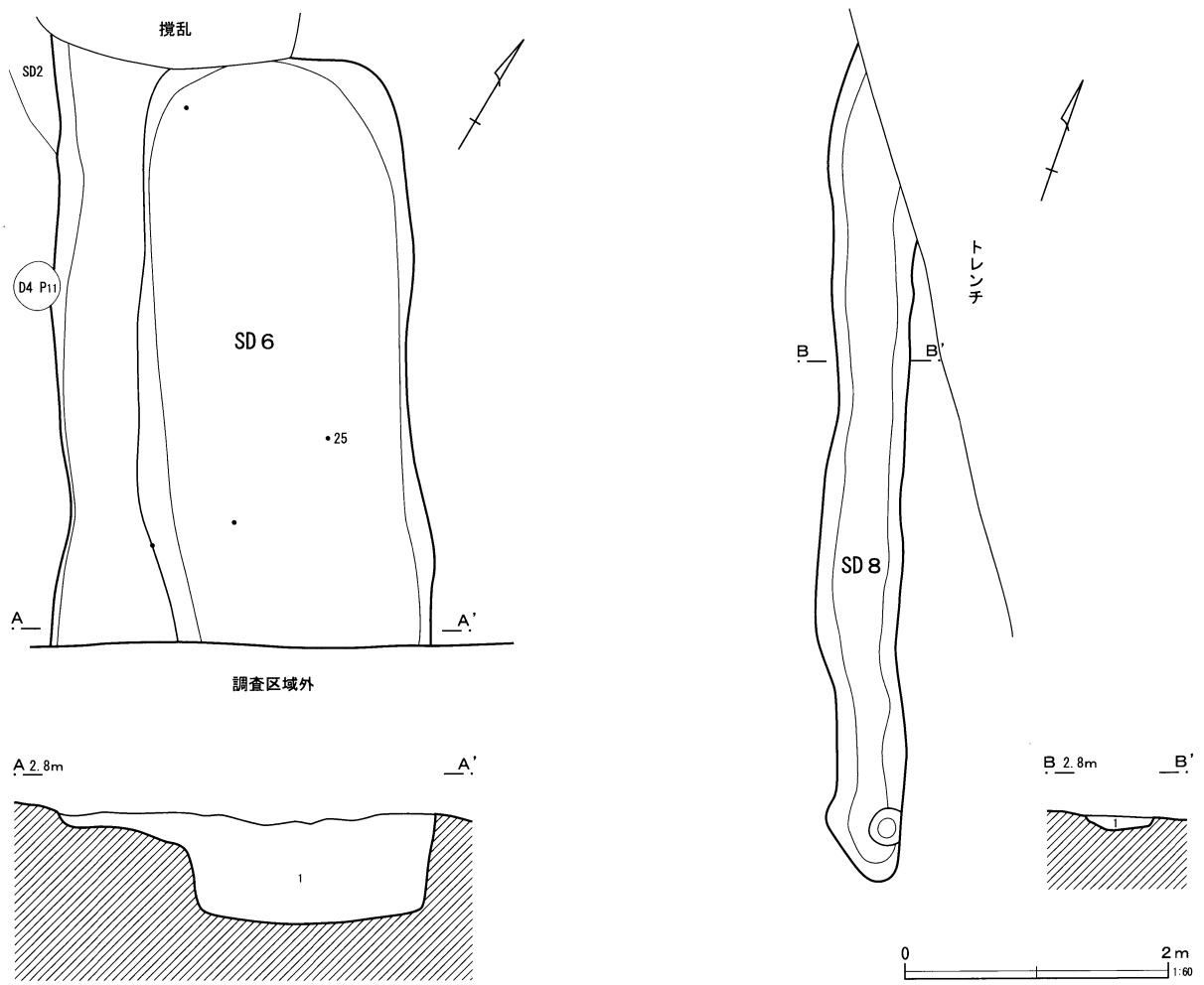
跡に切られる。第3号溝跡とほぼ並行しており、傾きはN-25°-Wである。長さは0.93m、幅は0.6~1.6m、深さは約17~35cmである。北端は浅く、掘り込みも不明瞭となり、南端は第4号井戸跡に切られている。

遺物は、図示したすり鉢の他に、焰烙の破片が出

土している。混入遺物として、高台付塊や土師器の破片がある。

第5号溝跡（第5図）

C-2・3グリッドに位置する。第1号溝跡を切る。第1号溝跡に沿うように検出された細く深い溝跡である。方位はN-59°-E、長さ0.6m、幅0.4m



第6号溝跡
1 黒褐色 しまりやや強い 径5~10cmの地山ブロック（暗褐色ブロックは少なく、ほとんどは暗灰色シルトのブロック）非常に多量
径1~2cmの地山ブロック多量

第8号溝跡
1 暗褐色 径0.5cm程の地山ブロック多量

第8図 第6・8号溝跡

ほど、深さ6cmである。第1号溝跡の調査を優先したため、北西側の立ち上がりを平面図に示すことができなかった。

遺物は出土していない。時期は不明である。

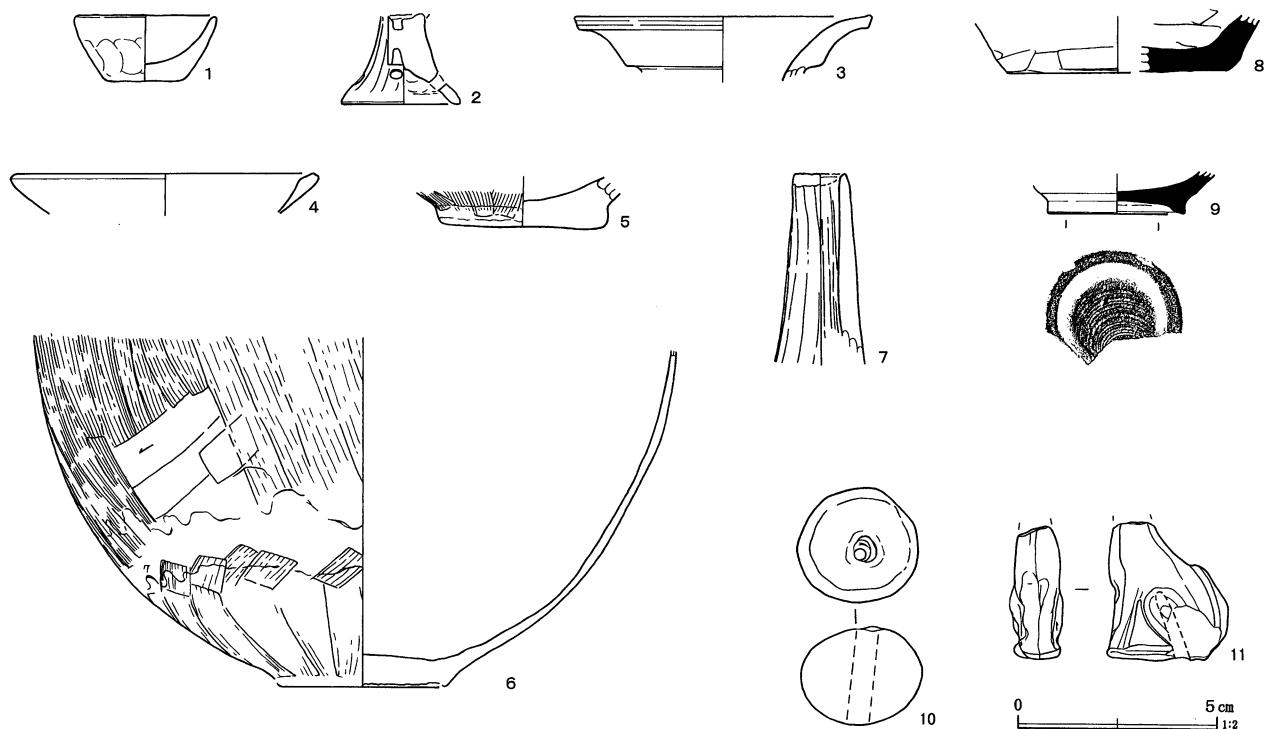
第6号溝跡（第8図）

D-4グリッドに位置する。第2号溝跡を切って構築されている。主軸方位はN-33°-Wで、北西端を擾乱によって切られ、南東側は調査区域外に延びるものと考えられる。規模は長さ4.5m、幅2.7m、深さ56~77cm、北東に向かって浅くなっていく。

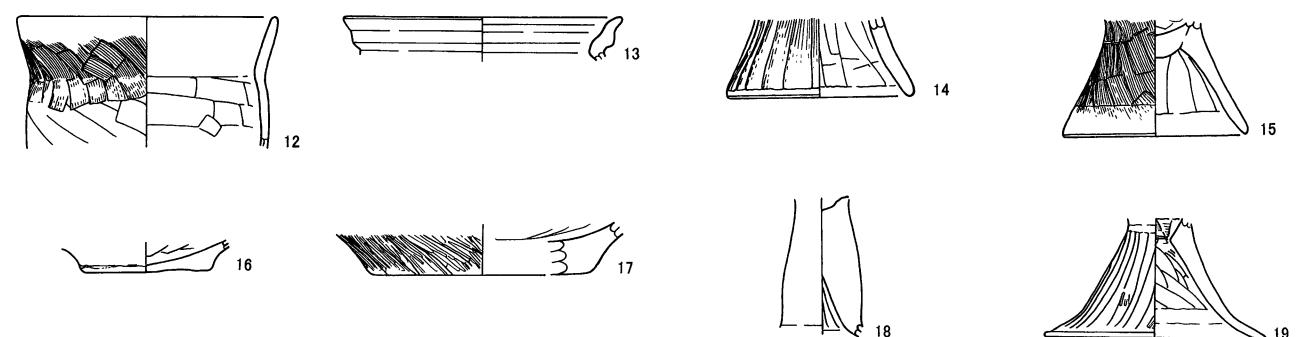
掘り込みは急で、南西辺は浅くテラス状に掘り込まれている。埋土に含まれる地山土ブロックは角の取れていらないしっかりとしたものであるため、人為的に一気に埋め戻された形跡がうかがえる。

遺物は、埋土の上位から破片が出土しており、その量は少ない。図示できたのは土師器高壇と、羽口のみである。この他に、土師器数点と、被熱し煤の付いた石が出土している。明確に本溝跡の時期を確定できる遺物は出土しなかったが、埋土の状況から近世に属する溝跡と判断した。

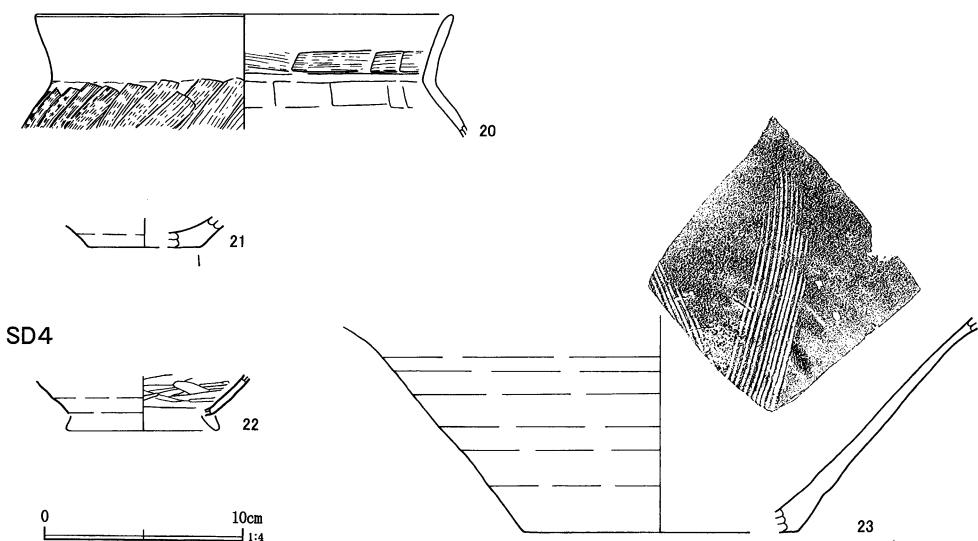
SD1



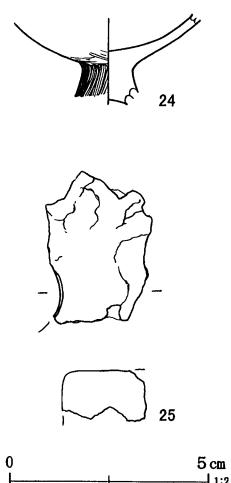
SD2



SD3



SD6



第9図 溝跡出土遺物

第2表 溝跡出土遺物観察表（第9図）

査定番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
9 1	SD 1	土師器	ミニチュア土器	(7.6)	3.3	3.6	1/2	白粒	普通	橙		8-1
9 2	SD 1	土師器	ミニチュア土器	[4.5]	6.0		脚部1/2	黒粒	普通	橙	4方向に穿孔	8-2
9 3	SD 1	土師器	壺	(15.0)	[3.3]		口縁1/5	砂粒 赤粒 磕	普通	橙		
9 4	SD 1	土師器	壺？	(15.6)	[2.0]		口縁1/2	赤粒 白粒	普通	橙		
9 5	SD 1	土師器	甕	[2.5]		8.6	底部のみ	砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい褐		
9 6	SD 1	土師器	壺	[17.5]	(8.6)		胴部1/4	砂粒 赤粒	普通	内面・黄灰 外・にぶい橙	風化顯著	10-1
9 7	SD 1	土師器	高坏	[9.5]			脚部1/3	白粒 黑粒	良好	浅黄橙		
9 8	SD 1	須恵器	甕	[2.8]	(11.0)		底部1/5	針 黒粒 磕	良好	灰	南北企産	
9 9	SD 1	須恵器	高台付塊	[2.0]		7.0	底部2/3	砂粒 白粒	良好	灰		
9 10	SD 1	土製品	土錘	径3.0 孔径0.5 幅2.4			完形	赤粒	普通	明赤褐		13-3
9 11	SD 1	土製品	土人形(狐)	高さ(3.5)	幅3.0		4/5	黒粒	良好	にぶい橙	型合わせ成形	13-5
9 12	SD 2	土師器	甕	(12.8)	[6.5]		破片	砂粒 赤粒 白粒	良好	にぶい黄褐		
9 13	SD 2	土師器	台付甕	(14.0)	[2.2]		口縁破片	砂粒 白粒	普通	黒褐		
9 14	SD 2	土師器	台付甕	[4.0]		(4.6)	脚部1/4	赤粒 白粒	普通	にぶい黄橙		
9 15	SD 2	土師器	台付甕	[5.8]		9.4	脚部4/5	雲 白粒	普通	にぶい褐		9-5
9 16	SD 2	土師器	甕	[1.5]	(6.6)		底部1/3	赤粒 白粒 黑粒	普通	橙		
9 17	SD 2	土師器	壺	(2.6)	(11.4)		底部破片	雲 赤粒 白粒	良好	にぶい褐		
9 18	SD 2	土師器	高坏	[7.0]			脚部1/2	赤粒 黑粒	普通	橙		
9 19	SD 2	土師器	高坏	[6.0]		11.2	脚部4/5	白粒 黑粒	普通	にぶい橙		9-1
9 20	SD 3	土師器	甕	(21.0)	[6.3]		口縁破片	赤粒 白粒	普通	にぶい褐		
9 21	SD 3	かわらけ	皿	[1.5]	(6.0)		底部破片	赤粒	普通	橙		
9 22	SD 4	内黒土器	高台付塊	[2.0]			破片	雲 赤粒 白粒	普通	褐		
9 23	SD 4	瀬戸	すり鉢	[10.8]	(14.0)		破片	白粒	良好	暗赤灰		
9 24	SD 6	土師器	高坏	[3.5]			1/4	赤粒 白粒	普通	にぶい橙		
9 25	SD 6	土製品	羽口	大きさ[3.6×2.3]	厚さ[1.2]		端部破片	白粒				15-1

第7号溝跡（第10図）

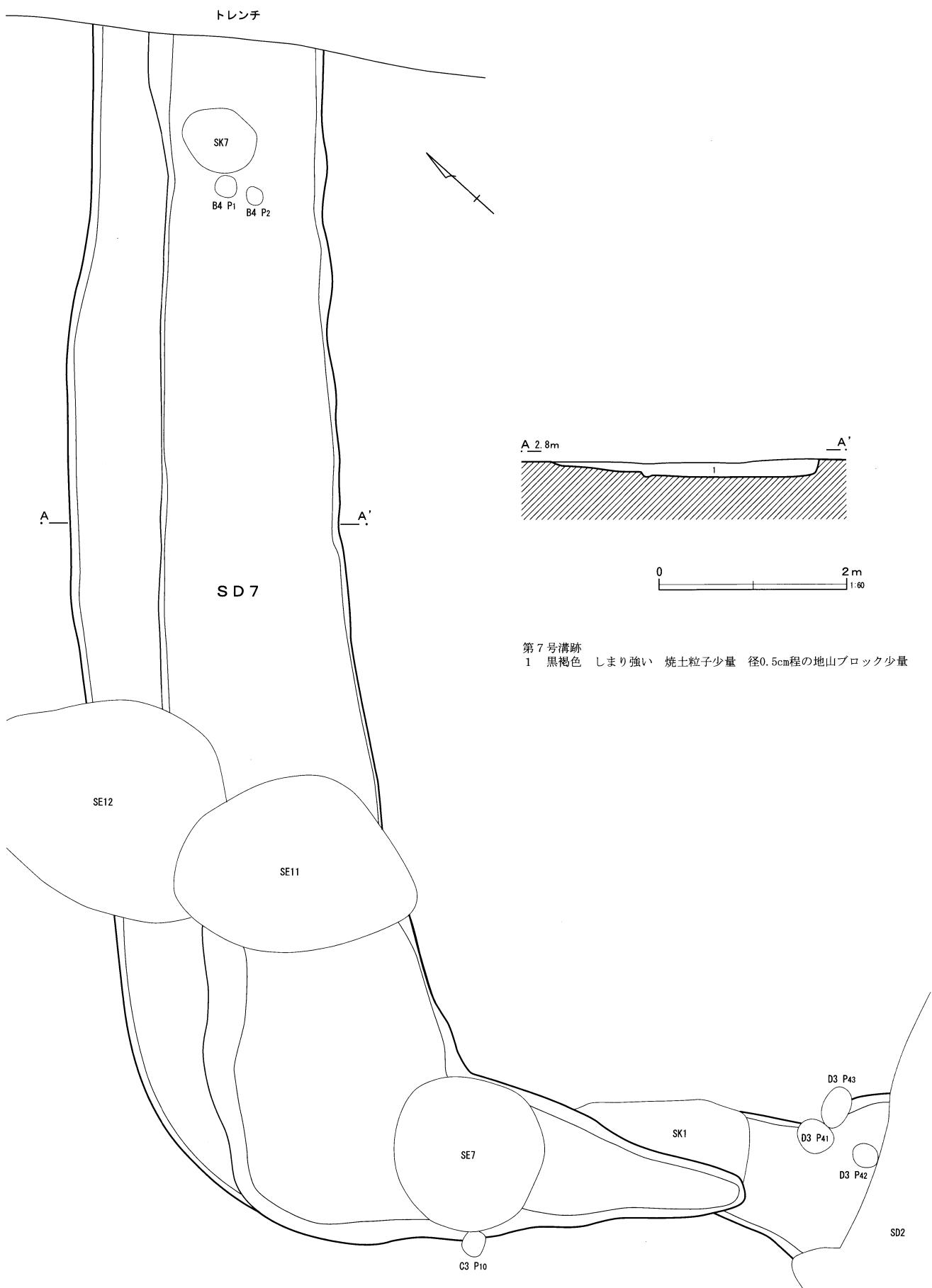
B-4、C-3・4、D-3グリッドに位置する。第1・2号溝跡の間にあり、これらと同様に、直角に曲がるL字状の形状を呈する。第1号土坑を切り、第7・11・12号井戸跡および第7号土坑に切られる。第2号溝跡との新旧関係は把握できない。第2号溝跡に接する点から北西に6.5m延びたところでほぼ直角に向きを変え、北東に11m延びて調査区域外にかかる。傾きは南西辺がN-40°-W、北西辺がN-45°-Eである。幅は、南西辺が狭く約1.2m、北西辺は2.8mである。深さは18~35cmである。北西辺には浅いテラス状の掘り込みが認められる。北東に向かって浅くなり、発掘区域外にかかるあたりで消滅するものと考えられる。

遺物は、今回検出された遺構の中でもっとも多い。北東部を除き、ほぼ全面に分布し、コーナー付近に集中域が認められる。垂直分布にも偏りはなく、ほ

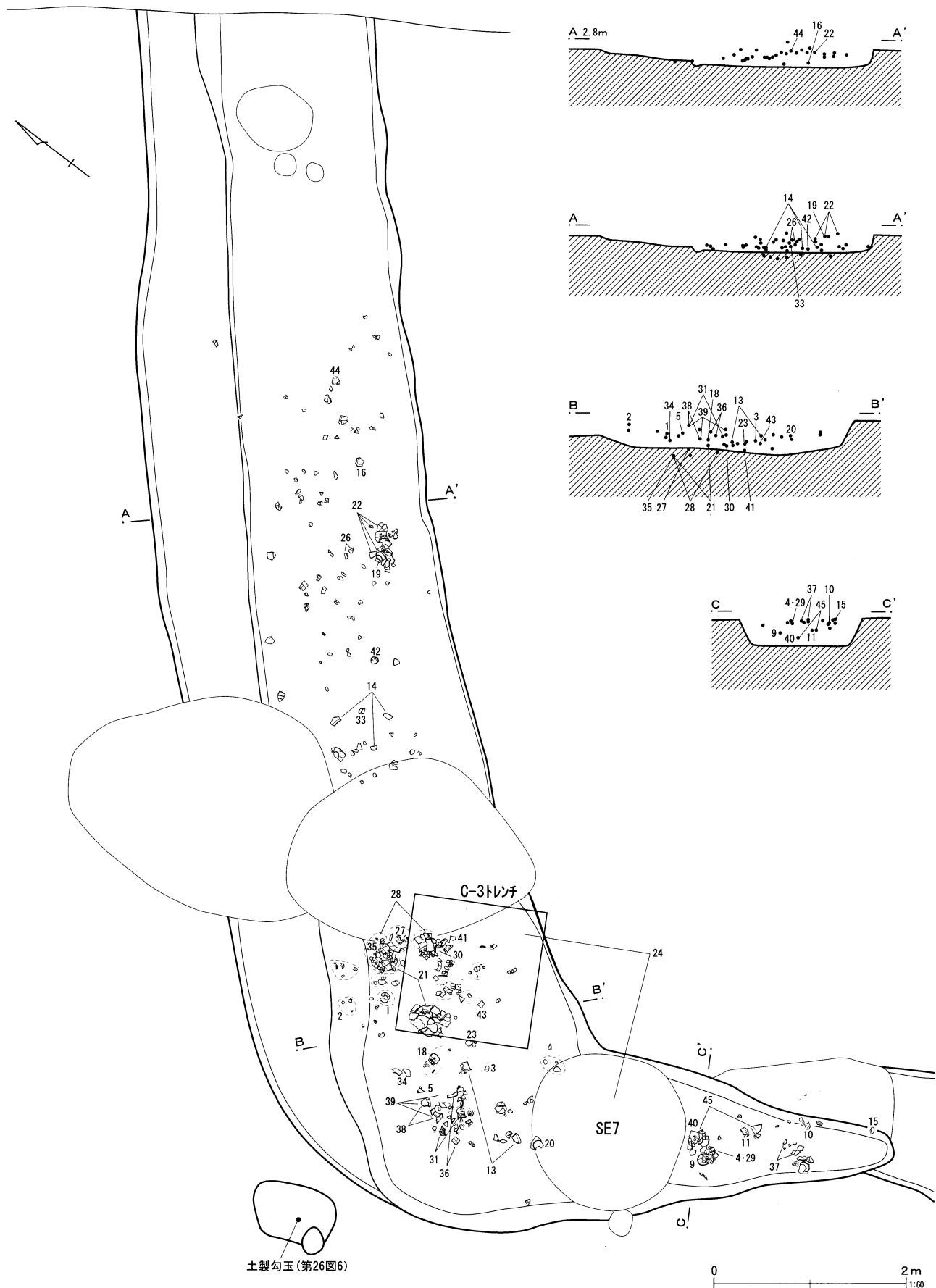
ぼ均等に出土している。試掘調査の際に、この溝跡の中心にトレント（C-3トレント）が設定されたため、そこから出土した遺物も本溝に伴うものとして掲載した。台付甕・壺・高坏・器台・ミニチュア土器などがある。注目される遺物として、千葉県などに分布する「器台形土器」の類例とみられる土器が2点（第12図23・24）出土している。ともにC-3トレントから出土したものだが、23は溝跡出土の破片と接合し、24は切り合う第7号井戸跡出土の破片と接合した。

第8号溝跡（第8図）

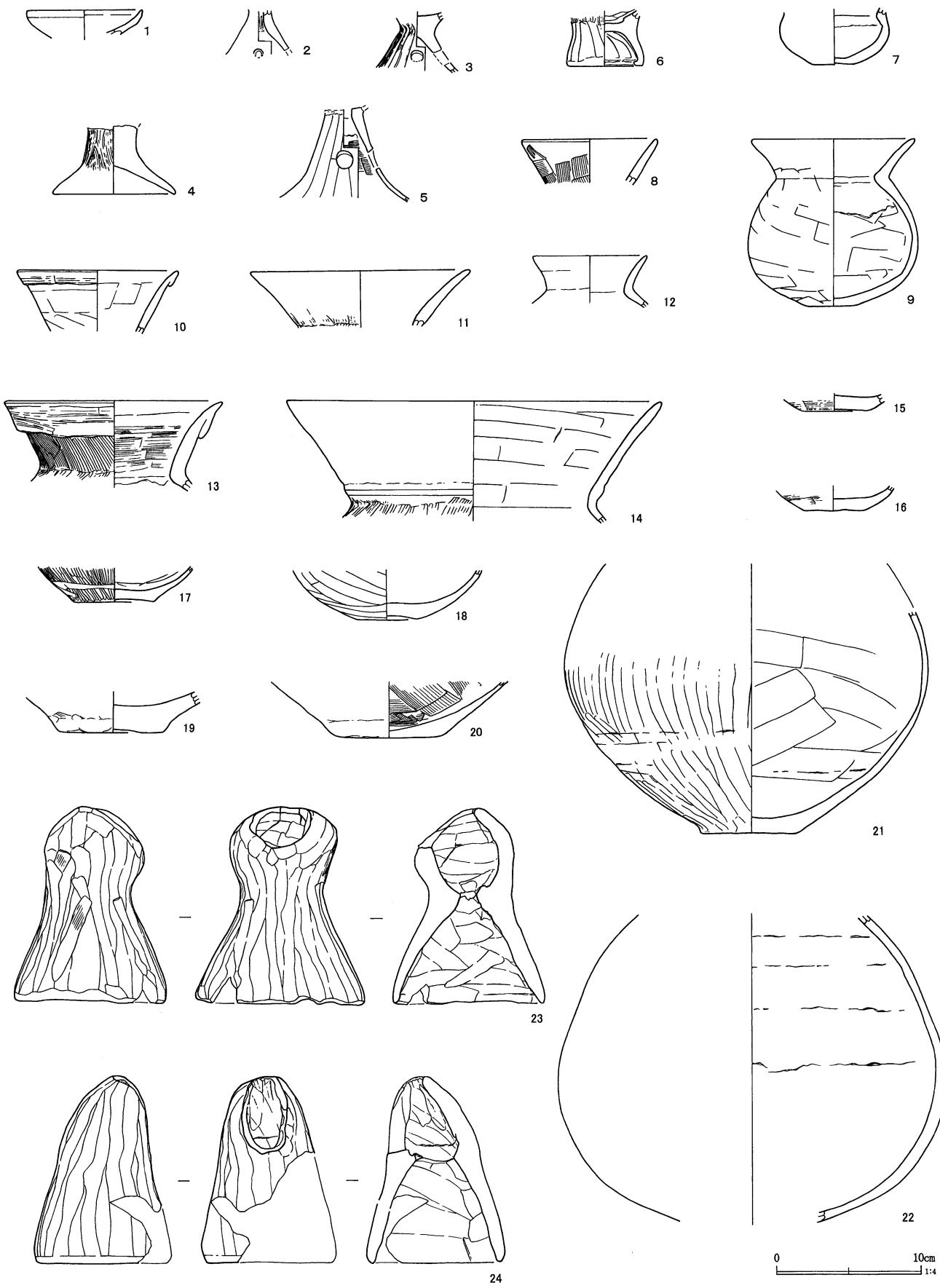
C-4グリッドに位置する。北側は発掘区域外にかかる。主軸方位はN-20°-Wである。検出された長さは6.3m、幅は0.5m程である。深さは10cm前後で、一定の傾向は認められない。掘り込みは浅い。遺物は出土しなかった。時期は不明である。



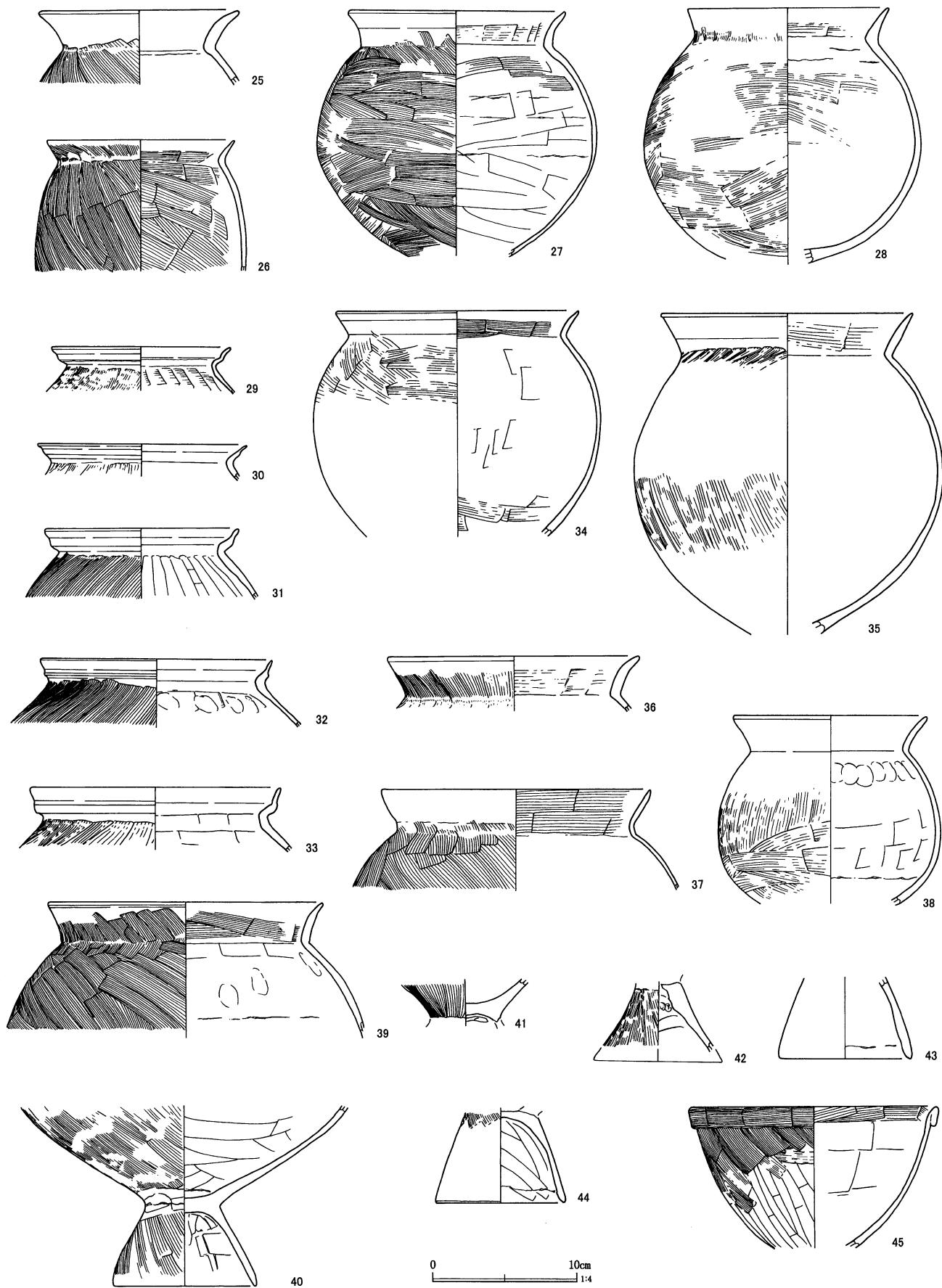
第10図 第7号溝跡



第11図 第7号溝跡遺物出土状況



第12図 第7号溝跡出土遺物（1）



第13図 第7号溝跡出土遺物 (2)

第3表 第7号溝跡出土遺物観察表（第12・13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	高壺	(8.0)	[1.9]		壺部のみ	赤粒 白粒	普通	明赤褐	風化顯著	
2	土師器	器台		[3.0]		脚部破片	黒粒	普通	明赤褐	風化顯著	
3	土師器	高壺		[4.2]		脚部1/4	赤粒	普通	橙	3方向に穿孔	
4	土師器	高壺		[4.6]	8.4	脚部のみ	黒粒	普通	にぶい黄橙		9-2
5	土師器	器台				脚部2/3	黒粒	普通	橙	3方向に穿孔	9-3
6	土師器	ミニチュア土器		[3.8]	5.2	脚部3/4	白粒	普通	黒	脚部	8-3
7	土師器	壺		[4.0]	2.8	胴部1/2	赤粒	普通	にぶい黄橙	風化顯著	
8	土師器	壺	(9.4)	(3.2)		口縁破片	赤粒	普通	橙		
9	土師器	壺	(11.2)	11.4	3.4	2/3	赤粒	普通	橙		10-3
10	土師器	壺	(11.0)	[4.4]		口縁破片	砂粒 赤粒	良好	にぶい赤褐		
11	土師器	壺	(15.2)	[3.8]		口縁破片	赤粒 黒粒	普通	にぶい黄橙	風化顯著	
12	土師器	壺	(8.0)	[3.5]		口縁1/2	黒粒	普通	黄橙	風化顯著	
13	土師器	壺	14.8	[6.2]		口縁2/3	雲 砂粒	普通	にぶい黄橙		10-2
14	土師器	甕	(26.0)	[8.4]		口縁破片	雲 白粒	普通	にぶい黄橙		
15	土師器	壺		[1.1]	(4.6)	底部破片	赤粒	良好	橙		
16	土師器	壺		[1.7]	4.0	底部のみ	赤粒	普通	橙		
17	土師器	壺		[2.5]	5.6	底部のみ	赤粒	良好	にぶい橙		
18	土師器	壺		[3.4]	4.0	底部のみ	雲 角 白粒	普通	にぶい黄橙		
19	土師器	壺		[2.8]	7.2	底部破片	砂粒	普通	内-灰黄褐 外-橙	木葉痕あり	
20	土師器	甕		[3.8]	(7.0)	底部破片	砂粒	普通	にぶい黄橙		
21	土師器	壺		[18.7]	6.6	1/2	砂粒 白粒	普通	赤褐		10-4
22	土師器	壺		[21.2]		胴部1/4	砂粒 赤粒	普通	橙	風化顯著	
23	土師器	異形器台		13.6	10.4~11.4	完形	砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい橙	C-3トレンチ出土	8-4
24	土師器	異形器台		12.8	(8.7)	3/4	赤粒 白粒	普通	にぶい橙	C-3トレンチ出土 SE7と接合	8-5
25	土師器	甕	(14.0)	[5.1]		口縁破片	赤粒 白粒	普通	にぶい褐		
26	土師器	甕	(13.0)	[9.0]		1/5	砂粒	普通	明赤褐		
27	土師器	台付甕	15.0	[17.0]		1/2	白粒	普通	にぶい橙		10-5
28	土師器	台付甕	12.0	[17.7]		胴部2/3	砂粒 白粒	普通	暗赤褐	風化顯著	10-6
29	土師器	台付甕	(12.4)	[3.0]		口縁破片	黒粒	普通	にぶい黄橙		11-6
30	土師器	台付甕	(14.6)	[2.5]		口縁2/3	雲 白粒	普通	にぶい黄橙	風化顯著	
31	土師器	台付甕	(13.4)	[4.9]		口縁破片	砂粒 赤粒	普通	橙		11-5
32	土師器	台付甕	(16.2)	[4.7]		口縁破片	赤粒	普通	橙		11-8
33	土師器	台付甕	(17.2)	[4.3]		口縁破片	雲 赤粒 白粒	普通	にぶい黄橙		11-7
34	土師器	甕	(16.8)	[15.6]		口縁~胴部破片	砂粒 赤粒 白粒	普通	にぶい黄橙		
35	土師器	台付甕	17.4	[22.2]		2/3	砂粒 赤粒	普通	にぶい赤褐	風化顯著	11-3
36	土師器	甕	17.4	[3.9]		口縁1/2	赤粒 白粒	普通	暗褐		
37	土師器	甕	(18.6)	[7.0]		口縁破片	赤粒	普通	にぶい橙		
38	土師器	壺	(13.4)	[13.0]		1/4	砂粒 白粒	普通	明赤褐		
39	土師器	甕	(19.0)	[9.5]		口縁1/3	赤粒 白粒	良好	にぶい黄橙		
40	土師器	台付甕		[12.5]	9.8	底部のみ	赤粒	普通	にぶい赤褐		11-1
41	土師器	台付甕		[3.0]		胴部破片	雲 砂粒 赤粒 白粒	普通	内-黒色 外-にぶい黄橙		
42	土師器	台付甕		[4.7]		脚部2/3	砂粒 赤粒	普通	赤褐		
43	土師器	台付甕		[5.7]	9.2	脚部破片	雲 角 砂粒	普通	にぶい黄褐	風化顯著	
44	土師器	台付甕		[6.4]	(8.8)	脚部1/2	雲 赤粒 黒粒	普通	にぶい橙		
45	土師器	甕	(17.0)	[9.8]		1/3	砂粒	普通	黄褐		11-2

2. 井戸跡

井戸跡は、17基検出された。湧水が著しく、ある程度掘り下げると壁の崩落する危険があるため、すべての井戸跡を底まで完掘することはできなかった。出土遺物は総じて少ない。そのほとんどが近世の井戸跡と考えられる。

第1号井戸跡（第14図）

B-2グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径154cm、短径149cm、長軸方向はN-28°-Eである。掘り下げた深さは94cmで、断面形は筒形である。埋土の堆積状況は、この井戸跡が人為的に埋め戻されたことを示している。

遺物は木製桶の底板が出土した。近世の井戸跡と考えられる。

第2号井戸跡（第14・15図）

B-2グリッドに位置する。上面の平面形は不整円形で、規模は長径193cm、短径171cm、長軸方向はN-39°-Eである。井戸本体部分の平面形は円形で、直径108cmである。掘り下げた深さは107cmで、断面形は漏斗形である。

遺物は、図示した内耳鍋と木製品(桶)のほかに、かわらけの破片や木片が数点出土した。これらの遺物から、本井戸跡は中世に属する可能性がある。

第3号井戸跡（第14図）

B-2・3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径128cm、短径112cm、長軸方向はN-17°-Eである。掘り下げた深さは99cmである。断面形はやや口の開く筒形である。

遺物は、焰烙の破片が1点出土したが、図示することはできなかった。近世の井戸跡と考えられる。

第4号井戸跡（第14図）

C-3グリッドに位置する。第3・4号溝跡を切り、第4号土坑に切られる。上面の平面形は楕円形で、規模は長径204cm、短径168cm、長軸方向はN-32°-Wである。井戸本体部分の平面形は楕円形で、規模は長径90cm、短径78cmである。掘り下げた深さは116cmで、断面形は漏斗形である。

遺物は、須恵器坏と木製品(堅杵)を図示したが、この他に五領期の土師器とかわらけの破片が数点出土している。これらの遺物から帰属時期を判断するのは難しいが、近世の第3・4号溝跡が埋没した後に構築されているので、それ以降のものと考えられる。

第5号井戸跡（第14図）

C-2・3、D-2・3グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径123cm、短径119cm、長軸方向はN-37°-Wである。掘り下げた深さは55cmである。断面形はわずかに口が開く筒形になるとを考えられる。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第6号井戸跡（第14図）

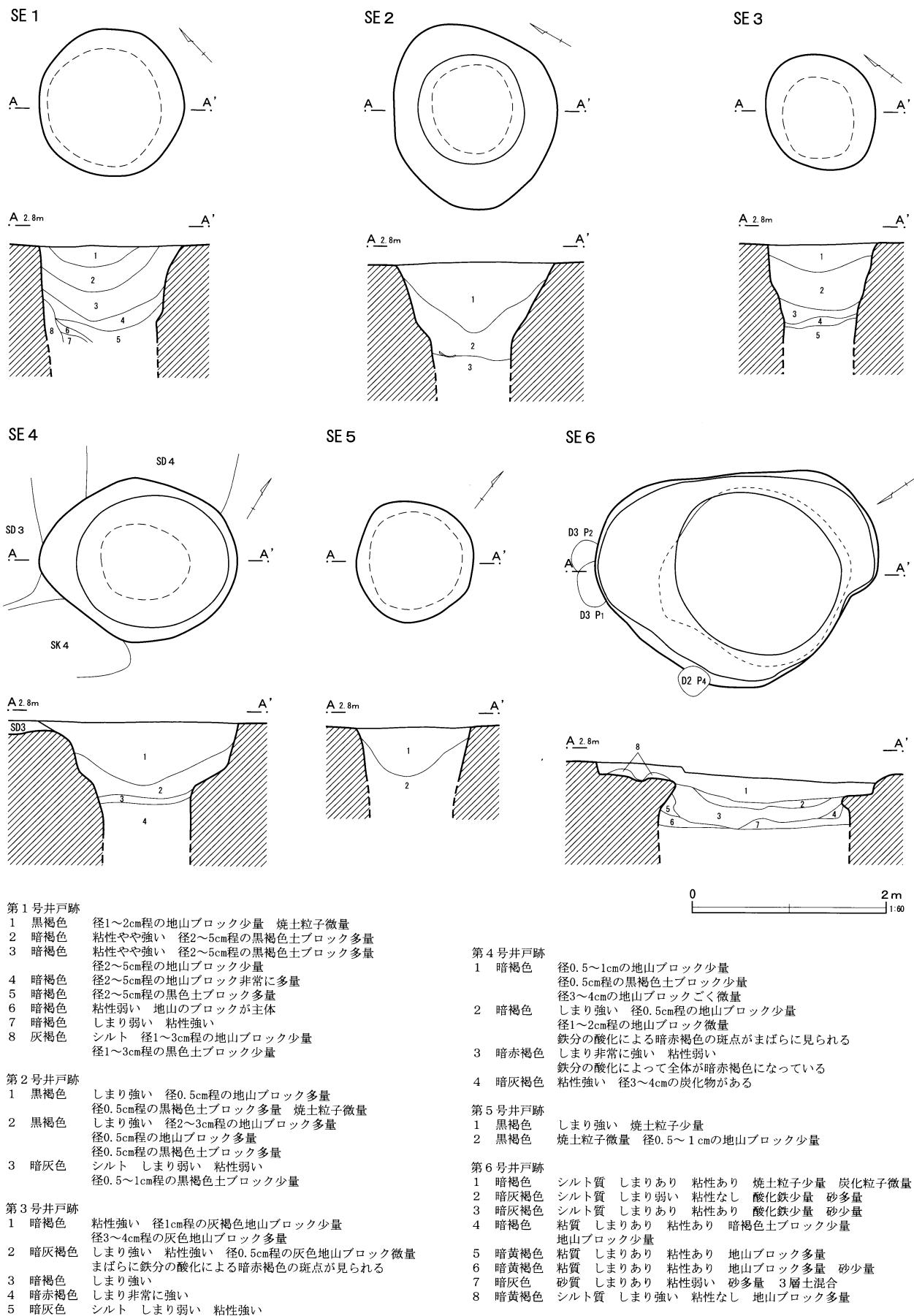
D-2・3グリッドに位置する。第17号井戸跡を切る。上面の平面形は不整楕円形で、規模は長径290cm、短径218cm、長軸方向はN-37°-Wである。井戸本体部分の平面形は楕円形で、規模は長径174cm、短径162cmである。壁面の一部が崩落したためか、上面からオーバーハングして本体部分に至る。掘り下げた深さは62cmである。本体の断面形は筒形になると推定される。

調査当初、第17号井戸跡との重複関係が把握できなかったため、2つの井戸跡の遺物が混在している可能性がある。碗・すり鉢・須恵器坏、火打金・鉄滓を図示した。この他に焰烙や土師器の破片、木片などが出土している。その割合および切り合い関係から、本井戸は近世に属するものと考えられる。

第7号井戸跡（第16図）

C-3グリッドに位置する。第7号溝跡を切る。上面の平面形は円形で、規模は長径162cm、短径158cm、長軸方向はN-48°-Wである。井戸跡本体の平面形は円形で規模は長径96cmである。掘り下げた深さは124cm、断面形は漏斗形である。

遺物には台付甕・埴など、五領期の土師器が含まれるが、これらの遺物は切り合う第7号溝跡に帰属



第14図 井戸跡 (1)

するものと考えられる。本井戸跡に伴う遺物としては、すり鉢や焰烙の破片が該当すると考えられる。近世の井戸跡であろう。

第8号井戸跡（第16図）

D-2・3グリッドに位置する。第2号溝跡と第17号井戸跡を切る。上面の平面形は円形で、規模は長径114cm、短径102cm、長軸方向はN-7°-Wである。壁面の崩落が激しいため、井戸跡本体の形状を把握するのは困難であるが、直径108cmの円形になるものと推定される。掘り下げた深さは88cmである。

遺物は、かわらけ・皿などが出土した。図示したもの以外には、焰烙の破片などがある。近世の井戸跡と考えられる。

第9号井戸跡（第16図）

D-3グリッドに位置する。第2号土坑を切る。平面形は円形で、規模は長径135cm、短径113cm、長軸方向はN-35°-Eである。掘り下げた深さは106cmである。断面形は口が開く筒形である。埋土の状況から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は、図示した土製品(円盤状土製品)と木製品(加工材)の他に、焰烙・陶磁器の破片、竹の破片などが出土した。近世の井戸跡と考えられる。

第10号井戸跡（第16図）

C-3グリッドに位置する。第1号溝跡と第4号溝跡を切る。平面形は円形で、規模は長径80cm、短径78cm、長軸方向はN-57°-Eである。掘り下げた深さは120cmである。断面形は口がわずかに開く筒形である。

遺物は出土しなかった。時期は不明であるが、第4号溝跡との切り合い関係から、近世以降の井戸跡と考えられる。

第11号井戸跡（第16図）

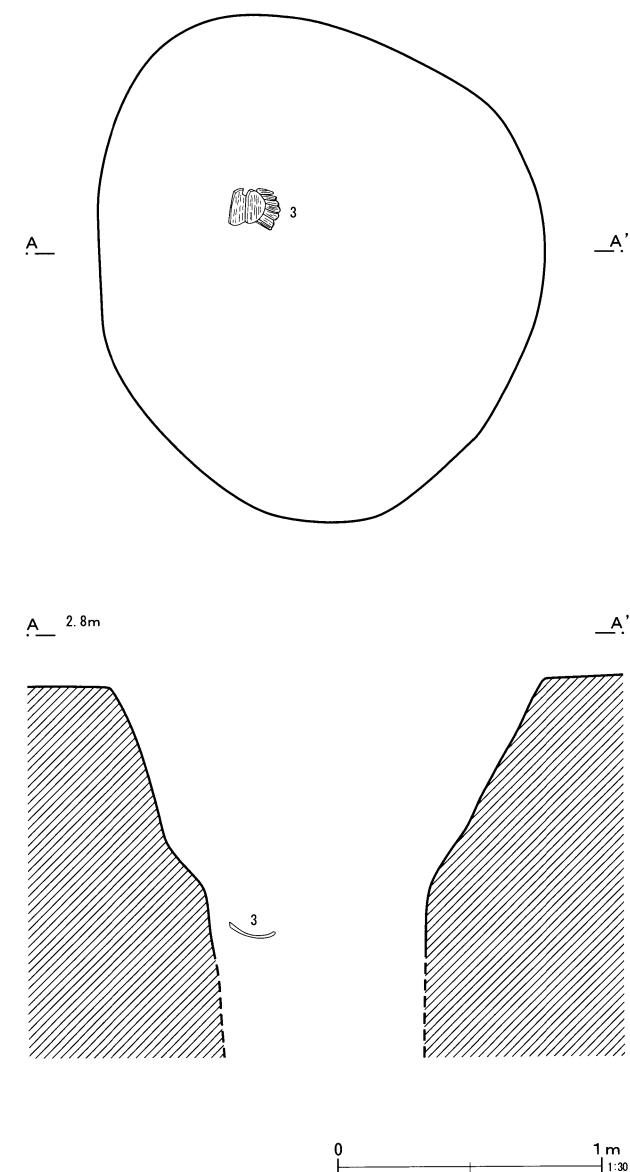
C-3グリッドに位置する。第7号溝跡および第12号井戸跡を切る。南壁は調査中に崩落してしまい、原形を留めていない。上面の平面形は楕円形で、規模は長径推定222cm、短径189cm、長軸方向はN-

26°-Wである。井戸本体部分の平面形は楕円形で、規模は長径150cm、短径132cmである。掘り下げた深さは87cmである。断面形は漏斗形になるとを考えられる。

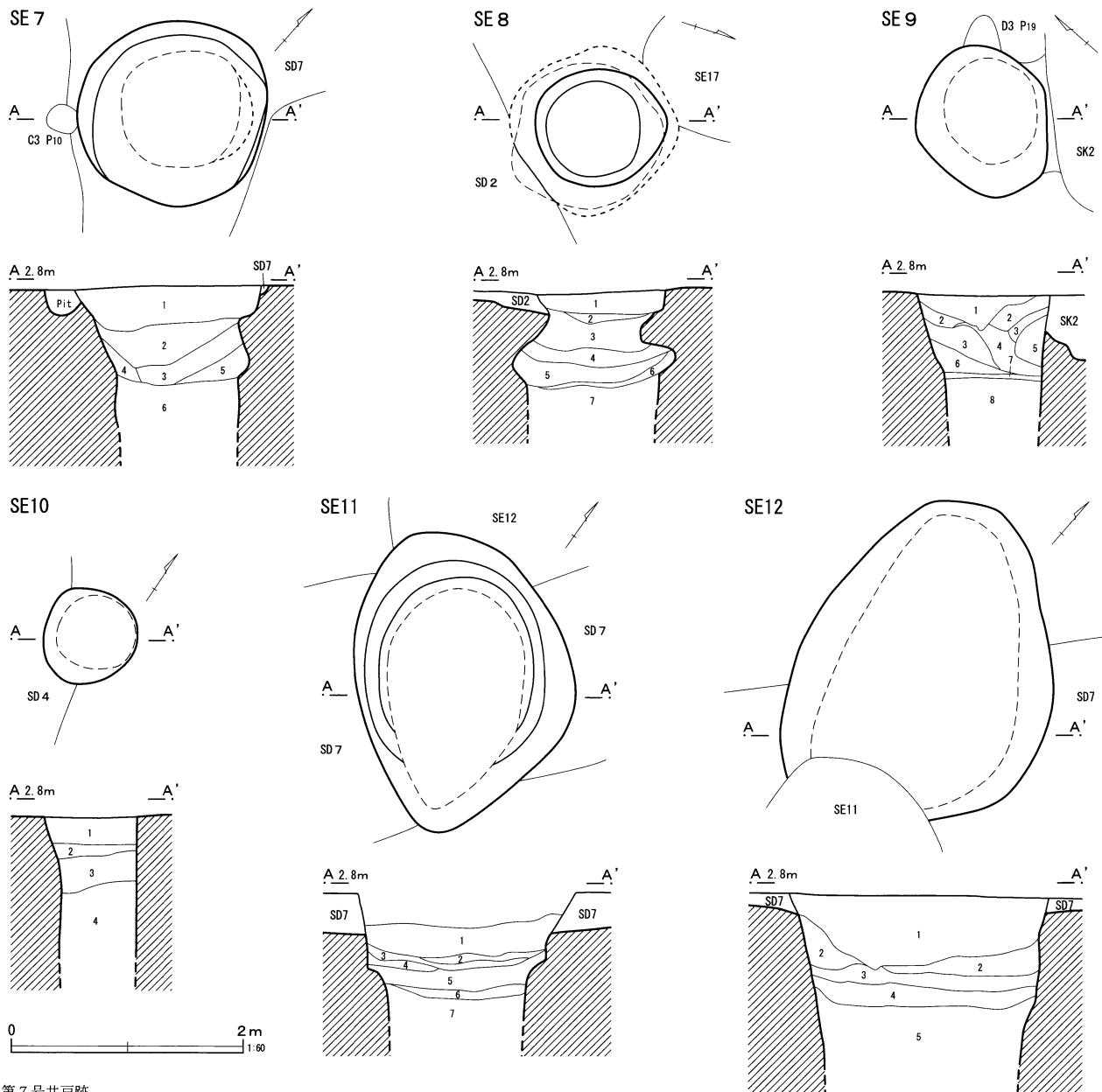
遺物は、土師器甕と木製品(加工材)を図示したが、前者は第7号溝跡からの混入と考えられる。この他に陶器の破片や木片が出土している。近世の井戸跡と考えられる。

第12号井戸跡（第16図）

C-3グリッドに位置する。第7号溝跡を切り、第11号井戸跡に切られる。平面形は不整楕円形で、規模は長径246cm、短径220cm、長軸方向はN-



第15図 第2号井戸跡遺物出土状況



第7号井戸跡

- | | |
|-------|---|
| 1 褐色 | しまりあり 灰白色シルトブロック(3~5mm)を全体に含む
焼土・炭化物少量 |
| 2 褐色 | しまりあり 灰白色シルトブロック(3~5mm)まばら 炭化物少量 |
| 3 暗褐色 | しまりあり 灰白色シルトブロック(1~2cm)少量 |
| 4 暗褐色 | しまりあり 灰白色シルトブロック(1~2cm)多量 |
| 5 暗褐色 | しまりあり 灰白色シルトブロック(3~5mm)少量 |
| 6 黒灰色 | 粘土質 しまりあり 粘性強い
淡緑灰色シルトブロック(3~5mm)少量 |

第8号井戸跡

- | | |
|--------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | 径0.5~2cm程度の地山ブロック多量 地山粒子多量 |
| 2 暗褐色 | 径0.5~2cm程度の地山ブロック少量 地山粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 粘性弱い 地山粒子少量 焼土粒子ごく微量 |
| 4 黒褐色 | 径2cm程度の地山ブロック微量 地山粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 粘性強い 径2~5cm程度の地山ブロック多量 地山粒子多量 |
| 6 暗赤褐色 | 5層と同じ 鉄分が地下水により酸化している |
| 7 暗灰色 | シルト しまり弱い 粘性弱い 混合物はほとんど見られない |

第9号井戸跡

- | | |
|--------|--|
| 1 暗褐色 | シルト しまり強い 粘性大 白色粘土ブロック多量
黄色地山粒子多量 人為的埋土 |
| 2 暗褐色 | シルト しまり強い 粘性大 白色粘土ブロック少量
黄色地山粒子少量 人為的埋土 |
| 3 暗褐色 | シルト しまりあり 粘性あり 黄色地山粒子微量 |
| 4 暗灰色 | 砂 しまり弱い 粘性なし 黄色地山粒子微量 |
| 5 暗黄褐色 | シルト しまりあり 粘性あり 地山ブロック多量 |
| 6 暗褐色 | シルト しまりあり 粘性あり 地山大ブロック(5cm)少量 |
| 7 赤褐色 | 砂 しまり強大 粘性なし 酸化鉄が凝集してきわめてかたい |
| 8 黒褐色 | 粘質 しまりあり 粘性大 砂ブロック少量 |

第10号井戸跡

- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色 | しまり強い 径1~3cm程の黒褐色土ブロック少量
径0.5~1cm程の地山ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | しまり強い 径1~3cm程の黒褐色土ブロック非常に多量
径0.5cm程の黒褐色土ブロック多量 |
| 3 暗褐色 | しまり強い 径1~2cm程の地山ブロック少量
径0.5~1cm程の黒褐色土ブロック少量 |
| 4 暗灰褐色 | しまり強い 径1~2cm程の黒褐色土ブロック少量
径0.5~1cm程の地山ブロック少量 |

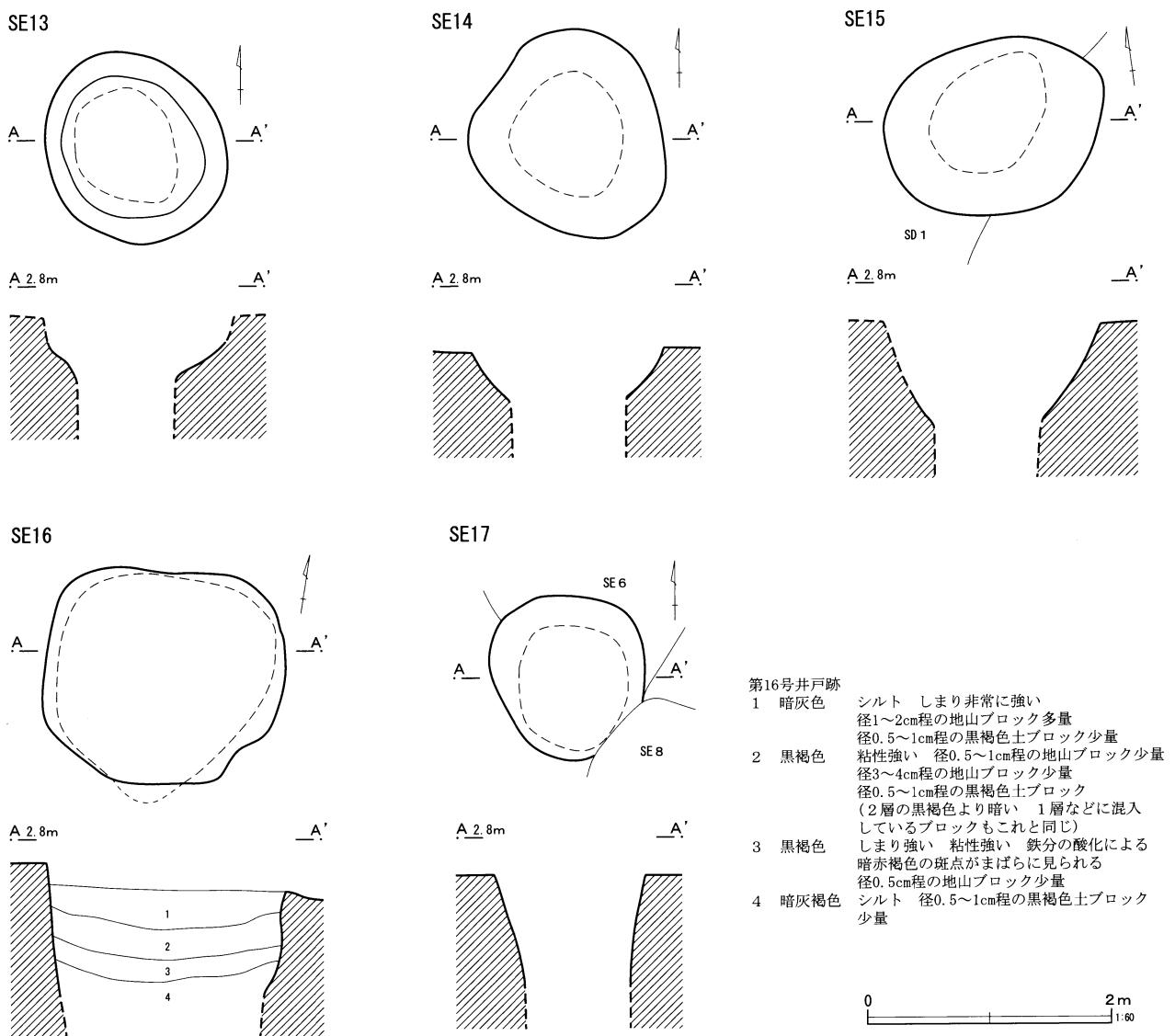
第11号井戸跡

- | | |
|--------|--|
| 1 灰白色 | 粘土 しまり強い 粘性強い 径5~10cmの黒褐色土ブロック
微量 焼土粒子ごく微量 |
| 2 黒褐色 | しまり強い 粘性弱い 焼土粒子微量 黑褐色粒子多量
径1cm程の地山ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 粘性強い 径1~2cm程の地山ブロック多量 地山粒子多量 |
| 4 黑褐色 | 粘性弱い 径0.5cm程の地山ブロック微量 |
| 5 暗赤褐色 | シルト しまり非常に強い 全体が鉄分の酸化によって変色
シルト しまり非常に強い まばらに鉄分の酸化による斑点が
見られる 径0.5cm程の灰褐色土ブロック少量 |
| 7 暗灰褐色 | シルト しまり強い 粘性強い |

第12号井戸跡

- | | |
|--------|-----------------|
| 1 暗褐色 | 鉄分・マンガン・地山粒子少量 |
| 2 暗黄褐色 | 黄色地山ブロック多量 |
| 3 暗褐色 | 地山粒子ブロック少量 |
| 4 暗褐色 | 地山ブロック多量 やや青味あり |
| 5 暗灰青色 | 地山ブロック少量 還元色 |

第16図 井戸跡 (2)



第17図 井戸跡 (3)

17°-Wである。断面形はやや口の開く筒形である。
掘り下げた深さは148cmである。

遺物は、本遺跡で検出された井戸跡の中ではもつとも多く、皿・大鉢・碗・鉢・かわらけ・すり鉢、瓦、砥石・石臼などがある。このうち、皿(第19図4)・碗(第19図6)・大鉢(第19図7)は、第16号井戸跡の出土遺物と接合した。これは、同一個体が別々の井戸跡に廃棄されたことを示している。近世の井戸跡と判断される。

第13号井戸跡 (第17図)

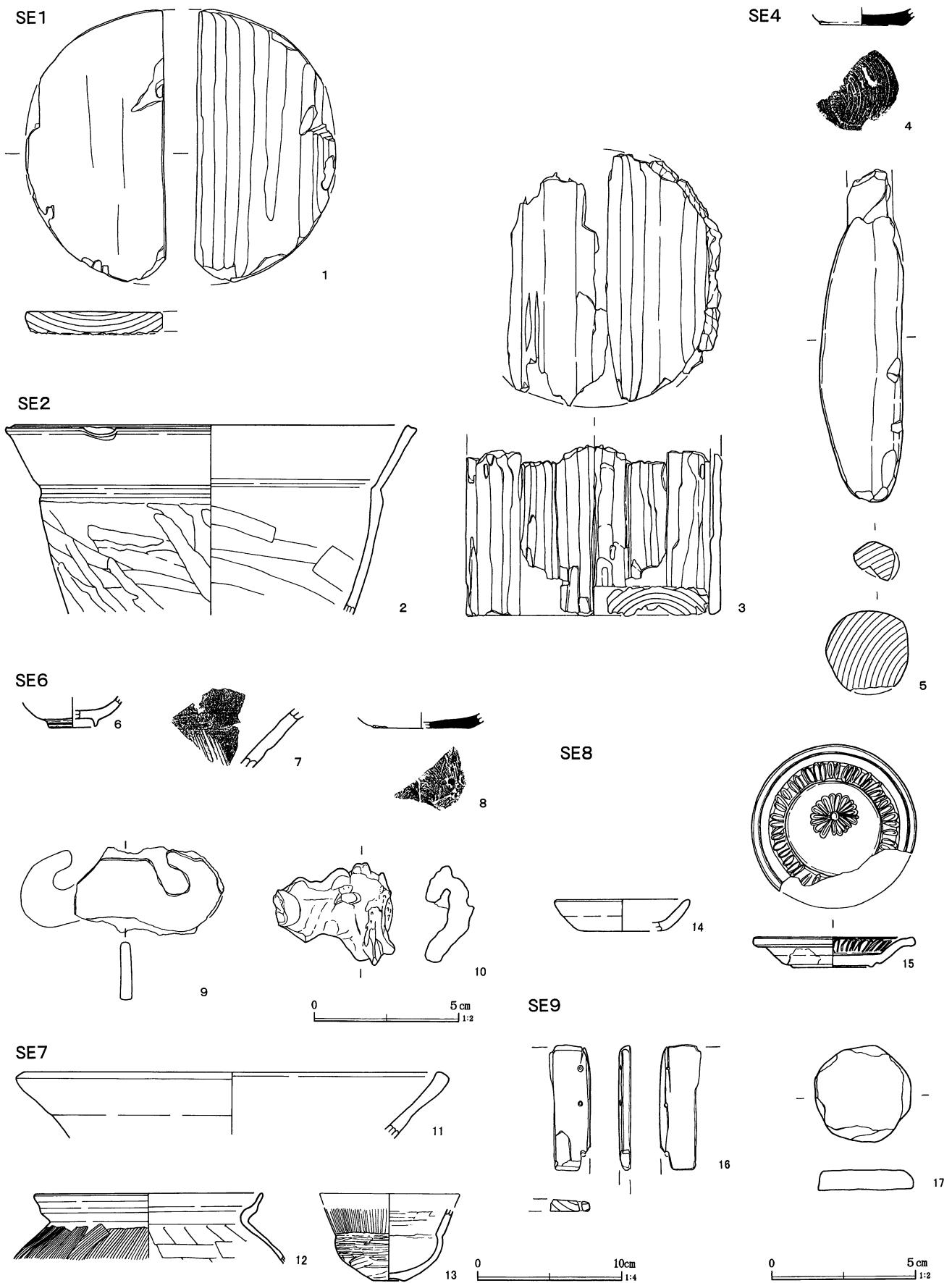
B-3グリッドに位置する。第1号溝跡を切る。
上面の平面形は楕円形で、規模は長径159cm、短径

142cm、長軸方向はN-42°-Wである。井戸跡本体部分の平面形は楕円形で、規模は長径102cm、短径84cmである。断面形は漏斗形である。掘り下げた深さは52cmである。

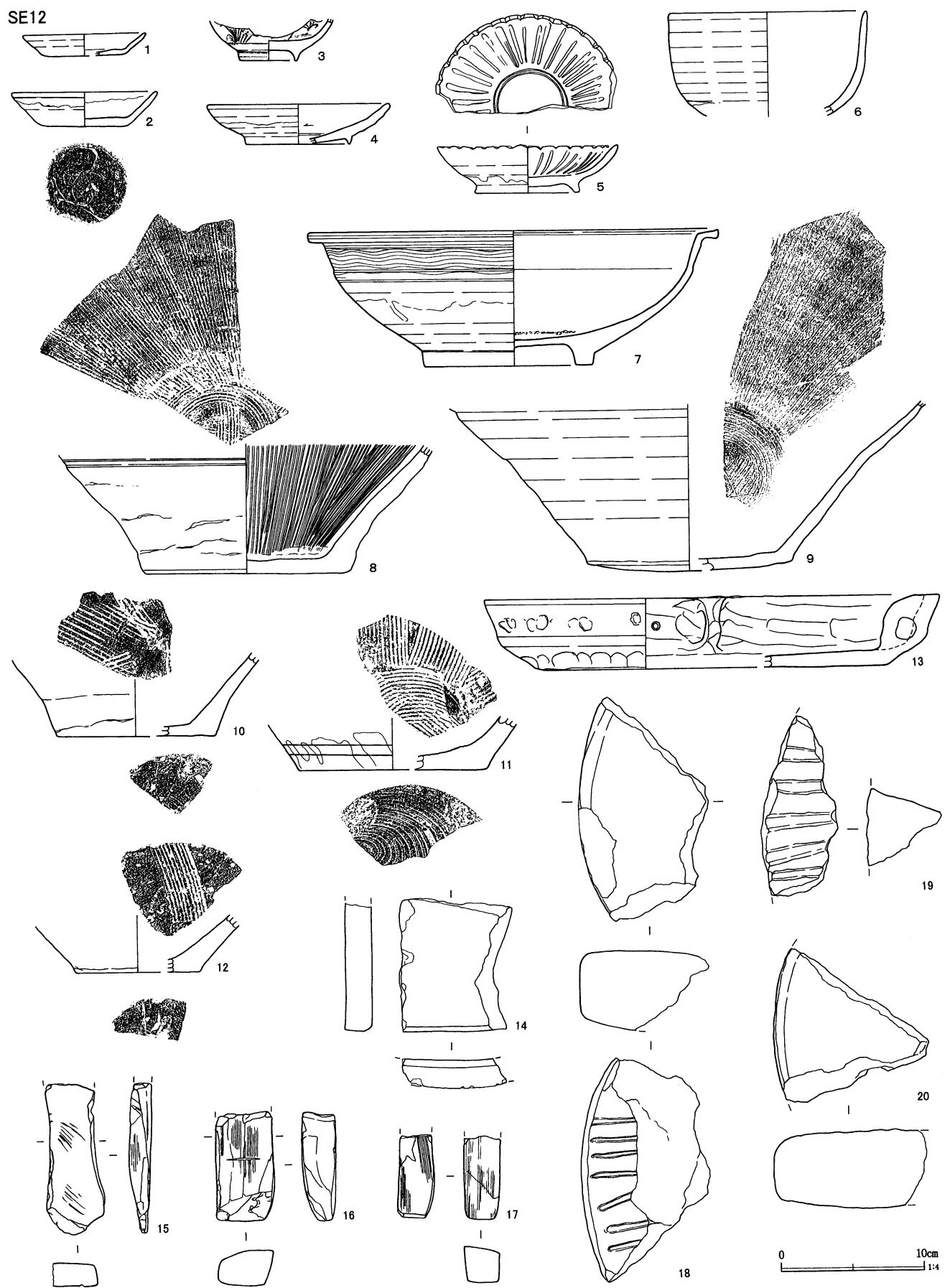
遺物は、第1号溝跡に帰属するものと考えられる五領期の土師器が数点出土した。本井戸跡に伴う遺物はなく、時期は不明である。

第14号井戸跡 (第17図)

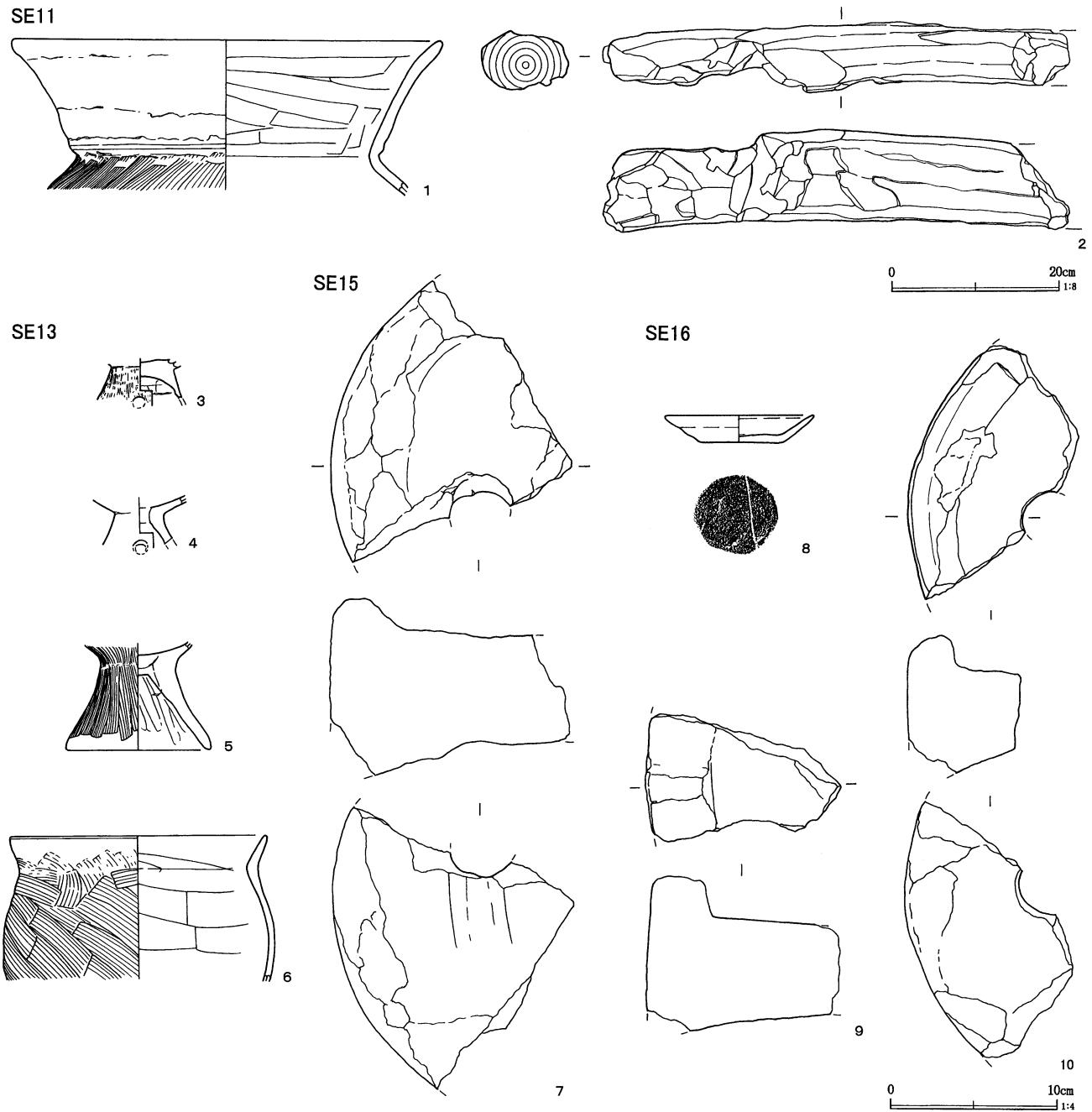
D-5グリッドに位置する。上面の平面形は不整円形で、規模は長径163cm、短径155cm、長軸方向はN-46°-Wである。井戸本体部分の平面形は楕円形で、規模は長径102cm、短径90cmである。断面形



第18図 井戸跡出土遺物 (1)



第19図 井戸跡出土遺物 (2)



第20図 井戸跡出土遺物 (3)

は漏斗形である。掘り下げた深さは42cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第15号井戸跡 (第17図)

C-3グリッドに位置する。第1号溝跡を切る。上面の平面形は楕円形で、規模は長径188cm、短径144cm、長軸方向はN-73°-Eである。井戸本体部分の平面形は楕円形で、規模は長径114cm、短径84cmである。断面形は漏斗形である。掘り下げた深さは84cmである。

遺物は石臼の破片が出土した。土器などの遺物は出土しなかった。近世の井戸跡と考えられる。

第16号井戸跡 (第17図)

C-4、D-4・5グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長径205cm、短径192cm、長軸方向はN-45°-Wである。断面形は筒形である。掘り下げた深さは109cmである。埋土の状況から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物はかわらけ、石臼などが出土した。近世の井

第4表 井戸跡出土遺物観察表（第18・19・20図）

査定番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
18 1	SE 1	木製品	桶(底板)	長さ[18.6] 幅[9.6] 厚さ1.6								
18 2	SE 2	在地産	内耳鍋	(27.4)	[13.2]		破片	雲	普通	黒	外面に煤付着	
18 3	SE 2	木製品	桶	底板径(18.0)	側板長[11.8]							
18 4	SE 4	須恵器	壺		[1.1]	5.8	底部1/2	赤粒 黒粒	不良	にぶい橙	ロクロ土師	
18 5	SE 4	木製品	豎杵	長さ[23.0]	幅 握部[3.0]	搗部[5.7]						
18 6	SE 6	肥前	碗		[2.0]	(3.4)	底部破片					
18 7	SE 6	須恵器	すり鉢				破片					
18 8	SE 6	須恵器	壺		[1.1]	(6.8)	底部破片	赤粒	良好	明緑灰		
18 9	SE 6	鉄製品	火打金	長さ[5.2]	幅2.8	厚さ0.4						15-3
18 10	SE 6	鉄滓	鋳造滓	長さ4.2	重さ14.9							15-2
18 11	SE 7	瀬戸美濃	すり鉢	(29.0)	[4.6]		口縁破片	白粒	良好	赤黒		
18 12	SE 7	土師器	台付甕	(16.0)	[5.0]		口縁破片	赤粒	普通	明黄褐		
18 13	SE 7	土師器	壺		[5.0]	2.0	1/3	白粒	普通	明赤褐		9-4
18 14	SE 8	かわらけ	皿	(9.4)	2.1	(6.0)	破片	白粒	普通	にぶい橙		
18 15	SE 8	瀬戸美濃	折口小皿	11.0	2.0	5.5	4/5	砂粒	良好	黄褐		12-1
18 16	SE 9	木製品	部材	長さ[8.7]	幅[2.8]	厚さ0.8						
18 17	SE 9	土製品	円盤状土製品	3.3			完形	白粒	普通	にぶい褐	土器破片の再利用	13-6
19 1	SE 12	かわらけ	小皿	(8.6)	1.5	(5.8)	1/5	赤粒	普通	明褐		
19 2	SE 12	かわらけ	灯明皿	(10.3)	2.4	5.8	2/3	角 白粒	不良	にぶい黄橙		12-3
19 3	SE 12	肥前系	碗		[2.9]	4.2	1/4		良好	灰白	草花文	
19 4	SE 12	瀬戸美濃	皿	12.8	2.8	7.4	1/2	白粒	良好	灰オリーブ	SE16と接合	12-4
19 5	SE 12	瀬戸美濃	菊皿	(12.6)	3.3	7.4	1/2	白粒	良好	灰オリーブ		12-2
19 6	SE 12	瀬戸美濃	碗	(13.8)	[7.4]		1/5	白粒	良好	灰白	SE16と接合	
19 7	SE 12	唐津	大鉢	(28.6)	9.4	11.8	2/3	白粒	良好	暗褐	SE16と接合	12-7
19 8	SE 12		すり鉢		[9.0]	(14.0)	底部1/4	白粒	良好	にぶい赤褐		
19 9	SE 12	信楽?	すり鉢		[11.7]	(14.4)	1/5	砂粒 白粒	良好	灰赤		
19 10	SE 12	瀬戸美濃	すり鉢		[5.9]	(11.0)	底部破片	白粒	普通	暗青灰		
19 11	SE 12	瀬戸美濃	すり鉢		[3.7]	(13.0)	底部破片	黒粒	普通	暗赤褐		
19 12	SE 12	瀬戸美濃	すり鉢		[4.0]	(9.0)	底部破片	白粒	普通	暗青灰		
19 13	SE 12	在地産	焰烙	(32.0)	4.9	(24.0)	破片	砂粒 白粒	普通	明赤褐	外面煤付着	
19 14	SE 12	瓦	平瓦	長さ[9.3]	幅[7.9]	厚さ1.8			普通	灰		
19 15	SE 12	石製品	砥石	幅4.0	長さ[10.5]	厚さ1.6				オリーブ灰		14-5
19 16	SE 12	石製品	砥石	幅4.1	長さ[7.6]	厚さ2.5				灰		14-6
19 17	SE 12	石製品	砥石	幅2.6	長さ[5.8]	厚さ2.5				灰白		14-7
19 18	SE 12	石製品	石臼	幅[9.0]	厚さ5.5						安山岩	14-1
19 19	SE 12	石製品	石臼	幅[5.4]	厚さ[5.5]						砂岩	
19 20	SE 12	石製品	石臼	幅[11.0]	厚さ5.5						砂岩	14-2
20 1	SE 11	土師器	甕	(26.0)	[9.4]		口縁破片	白粒	普通	灰黄褐		
20 2	SE 11	木製品	部材	長さ[55.8]	幅11.2	厚さ8.0						
20 3	SE 13	土師器	高壺		[2.5]		脚部破片	赤粒	普通	にぶい橙		
20 4	SE 13	土師器	器台		[3.0]		脚部破片	黒粒	普通	にぶい黄橙		
20 5	SE 13	土師器	台付甕		[6.5]	8.6	脚部1/2	雲 白粒 黒粒	普通	にぶい橙		9-6
20 6	SE 13	土師器	甕	(15.4)	[8.8]		口縁破片	砂粒	普通	にぶい橙		
20 7	SE 15	石製品	石臼	幅[14.5]	厚さ6.5~[10.5]						砂岩	14-3
20 8	SE 16	かわらけ	皿	9.0	1.6	4.8	2/3					12-5
20 9	SE 16	石製品	石臼	幅[11.3]	厚さ5.5~9.2						砂岩	
20 10	SE 16	石製品	石臼	幅[10.0]	厚さ4.7~[8.2]						安山岩	14-4

戸跡と判断される。

第17号井戸跡（第17図）

D-2・3グリッドに位置する。第6・8号井戸跡に切られる。平面形は楕円形で、規模は長径133cm、短径126cm、長軸方向はN-0°である。断面形

はやや口の開いた筒形である。掘り下げた深さは93cmである。

遺物は出土しなかった。第6号井戸跡の出土遺物の中に含まれている可能性があるが、本井戸跡の時期を判断する材料に欠ける。

3. 土坑

土坑は15基検出された。このうち、古墳時代前期に属する土坑は、第1・14号土坑の2基、近世の土坑は、第2～6・9・11号土坑の7基である。特に第9号土坑からは、一括の良好な資料が出土している。

第1号土坑（第21図）

C・D-3グリッドに位置する。第7号溝跡に切られる。平面形は長方形と推定される。検出された部分の規模は、長径180cm、短径68cm、長軸方向はN-41°-Wである。深さは22cmである。

遺物は、五領式期の土師器が数点出土した。破片のため図示できる遺物はないが、切り合い関係から、古墳時代前期の土坑と考えられる。

第2号土坑（第21図）

D-3グリッドに位置する。第3号土坑を切り、第9号井戸跡に切られている。平面形は長楕円形で、規模は長径210cm、短径88cm、長軸方向はN-48°-Eである。南東辺がえぐれており、深さは60cmである。

遺物は、図示したかわらけの他に、焙烙の破片などが出土している。近世の土坑と考えられる。

第3号土坑（第21図）

D・E-3グリッドに位置する。第2号土坑に切られる。平面形は不整円形で、規模は長径134cm、短径125cm、長軸方向はN-90°-Eである。深さは32cmである。

遺物は、須恵器壊とすり鉢の破片が出土した。第2号土坑と埋土の状況が類似することなどから、本土坑の時期は近世と考えられる。

第4号土坑（第21図）

C-3グリッドに位置する。第4号井戸跡を切る。平面形は長方形で、規模は、長径158cm、短径80cm、長軸方向はN-62°-Eである。掘り込みは浅く、深さは14cmである。

遺物は瀬戸産の緑釉小皿が1点、底面近くから出土した。近世の土坑と考えられる。

第5号土坑（第21図）

D-4グリッドに位置する。平面形は方形で、規模は長径80cm、短径72cm、長軸方向はN-58°-Eである。掘り込みは深くしっかりとしており、深さは79cmである。埋土の状況から、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。埋土3層の特徴が、近接する第6号溝跡の埋土1層と共通することから、本土坑は近世の遺構と考えられる。

第6号土坑（第21図）

B-4グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は長径87cm、短径56cm、長軸方向はN-35°-Wである。深さは23cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明だが、埋土が近世の遺構と類似することから、当期の土坑である可能性がある。

第7号土坑（第21図）

B-4グリッドに位置する。第7号溝跡を切る。平面形は楕円形で、規模は長径75cm、短径66cm、長軸方向はN-0°である。深さは47cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第8号土坑（第21図）

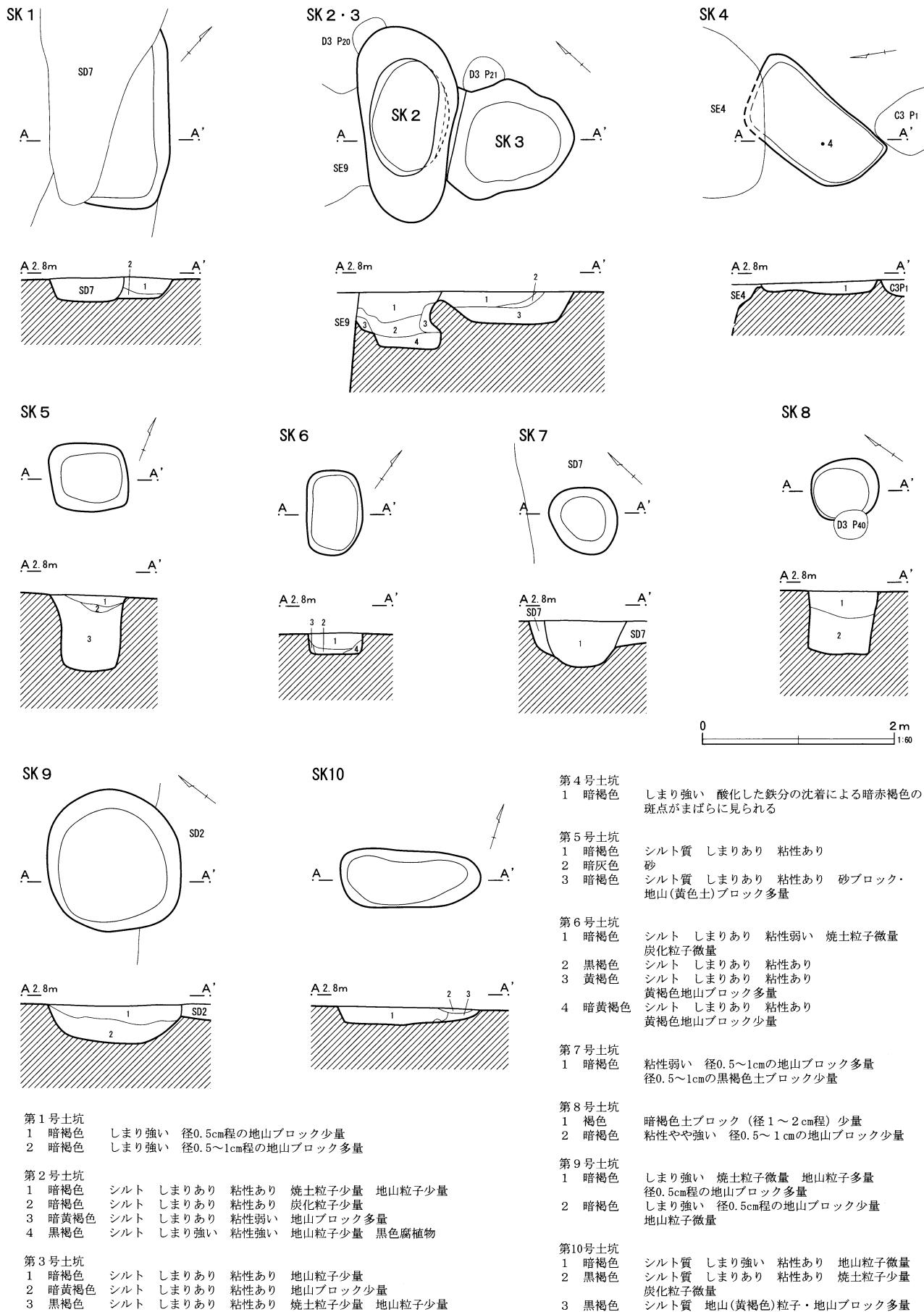
D-3グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長径78cm、短径67cm、長軸方向はN-79°-Wである。深さは65cmである。

遺物は土器の小破片が出土したが、本土坑の帰属時期を判断する材料にはならなかった。

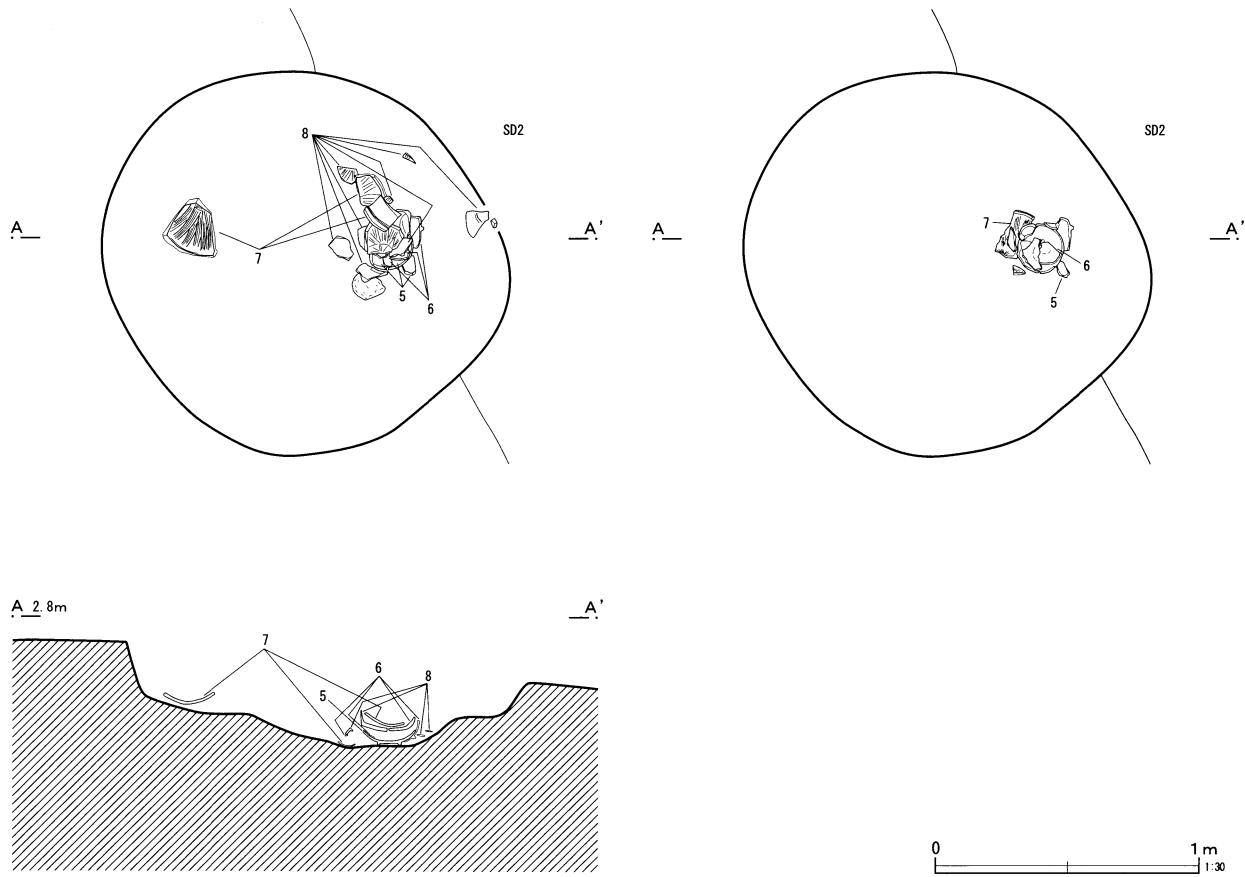
第9号土坑（第21・22図）

D-3グリッドに位置する。第2号溝跡を切る。平面形は円形で、規模は長径155cm、短径145cm、長軸方向はN-0°である。深さは38cmである。

遺物は、底面からすり鉢・大皿・片口が重なり合うように出土した。接合率は良好である。図示しなかつたが、熱を受けた石の破片が共伴する。また、第24図7のすり鉢には、第16号井戸跡から出土した破片が接合した。近世の土坑である。



第21図 土坑 (1)



第22図 第9号土坑遺物出土状況

第10号土坑（第21図）

D-3・4グリッドに位置する。平面形は不整橢円形で、規模は長径144cm、短径58cm、長軸方向はN-79°-Eである。深さは19cmである。

遺物は、五領期の土師器片がわずかに出土した。流れ込みの可能性があるため、本土坑の時期を確定することはできなかった。

第11号土坑（第23図）

E-3グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長径197cm、短径120cm、長軸方向はN-83°-Eである。掘り込みはなだらかで、深さは26cmである。

遺物は出土しなかった。埋土の類似性から、近世の土坑と考えられる。

第12号土坑（第23図）

C-4グリッドに位置する。平面形は長方形で、

規模は長径197cm、短径113cm、長軸方向はN-63°-Eである。掘り込みは浅く、深さは11cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第13号土坑（第23図）

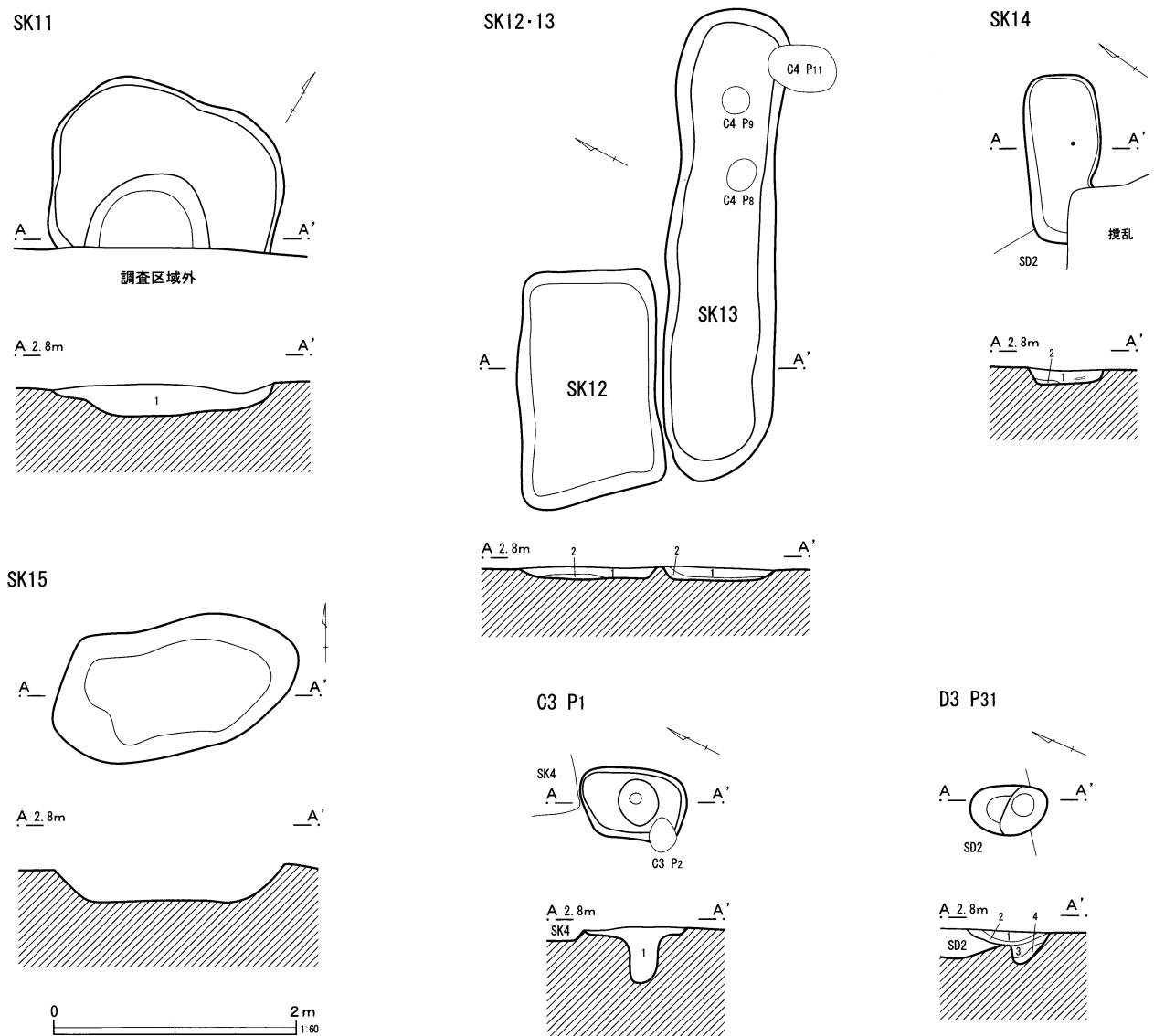
C-4グリッドに位置する。平面形は溝状を呈し、規模は長径392cm、短径85cm、長軸方向はN-68°-Eである。掘り込みは浅く、深さは11cmである。

遺物は出土しなかった。時期は不明である。

第14号土坑（第23図）

D-4グリッドに位置する。第2号溝跡を切る。南東コーナーを攪乱によって切られている。平面形は長方形で、規模は長径139cm、短径60cm、長軸方向はN-48°-Eである。深さは11cmである。

遺物は五領期の土師器が出土している。埋土の中ほどから甕類の胴部破片が出土しているが、図示す



第11号土坑
1 暗褐色 しまりあり 粘性あり 黄色地山粒子 ブロック多量
焼土粒子少量

第12号土坑
1 黒褐色 しまり強い 粘性強い 地山粒子多量 烧土粒子少量
自然堆積
2 黒褐色 しまり強い 粘性強い 地山ブロック多量

第13号土坑
1 黒褐色 しまり強い 粘性強い 地山粒子多量 烧土粒子少量

第14号土坑
1 黒褐色 しまり強い 径0.5cm程の地山ブロック少量
2 黒褐色 しまり強い 径0.5~1cm程の地山ブロック非常に多量

C-3グリッドP-1
1 黒褐色 しまり非常に強い 径0.5~1cm程の地山ブロック多量

D-3グリッドP-31
1 暗褐色 烧土粒子少量
2 暗褐色 地山ブロック多量
3 暗褐色 地山ブロック少量
4 暗灰色 暗褐色土ブロック少量

第23図 土坑 (2)・ピット

ることはできなかった。第2号溝跡との関連や、攪乱の影響を受けていることから断定はできないが、本土坑は古墳時代前期に属する可能性がある。

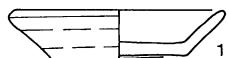
第15号土坑 (第23図)

D-4・5グリッドに位置する。平面形は不整楕

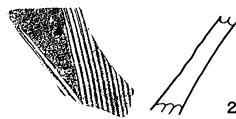
円形で、規模は長径208cm、短径106cm、長軸方向はN-74°-Eである。深さは32cmである。

遺物は、かわらけと思われる土器の破片が1点出土したが、本土坑の帰属時期を判断することはできなかった。

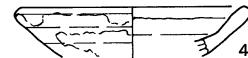
SK2



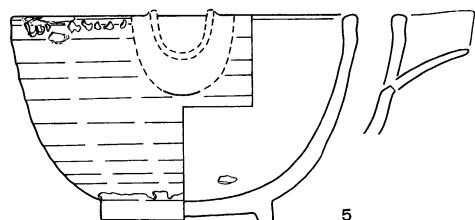
SK3



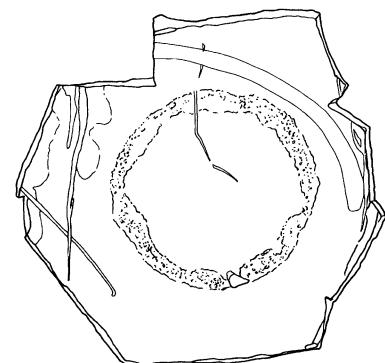
SK4



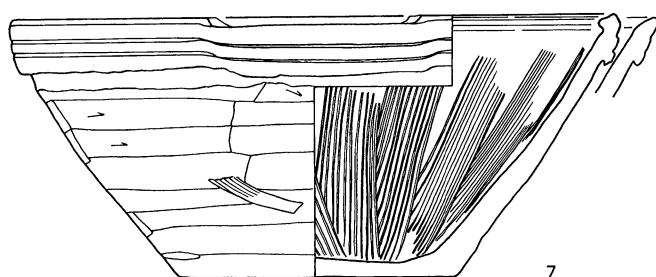
SK9



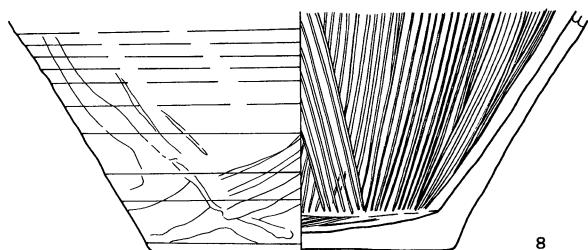
5



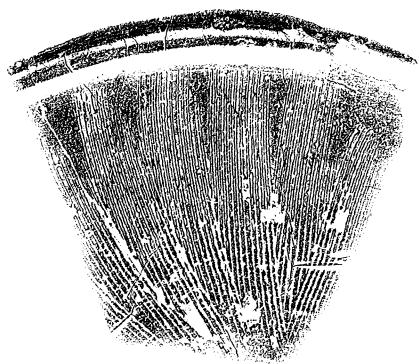
6



7



8



0 10cm
1:4

第24図 土坑出土遺物

第5表 土坑出土遺物観察表（第24図）

補圖番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考	図版
24 1	SK 2	かわらけ	皿	10.4	2.5	6.6	3/4	赤粒	普通	橙		12-6
24 2	SK 3	瀬戸美濃	すり鉢				破片	白粒	良好	暗赤灰		
24 3	SK 3	須恵器	壺		[1.2]	(5.0)	底部破片	赤粒 白粒	普通	にぶい褐	末野産	
24 4	SK 4	瀬戸	縁釉皿	(11.4)	[2.5]		口縁破片	黒粒	良好	灰白		
24 5	SK 9	瀬戸	片口	(17.2)	10.3	8.7	2/3	白粒	普通	にぶい黄褐		
24 6	SK 9	唐津	大皿		[3.3]	9.0	1/3		普通	灰赤(外面) 浅黄(内面)	離れ砂付着	
24 7	SK 9		すり鉢	30.0	13.0	14.0	ほぼ完形	砂粒	普通	橙	S E 16と接合	13-1
24 8	SK 9	瀬戸	すり鉢		[12.0]	15.2	1/3	砂粒	普通	暗赤褐		

4. ピット

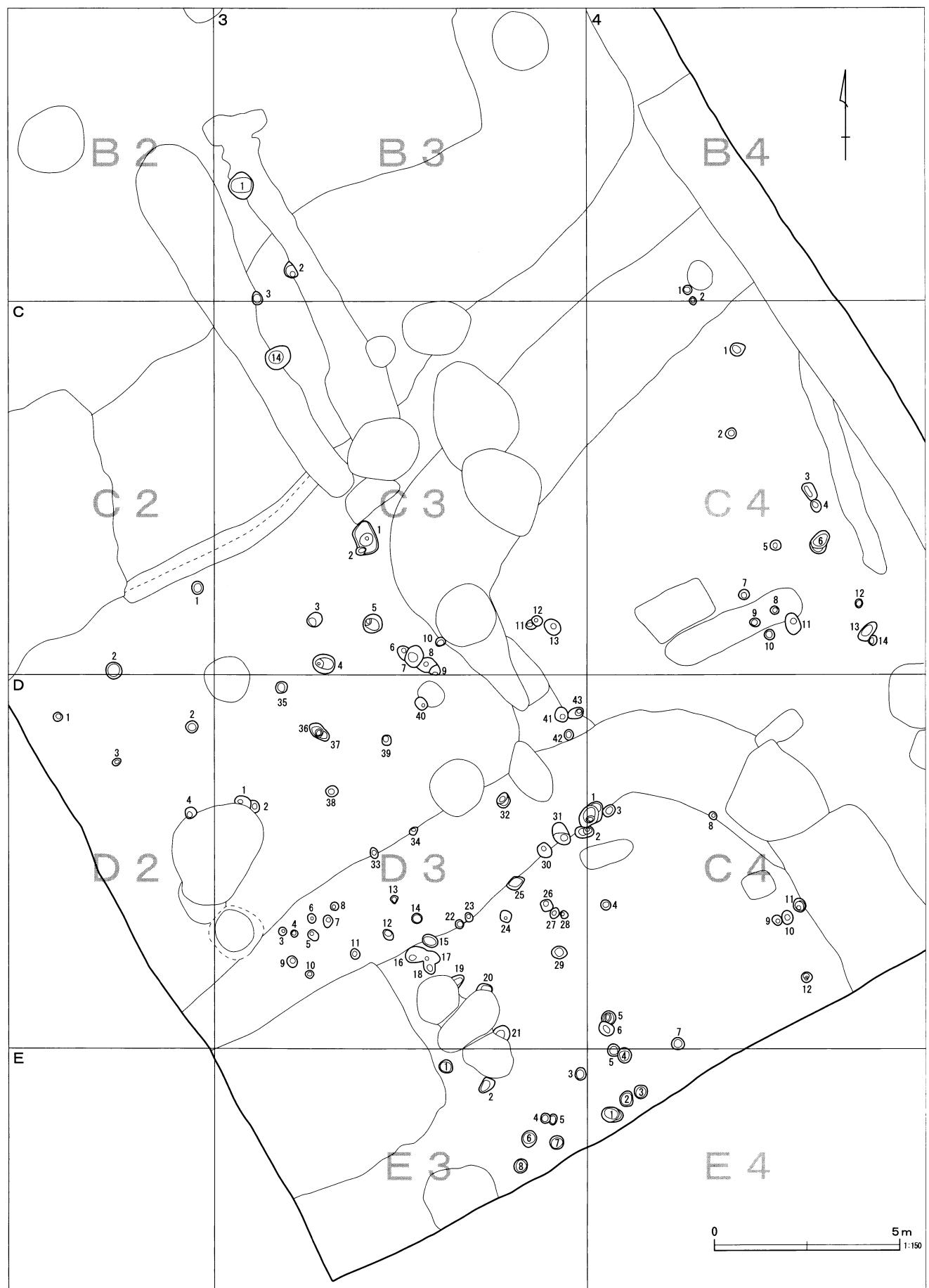
検出されたピットは、合計105基である。その大半が近世以降に属するものと考えられる。建物跡を構成する並びをもつピット群は確認されなかった。

遺物は、ほとんど出土しなかった。遺物の出土したピットは2基存在するが、ともに五領期の土師器数点にすぎない。

第6表 ピット一覧表

グリッド	番号	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	備考
B-3	1	72	62	35	
B-3	2	44	44	44	
B-3	3	35	27	38	
B-4	1	25	24	21	
B-4	2	21	20	16	
C-2	1	35	31	13	
C-2	2	47	42	13	
C-3	1	85	58	46	第23図
C-3	2	30	23	30	
C-3	3	45	36	29	
C-3	4	60	52	25	
C-3	5	51	51	29	
C-3	6	40	40	19	
C-3	7	59	45	46	
C-3	8	44	44	21	
C-3	9	19	17	49	
C-3	10	27	22	23	
C-3	11	28	28	27	
C-3	12	31	26	26	
C-3	13	47	37	23	
C-4	1	42	36	32	
C-4	2	30	28	10	
C-4	3	50	30	17	
C-4	4	34	26	14	
C-4	5	30	26	13	
C-4	6	66	38	23	
C-4	7	30	30	9	
C-4	8	28	24	8	
C-4	9	24	22	10	
C-4	10	28	28	16	
C-4	11	56	38	35	
C-4	12	24	20	11	
C-4	13	60	30	33	
C-4	14	26	22	18	
D-2	1	25	24	11	
D-2	2	33	31	12	
D-2	3	26	19	14	
D-3	1	48	48	18	土師器片出土
D-3	2	35	35	8	
D-3	3	22	22	17	
D-3	4	33	30	16	
D-3	5	34	26	18	
D-3	6	25	23	22	
D-3	7	34	25	14	
D-3	8	25	22	17	
D-3	9	33	29	42	
D-3	10	25	21	25	
D-3	11	29	25	12	
D-3	12	33	25	10	
D-3	13	23	21	7	
D-3	14	28	27	8	
D-3	15	43	32	14	
D-3	16	51	45	18	

グリッド	番号	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	備考
D-3	17	45	39	—	
D-3	18	43	31	—	
D-3	19	28	28	11	
D-3	20	42	42	11	
D-3	21	45	45	—	
D-3	22	24	21	16	
D-3	23	25	21	19	
D-3	24	36	32	22	
D-3	25	51	36	11	
D-3	26	35	32	16	
D-3	27	30	25	13	
D-3	28	22	20	12	
D-3	29	42	35	12	
D-3	30	40	35	33	
D-3	31	36	20	32	
D-3	32	43	36	28	第23図
D-3	33	31	21	13	
D-3	34	26	19	14	
D-3	35	35	31	11	
D-3	36	41	36	23	
D-3	37	30	30	9	
D-3	38	35	31	20	
D-3	39	30	28	17	
D-3	40	36	29	10	
D-3	41	41	36	36	
D-3	42	46	46	21	
D-3	43	29	24	24	
D-4	1	80	56	57	
D-4	2	50	26	40	
D-4	3	36	28	13	
D-4	4	28	26	18	
D-4	5	38	38	—	
D-4	6	44	36	19	
D-4	7	34	32	18	
D-4	8	22	18	19	
D-4	9	28	24	15	
D-4	10	36	32	33	
D-4	11	38	32	32	
D-4	12	30	28	22	
E-3	1	37	35	24	
E-3	2	45	29	3	
E-3	3	34	24	20	
E-3	4	26	25	11	
E-3	5	29	29	3	
E-3	6	46	41	22	
E-3	7	38	36	22	
E-3	8	38	36	14	
E-4	1	58	40	36	
E-4	2	40	34	10	
E-4	3	36	34	18	
E-4	4	40	36	10	
E-4	5	30	30	10	



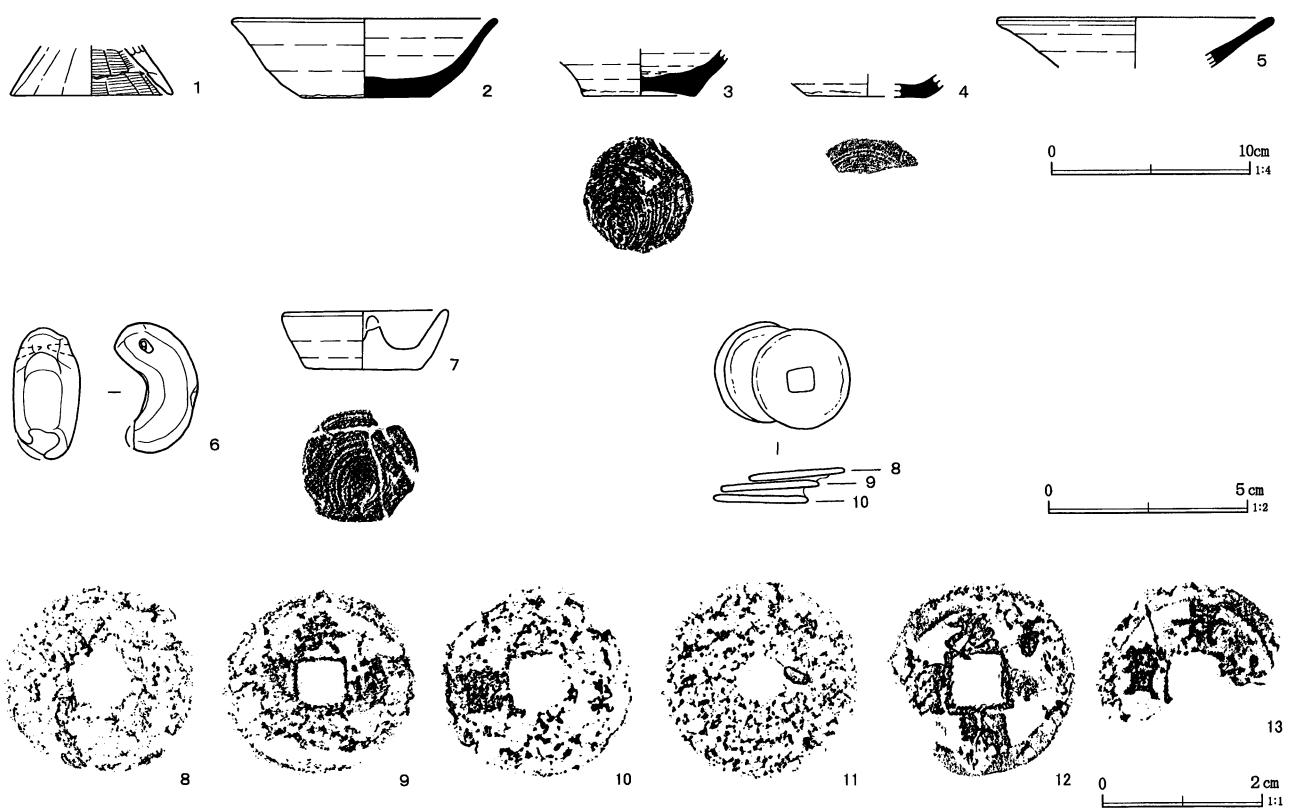
第25図 ピット全体図

5. 遺構不明出土遺物

試掘トレンチ掘削時に出土した遺物や、調査時に出土した帰属遺構不明の採集遺物は、第26図に示した。このうち土製勾玉（第26図6）は、遺構確認の際に出土したものである。出土地点は第11図に示した。C-3グリッドピット1の直上に当たるが、出土状況から、このピットに伴うものではないと判断される。また、近接する第7号溝跡に伴う遺物が、

流れ込んだ可能性もあるが、確証は得られなかった。ただし、この土製勾玉の時期は、本遺跡の主体となる古墳時代前期のものとみなすのがもっとも妥当であろう。

銭貨（第26図8～13）は6枚重なった状態で出土した。試掘時に発見された遺物である。遺跡内に中・近世の墓壙が存在していた可能性を示している。



第26図 遺構不明出土遺物

第7表 遺構不明出土遺物観察表（第26図）

捕囲番号	出土地点	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎 土	焼成	色 調	備 考	図版
26 1	B-2	土師器	台付甕		[2.5]	(8.2)	脚部破片	白粒	普通	橙		
26 2	表採	須恵器	壺	(13.2)	3.9	(6.4)	1/3	赤粒 黒粒	普通	にぶい黄橙	器面風化顯著 末野産	11-4
26 3	トレンチ	須恵器	壺		[2.4]	5.8	底部のみ	赤粒	普通	橙	ロクロ土師	
26 4	表採	須恵器	壺		[1.1]	(6.0)	底部破片	赤粒 針	普通	橙	南北企産	
26 5	表採	須恵器	皿	(13.6)	[2.5]		口縁1/5	砂粒 白粒 針	良好	灰	南北企産	
26 6	C-3	土製品	勾玉	長さ3.3 幅1.6			ほぼ完形	白粒 黒粒	普通	にぶい橙		13-4
26 7	トレンチ	灯火具	秉燭	4.2	1.4	2.8	4/5	赤粒	普通	橙	無釉 土師質	13-2
26 8	トレンチ	銭貨	不明	直径2.4			完形					15-4
26 9	トレンチ	銭貨	洪武通寶？	直径2.4			完形				明1368年 初鑄	15-5
26 10	トレンチ	銭貨	不明	直径2.4			完形					15-6
26 11	トレンチ	銭貨	不明	直径2.5			完形					15-7
26 12	トレンチ	銭貨	元豊通寶	直径2.4			完形				北宋1078年 初鑄(篆書)	15-8
26 13	トレンチ	銭貨	景祐元寶？	直径2.4			1/2				北宋1034年 初鑄	15-9

V 調査のまとめ

古墳時代前期の遺構と遺物について

今回の第2次調査で検出された古墳時代前期の遺構は、溝跡3条と土坑3基である。第1号・第2号・第7号溝跡として報告した3条の溝跡は、その全容を明らかにすることはできなかったが、いずれも方形に巡るという共通した形状を呈している。

本遺跡のように、自然堤防に立地する古墳時代前期の遺跡において、しばしば検出される方形に巡る溝跡の性格を考えるために、その遺構が部分的なものであればなおさら、まず、それが方形周溝墓であるのか、建物跡に伴う周溝であるのかを、できるだけ的確に判断する必要が生ずる。

福田聖氏は、方形周溝墓を対象とした一連の論考の中で、こうした遺構が方形周溝墓か建物跡かを区別する目安を提示されている（福田2001）。それによると、方形周溝墓と判断する目安として、次の8点をあげている。

- ① 方台部が直線的な辺をもつこと
- ② 周溝の平面形が全周もしくはコーナーの一つが切れる形態にあるか、四隅切れであること
- ③ 施設としての溝中土坑が設けられていること
- ④ 周溝の幅が1m以上で、深さが50cmに満たないもの（広く浅いもの）は少ないとこと
- ⑤ 壺の出土比率が高いこと
- ⑥ 出土土器の完形率が高いこと
- ⑦ 出土土器の出土位置がコーナーや陸橋部際、特定の周溝であること
- ⑧ 整然とした群構成であること

全体の形態や規模、群構成にかかわる項目には当てはめることができないが、各溝跡をこの目安に沿って検討してみよう。

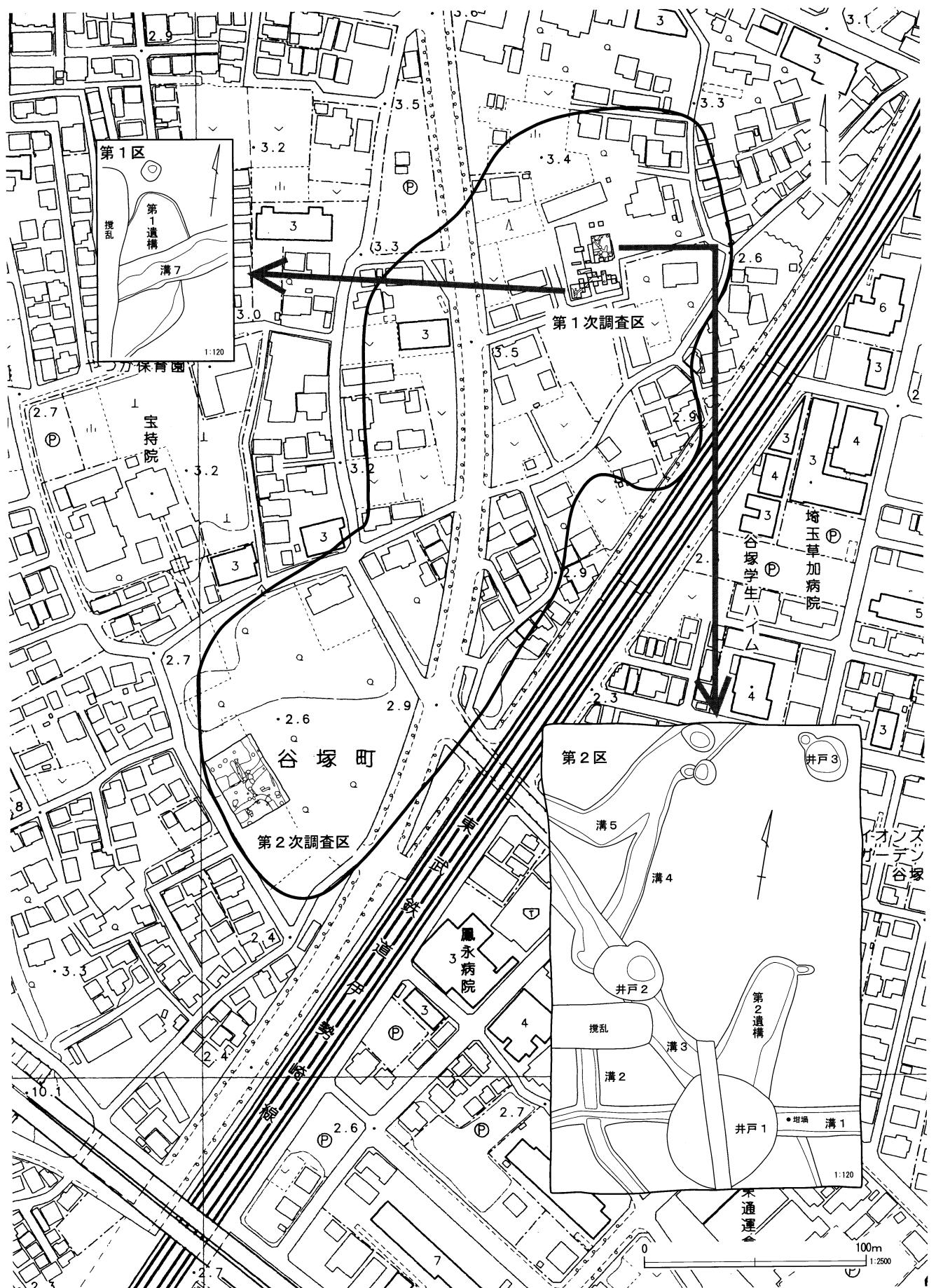
第1号溝跡は、①と④が該当する。出土遺物が少ないため、断定はできないが、⑤もあてはまるのではないかだろうか。もし、第1号溝跡を方形に一周する遺構と考えると、その内辺は少なくとも20mを超

える。その規模は、近接する蜻蛉遺跡で発見された方形周溝墓（3号方形周溝墓）に匹敵するものとなる（鈴木他1985）。また、埋土の状況から、第1号溝跡の掘り込みは、平安時代のある時点まで残っていた可能性がある。これらのことから、第1号溝跡を方形周溝墓と認定してもよいと考えられる。

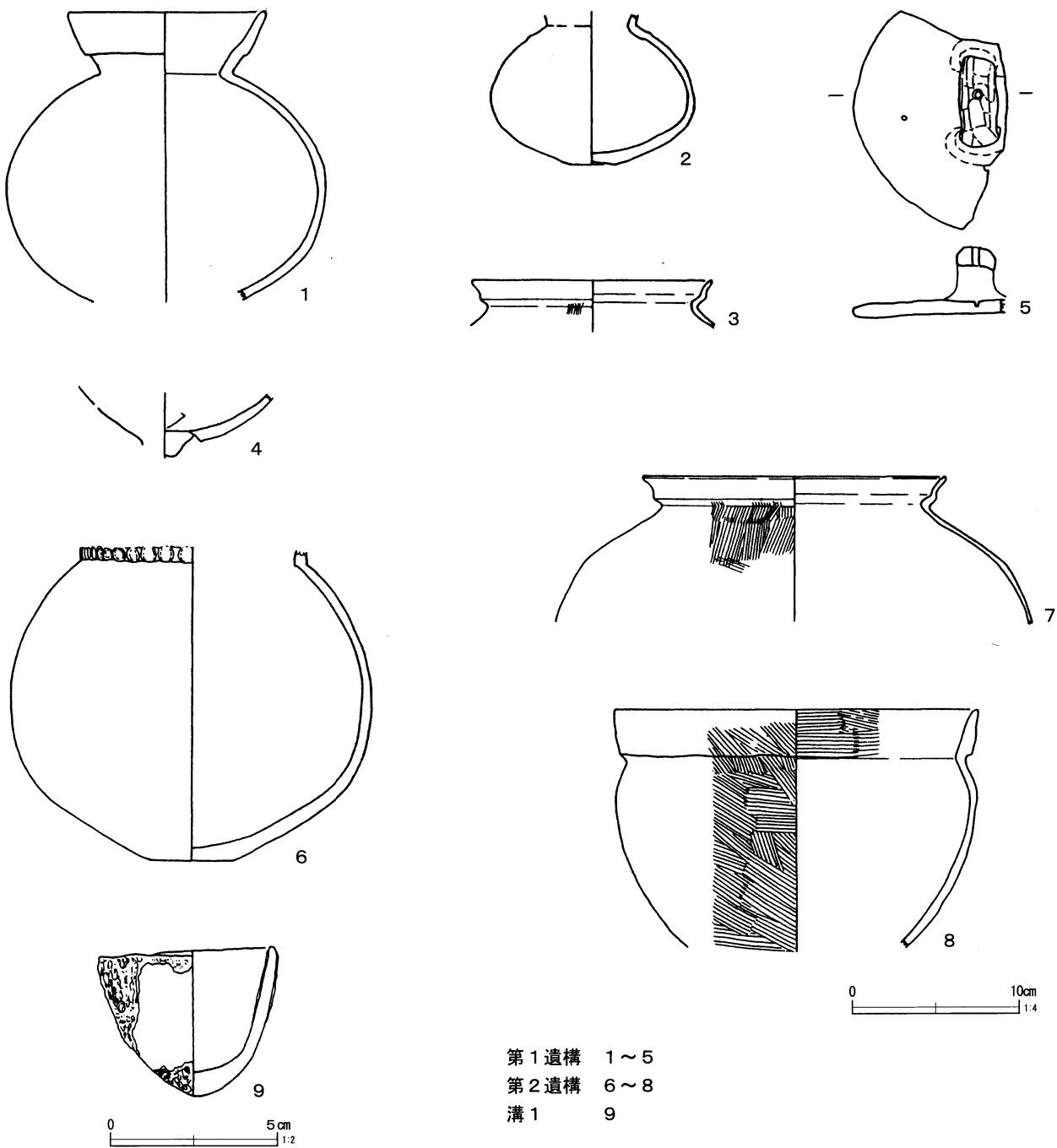
第2号溝跡に当てはまる目安は①と⑦である。該当項目は少ない。しかし、第1号溝跡を方形周溝墓とみなすならば、その位置関係から、やや規模の小さい方形周溝墓（第2号溝跡）が主軸をほぼ同一にして築造されるという、「整然とした群構成」の様相を呈する可能性は否定できない。したがって、根拠は乏しいのではあるが、ここでは、方形周溝墓と考えておきたい。

第7号溝跡で該当する目安は①のみである。壺に加えて甕が多いという器種構成は、建物跡に伴う周溝と認定する目安に該当する（福田2001）。周溝の掘り込みは第1・2号溝跡よりも浅く、幅も一定ではない。削平された可能性もあるが、相対する辺は検出されていない。したがって、第7号溝跡は、先の2条の溝跡とは異なり、建物跡など居住施設に伴う周溝である可能性が高いと考えられる。本溝から出土した異形器台は、後述するように千葉県と茨城県にその分布が集中するが、周溝墓から発見された例がないことも、その根拠の一つとしてあげることができる。

第7号溝跡からは、本遺跡で唯一まとまった一括資料が出土している。S字状口縁台付甕は、比田井氏分類のD類（比田井1993）に相当し、小型丸底壺を含んでいるので、前期後半の範疇に入る土器群と考えられる。さらに、甕類の胴部が球状に張ること、台付甕の脚台部が幅広でしっかりとしていること、といった特徴がみられることから、前期後半でもやや古い段階にあたると考えられる。一方、第1・2号溝跡の出土遺物は、資料が断片的ではあるが、円



第27図 第1次調査区位置図



第28図 第1次調査遺構出土遺物

柱状の脚部を有する高壺が存在し、台付甕の脚台部の矮小化がみられるため、第7号溝跡出土土器よりも一段階新しいものと位置づけることができよう。

以上の検討結果から、本遺跡における古墳時代前期の主たる遺構の様相として、居住施設に伴う第7号溝跡を切って、2基の方形周溝墓（第1・2号溝跡）が築造された可能性を示すことができる。

昭和61年7月に実施された第1次調査では、「溝状土壙」2基、溝跡7条、井戸跡3基が検出された

（高橋1987）。このうち「溝状土壙」と溝跡は、出土遺物から、今回とほぼ同様の年代を与えることができる。第1遺構・第2遺構と称された「溝状土壙」は、その規模や遺物の出土状態など、今回調査された第7号溝跡と非常に類似している。土製模造鏡（第28図5）の存在から、祭祀に関連する遺構の可能性もあるが、他の遺物や出土状況などをみても、特に祭祀に特化した遺構と位置づける根拠は薄いと思われる。

これらの遺構を含む溝跡は、今回の調査で検出された溝跡のように、明確に方形を呈するものではない。しかし、仮に、これら的一部が建物など、居住施設に伴うものとすると、本遺跡は、福田氏が検討を加えている（福田2001）戸田市鍛冶谷・新田口遺跡（西口1986ほか）などのように、低地における周溝墓と建物跡が混在する遺跡とみなすことができる。草加市域でこれまで確認されていなかった、古墳時代前期の住居跡が存在する集落遺跡として位置づけることができるのではないだろうか。

また、溝1から出土した埴輪には、内面に銅が付着している（第28図9）。報告者が示唆しているように、この埴輪が古墳時代前期の所産とするならば、この時期に鋳銅のような生産行為が周辺で行われていたことは注目に値する。今回の第2次調査では、近世の遺構の埋土から、羽口や鋳造滓が発見されている。これらの遺物は、周辺からの流れ込みと考えられるが、前期の所産であるとするならば、遺跡の古墳時代前期における生産遺跡としての側面を補強することになる。

高橋一夫氏は、草加市はS字状口縁甕の出土率が高く、その土器も器肉が薄くより東海的であることから、この地に東海地方からの移民が相当数あったと想定された。さらに、この地に古墳時代に入って突然遺跡が出現する契機を、対岸の祭祀遺跡である伊興遺跡（大場他1975ほか）の出現とあわせて、大和王権の東国進出と無関係ではなかったとされている（高橋1985a）。この推論に立つならば、遺跡周辺で鍛冶・鋳造生産が早くから行われる環境は調っていたといえよう。ちなみに、伊興遺跡では、5世紀末から6世紀初頭には、鉄と銅を扱う鍛冶集団の生産活動があったことが明らかにされている（佐々木1999）。

異形器台について

第7号溝跡からは、特異な形態の土器が2点出土した（第12図23・24 第29図1・2に再掲）。いずれも中央に貫通孔を有する器台形土器で、肉厚の重

厚なつくりである。第29図1は、外面は粗いヘラケズリ調整で、ハケメが部分的に残る。上部の内面は指ナデ、脚部内面はヘラナデ調整を施す。明瞭なくびれ部をもち、脚台部がハの字状に開く。端部はわずかに内向気味である。上部は球状に作られ、開口部は直上ではなく、斜め上に設けられている。2は、外面は粗いヘラケズリ、内面はヘラナデと指ナデで調整している。くびれの目立たない、全体的には三角錐状を呈し、上部にはほぼ真横に向かって楕円形の開口部が設けられている。

粗製で、脚台部がハの字状に広がる形態の器台形土器は、千葉県や茨城県の古墳時代前期の住居跡から出土する例が多く、伊東重敏氏が、その存在を指摘して以来（伊東1977）、その分布の偏在性や用途に着目した論考が行われてきた（藤岡1983・千田1983・鶴見1994など）。その呼称は研究者によって異なり、「炉器台」（伊東1977ほか）、「器台状脚形土器」（藤岡1983）、「異形器台形土器」（千田1983）、「粗製器台」（鶴見1994）と称されている。

これら先学の研究によって、粗製の器台形土器に関しては、次のことが明らかになっている。

- ① 分布は千葉県・茨城県が中心で、特に房総半島の東京湾側から北総地域・茨城県南部に集中する傾向にある。2県以外では福島県いわき市内宿遺跡（檍村他1982）、栃木県下都賀郡岩舟町赤羽根遺跡（岩淵他1984）、神奈川県横須賀市鴨居上の台遺跡（岡本他1981）などに出土例がある。
- ② 弥生時代末に出現し、古墳時代前期を通して使用され、中期初頭には消滅する。
- ③ 炉上や炉周辺から発見され、特に床面直上からは、2～3個体一括で出土する例が多い。二次的な焼成痕や煤の付着が認められる場合もある。粗製の器台形土器は、脚台部がハの字状に広がるという共通の形態を有するが、その上部（鶴見氏のいう器受部）の形状はさまざまである。鶴見氏は茨城県内の出土例を対象に形態分類を行い、A～Fま



- | | | | |
|----|------------|-------|-------------------|
| 1 | 埼玉県草加市 | 東地総田 | 7溝 (第12図23) |
| 2 | 埼玉県草加市 | 東地総田 | 7溝 (第12図24) |
| 3 | 千葉県袖ヶ浦市 | 山王辺田 | 097住 (伊東1977) |
| 4 | 千葉県佐倉市 | 高岡大山 | 615住 (阿部他1993) |
| 5 | 茨城県龍ヶ崎市 | 屋代A | 52住 (青木・久野1982) |
| 6 | 茨城県龍ヶ崎市 | 長峰 | 123住 (中村・後藤1990) |
| 7 | 千葉県木更津市 | 中台 | SI112 (甲斐・井上2001) |
| 8 | 千葉県木更津市 | 田川 | 16住 (千田他1980) |
| 9 | 千葉県白井市 | 一本桜南 | 041住 (雨宮・落合1998) |
| 10 | 千葉県木更津市 | 田川 | 16住 (千田他1980) |
| 11 | 埼玉県蓮田市 | 馬込新屋敷 | 8住 (藤原他1983) |
| 12 | 千葉県木更津市 | 田川 | 21住 (千田他1980) |
| 13 | 千葉県佐倉市 | 高岡大山 | 620住 (阿部他1993) |
| 14 | 茨城県かすみがうら市 | 戸崎中山 | 73住 (小竹・浦和2004) |
| 15 | 茨城県ひたちなか市 | 三反田 | 11住 (川崎他1985) |

第29図 粗製器台形土器の類例

での6類を設定された（鶴見1994）。この分類基準に当てはめると、本遺跡から出土した粗製器台形土器のうち、1は、「くびれ部があり器受部が内曲している」A類でも、「器受部が橈円状を呈する」AⅠ類にあたると考えられる。ただし、1のように傾いた開口部を持つ例はない。2はどの分類にも該当しないが、あえていうなら、「くびれ部がはっきりせず、短い円筒状」のB類に属するのであろうか。しかし、2のつくりは円筒状ではなく、わずかながらくびれ部をもち、上部のつくりはむしろA類に近いので、ここではA類に含んでおく。いずれにしろ、1・2ともたいへん特異な例であることは明らかである。第29図に、粗製器台形土器A類の代表的な出土例を掲載した（第29図3～12）。また、1・2両例とも開口部が傾いていることに着目し、坏状の上部の一部がカットされているもの（鶴見分類のD類）もあげておいた（同図13～15）。

A類やB類は粗製器台形土器の中でも、その形状の特異性から、異形器台の名称がふさわしいと考え、本報告では、この名称を採用した。それでは、本例を含め、異形器台はどのような目的をもって作られたのであろうか。その用途について考えるために、以下、この異形器台（鶴見分類A・B類）を粗製器台I類に、それに対し、上部が逆ハの字状に広がる粗製器台形土器（鶴見分類C・D・F類）をII類と仮称して論を進めることにする。

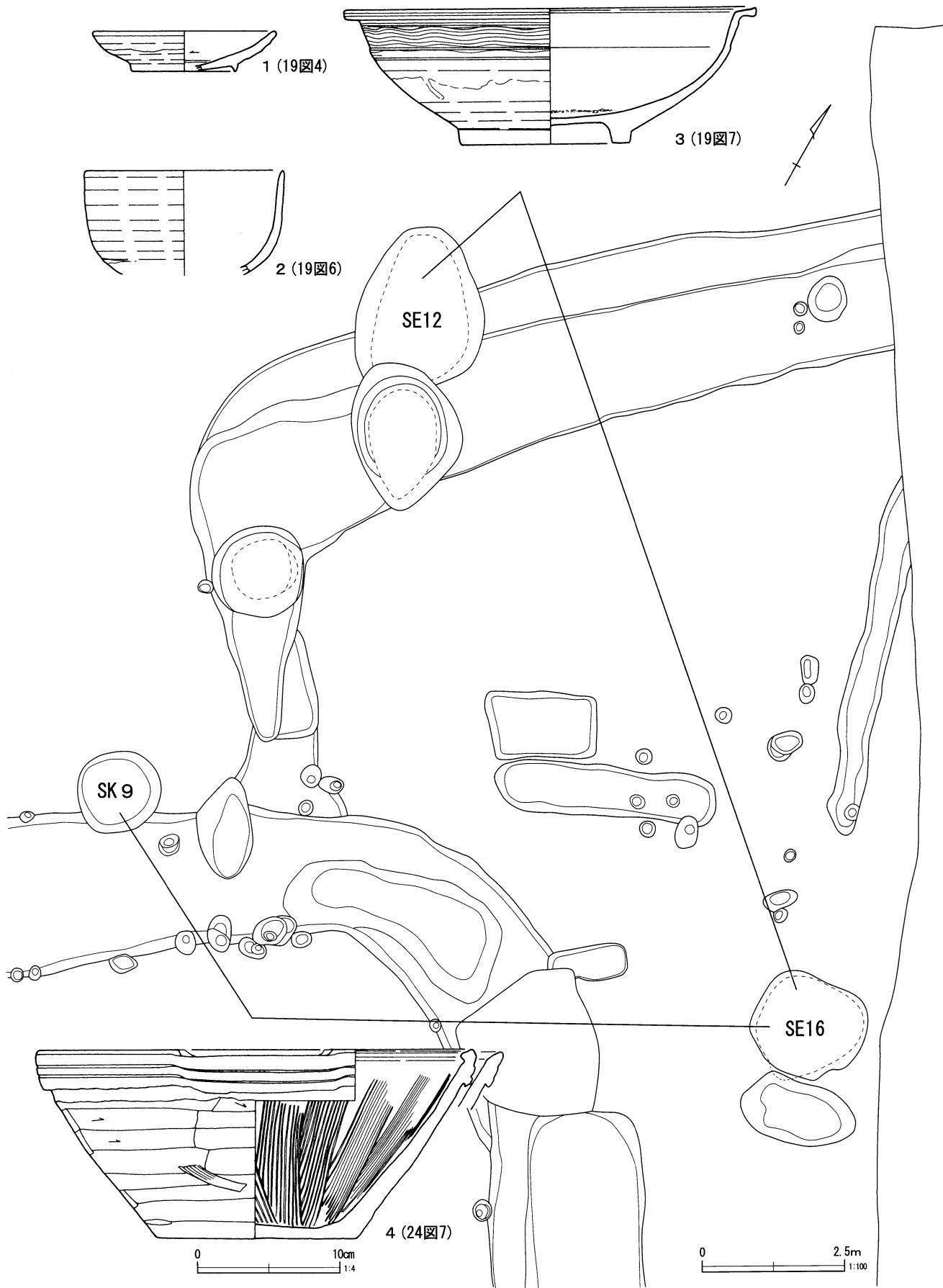
II類は、台受に適したその形状や、二次焼成・煤付着の状況、器ずれの痕跡などから、鶴見氏が指摘されているように、炉に置かれて器台として使用された「炉器台」と考えるのが妥当であろう。ただし、常に炉に据え置いて使用していたのではなく、必要に応じてその都度使用していたと考えられている。上部が平ではなく、抉りをもつ例（鶴見分類D類）は、2個体セットで使用するときに、甕類の胴部をしっかり押さえることができるよう工夫されたものと考えられる。

I類には、II類と同様に、二次焼成や煤の付着し

た痕跡の認められるものがある反面、赤彩が施されたものも存在するという（藤岡1983）。異形器台の使用方法については、3個体1組みで使用され「五徳」のように使用されたとする説（藤岡1983）と、「火または炉、あるいは炊さんに関するか伴う、祭儀礼に要求されたもの」（伊東1977）とする説がある。しかし、「五徳説」には、「3個ひと組にして支脚的機能を果たすというにはその形状から見て甚だ不合理」（千田1983）という反論が、また「祭祀遺物説」には、「小形器台によって代表される祭祀との関連が明らかでない」「祭祀遺物とする根拠が薄弱で、思いつきの域を出でていない」（千田1983）という指摘があり、その用途に関してこれといった定説はないのが現状である。

本遺跡の出土例は異形器台の中でも「異形」である。傾いた開口部は、たとえD類のように2個一組で使用したとしても、他の器種の土器を浮かせて支えることは困難であると思われる。二次的な被熱や煤の付着など、炉で使用されたような痕跡は認められない。したがって、その用途や機能を明らかにする手がかりが得られたわけではない。しかし、私見を述べれば、脚台部がハの字状に広がるその形態は、やはりものを載せるもしくは支えることを目的に作られた土器であることは疑いのないところであろう。本例に限らず、I類の上部の形状は、その対象が甕など他器種の「土器」に限られていなかったことを暗示しているように思われる。その上部に載せるもしくは支える対象によって、炉で使用される場合もあったのではないだろうか。その動機が、普遍的な祭祀行動を含む祭祀に関連したものか、炊飯など日常生活に関連したものか、具体的に提示する力量はないが、その出土例の偏在性をみると、地域的な流行や要求に則したものと考えられる。

本例の発見によって、異形器台について、分布の上でも、形態的にも、また出土遺構についても新たな知見を加えることができた。竪穴住居跡以外の居住遺構から出土した例は初めといえるのではないだ



第30図 近世遺構遺物接合関係図

ろうか。また、この報告において県内の出土例を再吟味することにより、蓮田市馬込新屋敷遺跡の出土例（藤原他1983）も異形器台の一例として再認識することができた。馬込新屋敷例（第29図11）は、上部の口縁がくの字状に屈曲するタイプ（鶴見分類のAⅡ類）であるが、貫通孔が設けられていないことが特徴といえる。共伴土器から、本例とほぼ同じ年代が与えられる。この例も含め、異形器台の分布域は、埼玉県東南部まで広がることが確認できたのである。

このような上総・常陸南部におそらくは出自を有する異形器台が、草加の地で発見された意義は大きい。その使用理由が何であるにしろ、地域間の人の移動も含めた交流が、毛長川を介して行われていた証左と解釈できるからである。

古墳時代後期(6世紀後半)になると、上総地方と北武藏という広域圏間の交流が活発となる。たとえば埼玉県鴻巣市の生出塚埴輪窯で製作された埴輪が、千葉県市原市など東京湾沿岸地域に供給され（鴻巣市2000）、千葉県富津市の海岸で産出される「房州石」が、埼玉県行田市埼玉將軍山古墳の横穴式石室に用いられている（高橋・本間1994）。このような、河川を利用した物資の流通経路の確立には、古墳時代前期における地域的な結びつきが基盤のひとつになっていたと考えられる。

平安時代の遺物について

今回の調査では、第1号溝跡の埋土上層を中心に、平安時代の遺物が出土した。時期は9世紀後半代と考えられる。当期に属する遺構は第1次調査を含め、確認されていない。近接する西地総田遺跡からは井戸跡1基が（高橋1984）、蜻蛉遺跡からは井戸跡2基・土坑4基・溝跡3条が発見されている（鈴木1985）。対岸の足立区内の遺跡では、伊興遺跡（佐々木他1997ほか）や若宮八幡神社遺跡（佐々木他2000）などから当期を含む平安時代の遺構と遺物が検出されているが、総じて、遺構の分布は希薄であり、竪穴住居跡などの居住施設は発見されていない。

い。

中・近世の遺構と遺物について

中世の遺構と考えられるのは、第2号井戸跡1基である。出土した内耳鍋は15世紀の所産と考えられる。この井戸跡が中世の遺構であるとすれば、試掘調査の際に出土した六道銭の存在からも、調査区外を分布の中心とした中世の墓域（をもつ集落）が形成されていた可能性は高いと考えられる。

第2次調査で検出された近世の遺構は、溝跡3条、井戸跡12基、土坑7基である。井戸跡以外の遺構の性格は不明なものが多い。出土した遺物には、瀬戸美濃産や唐津産の陶器、肥前産の磁器、在地産のかわらけや焙烙などがあり、その年代の中心は17世紀代と考えられる。これら器物の他に、土人形などの土製品、砥石・石臼などの石製品、桶や杵などの木製品が出土している。桶は釣瓶として使用されていたものと考えられる。

今回の調査で注目されるのは、別々の遺構から出土した遺物に、接合関係がみられることである（第30図）。詳細は、1と2は、両井戸跡から出土した破片同士が接合し、割合はほぼ同等である。3は第16号井戸跡出土の底部が主体であり、第12号井戸跡出土の口縁片が接合した（第IV章ではすべて第12号井戸跡出土遺物として掲載した）。4は第9号土坑出土資料が9割を占め、第16号井戸跡の口縁片が接合した。第9号土坑は、遺物の出土状況や、その規模から、おそらく廃棄土坑（ゴミ穴）と推定される。

このような現象は、廃棄の一括性を示すものである。正確にいうならば、2基の井戸の廃絶（埋め戻し）と、第9号土坑の形成がほぼ同時に行われたと考えられる。複数の遺構に分散して投棄された理由としては、廃棄物を一旦仮置き場にまとめた後に、一括して廃棄処理した可能性が指摘できよう。

この章を執筆するにあたり、本事業団職員の赤熊浩一・磯崎一・木戸春夫・福田聖の助言を受けた。末筆ながら感謝申し上げる次第である。

引用・参考文献

- 青木義夫・久野俊度 1982 『龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6 成沢遺跡・屋代A遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告XIV (財)茨城県教育財団
- 阿部寿彦他 1993 『高岡遺跡群II』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第71集 (財)印旛郡市文化財センター
- 雨宮龍太郎・落合章雄 1998 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XII—白井町一本桜南遺跡—』千葉県文化財センター調査報告第318集 (財)千葉県文化財センター
- 伊東重敏 1977 「上総・山王辺田019住居址」『ひだみち』No.5 常陸考古学研究所 p1-13
- 井汲隆夫 1992 『江戸遺跡検出のやきもの分類(兼凡例)』細工町遺跡別冊1 新宿区厚生部遺跡調査会
- 岩淵一夫他 1984 『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告第57集 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 内川隆志他 1988 『武藏伊興』足立区伊興遺跡調査会・足立区教育委員会
- 大場磐雄他 1975 『武藏伊興遺跡』伊興遺跡調査団
- 大矢雅彦 2003 「東京低地の地形と河川」東京低地の形成を考える1 『地理』48-6 古今書院 p86-93
- 岡本勇他 1981 『鴨居上の台遺跡』横須賀市文化財調査報告書第8集 横須賀市教育委員会
- 甲斐博幸・井上 賢 2001 『大畠台遺跡群発掘調査報告書V 中台遺跡』木更津市教育委員会
- 樋村友延他 1982 『内宿遺跡—古代集落の調査—』いわき市埋蔵文化財調査報告第7冊 いわき市教育委員会
- 川口市 1986 『川口市史』考古編 川口市
- 川崎純徳他 1985 『三反田遺跡調査報告書(第4次)』勝田市教育委員会
- 久保純子 1994 「東京低地の水域・地形の変遷と人間活動」「防災と環境保全のための応用地理学」古今書院 p141-158
- 久保純子他 2000 『関東平野と周辺の丘陵』『日本の地形4 関東・伊豆小笠原』東京大学出版会 p169-258
- 鴻巣市 2000 『鴻巣市史』通史編1原始・古代・中世
- 小竹茂美・浦和敏郎 2004 『戸崎中山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第218集 (財)茨城県教育財団
- 小林謙一 1991 「江戸遺跡における廃棄の研究」『東京考古』9 東京考古談話会 p143-177
- 佐々木彰他 1996 『舍人遺跡』足立区伊興遺跡調査会
- 佐々木彰他 1997 『伊興遺跡』足立区伊興遺跡調査会
- 佐々木彰他 1998 『足立区北部の遺跡群』足立区伊興遺跡調査会
- 佐々木彰他 1999 『伊興遺跡II』足立区伊興遺跡調査会
- 佐々木彰他 1999 『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会
- 佐々木彰他 2000 『若宮八幡神社遺跡II』足立区伊興遺跡調査会
- 佐々木彰他 2001 『舍人遺跡II』足立区遺跡調査会
- 佐々木彰他 2004 『法華寺境内遺跡II』足立区立郷土博物館
- 佐々木稔 1999 「遺物の解析から推測される伊興遺跡の鍛冶活動の性格」『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会 p321-338
- 実川順一他 1992 『伊興遺跡』足立区伊興遺跡公園調査会・足立区教育委員会
- 鈴木孝之他 1985 『蜻蛉遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第53集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千田利明他 1980 『田川遺跡群—千葉県木更津市田川遺跡群発掘調査報告書—』田川遺跡群発掘調査会
- 千田利明 1983 「異形器台形土器小考」『日本考古学研究所集報』V 日本考古学研究所 p25-41

- 草加市 1988 『草加市史』自然・考古編 草加市
- 草加市 1997 『草加市史』通史編 上巻 草加市
- 高橋一夫 1983 「草加の遺跡（1）—毛長川流域を中心として—」『草加市史研究』第2号 草加市 p1-34
- 高橋一夫 1984 「草加の遺跡（2）—西地総田遺跡の調査—」『草加市史研究』第3号 草加市 p1-30
- 高橋一夫 1985a 「関東地方における非在地系土器の意義」『草加市史研究』第4号 草加市 p1-56
- 高橋一夫 1985b 『草加市の文化財（10）（西地総田遺跡発掘調査報告書）』草加市教育委員会
- 高橋一夫 1987 『草加市の文化財（12）（東地総田遺跡発掘調査報告書）』草加市教育委員会
- 高橋一夫・本間岳史 1994 「將軍山古墳と房州石」『埼玉県史研究』第29号 埼玉県 p21-38
- 鶴見貞雄 1994 「粗製器台の用途を考える—高崎貝塚出土の器台形土器を例にして—」『研究ノート』3号 (財)茨城県教育財団 p131-148
- 中村幸雄・後藤義明 1990 『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19 長峰遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第58集 (財)茨城県教育財団
- 中山俊之他 1990 『伊興遺跡—伊興遺跡公園予定地調査概報—』足立区伊興遺跡公園調査会・足立区教育委員会
- 西口正純 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 比田井克仁 1993 「東国における外来土器の展開」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』久保哲三先生追悼論文集刊行会 p71-102
- 福田 聖 1999 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（1）—周溝墓とは何かを探るための試み—」『埼玉考古』第34号 埼玉考古学会 p31-54
- 福田 聖 2001 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（5）—鍛冶屋・新田口遺跡—」『埼玉考古』第36号 埼玉考古学会 p37-65
- 藤岡孝司 1983 「粗製な器台状脚形土器について」『研究連絡誌』第2号 (財)千葉県文化財センター p4-8
- 藤原高志他 1983 『さら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 堀口萬吉他 1987 「荒川の河道と地形の変遷」『荒川 自然』荒川総合調査報告書1 埼玉県 p179-248
- 松戸市立博物館 2002 『はにわの十字路—古代東国の交流と地域性—』
- 村石眞澄・久保純子・橋本真紀夫 1994 「東京低地北部毛長川周辺の微地形と古墳時代の古環境」『日本第四紀学会講演要旨集』24 日本第四紀学会 p178-179
- 村石眞澄他 1999 「伊興遺跡の立地環境と古環境について」『毛長川流域の考古学的調査』足立区伊興遺跡調査会 p295-306

写 真 図 版



1 遺跡遠景（空中写真）



2 遺跡全景



1 第1号溝跡



2 第2号溝跡



1 第7号溝跡



2 第7号溝跡異形器台出土状況
(草加市教育委員会提供)



3 第7号溝跡遺物出土状況近景①



4 第7号溝跡遺物出土状況近景②



5 第7号溝跡遺物出土状況近景③



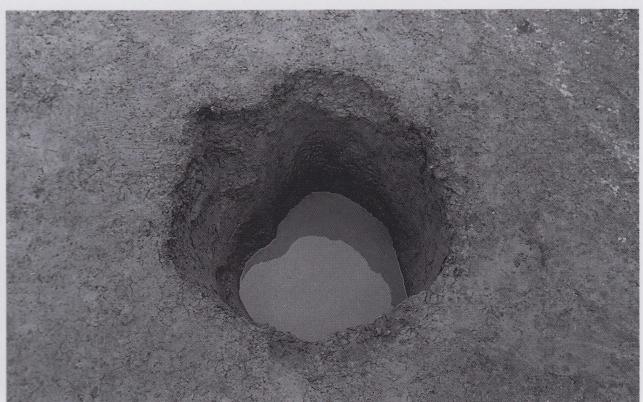
1 第3.4号溝跡



2 第6号溝跡



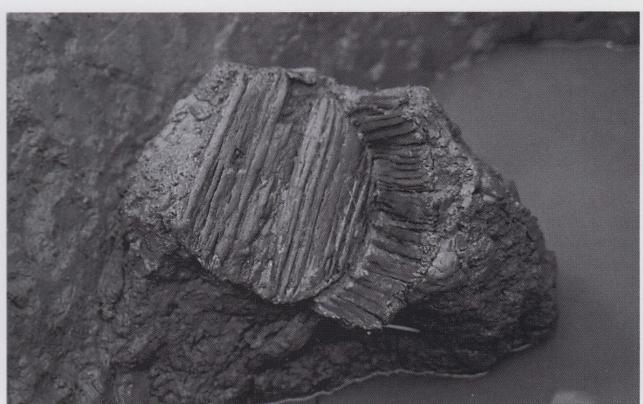
3 第8号溝跡



4 第1号井戸跡



5 第2号井戸跡



6 第2号井戸跡遺物出土状況



7 第3号井戸跡



8 第4号井戸跡・第4号土坑



1 第5号井戸跡



2 第6.8.17号井戸跡



3 第7号井戸跡



4 第9号井戸跡・第2.3号土坑



5 第10.15号井戸跡



6 第11.12号井戸跡



7 第13号井戸跡



8 第16号井戸跡・第15号土坑



1 第1号土坑



2 第5号土坑



3 第6号土坑



4 第9号土坑



5 第9号土坑遺物出土状况



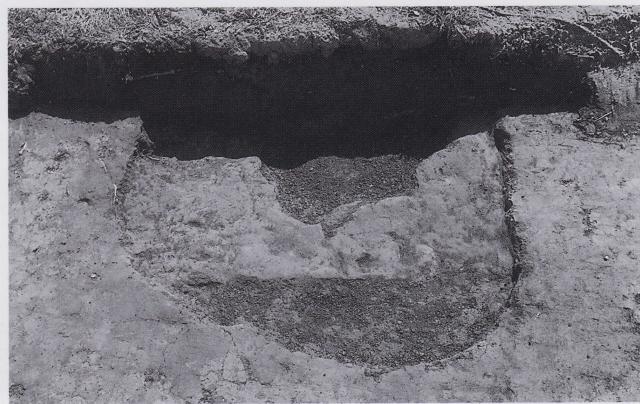
1 第7号土坑



2 第8号土坑



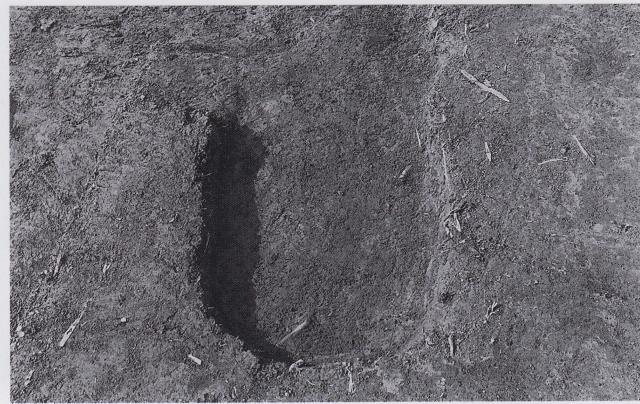
3 第10号土坑



4 第11号土坑



5 第12.13号土坑



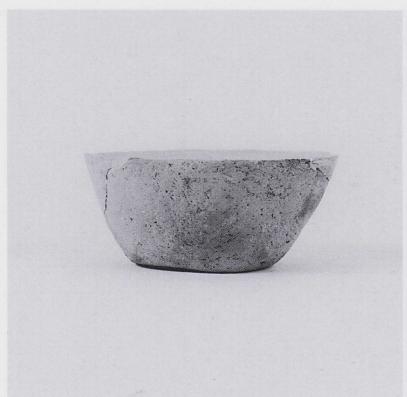
6 第14号土坑



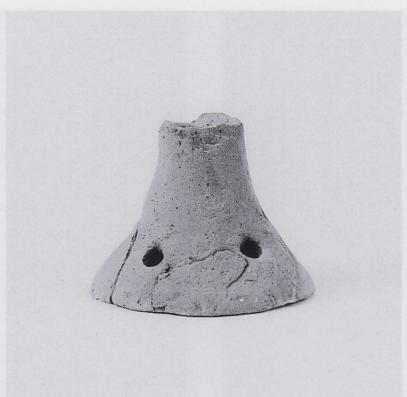
7 第14号土坑遺物出土狀況



8 土製勾玉出土狀況



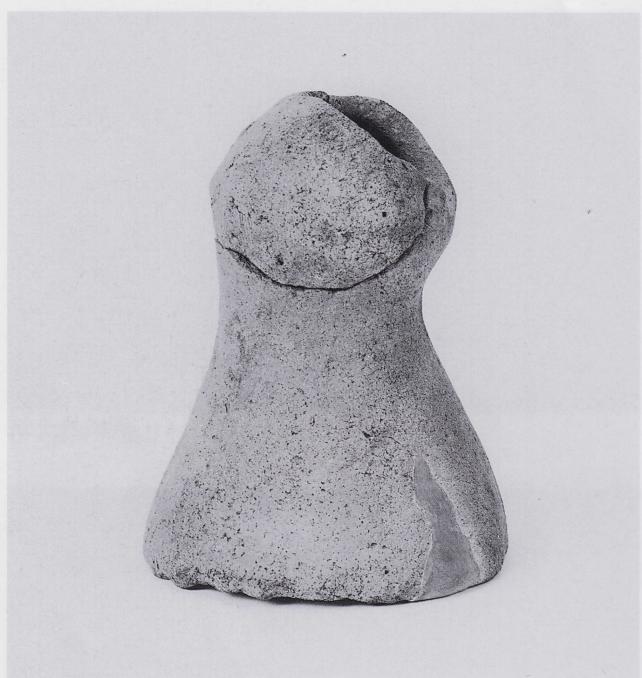
1 第1号溝跡（第9図1）



2 第1号溝跡（第9図2）



3 第7号溝跡（第12図6）



4 第7号溝跡（第12図23）



4 第7号溝跡（第12図23）



5 第7号溝跡（第12図24）





1 第2号溝跡（第9図19）



2 第7号溝跡（第12図4）



3 第7号溝跡（第12図5）



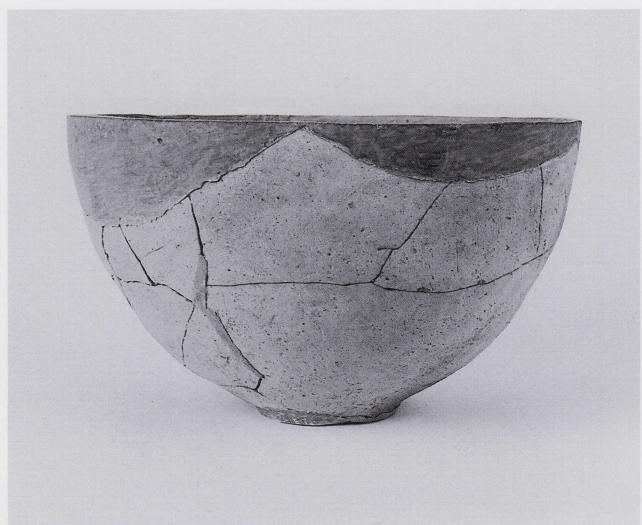
4 第7号井戸跡（第18図13）



5 第2号溝跡（第9図15）



6 第13号井戸跡（第20図5）



1 第1号溝跡（第9図6）



2 第7号溝跡（第12図13）



3 第7号溝跡（第12図9）



4 第7号溝跡（第12図21）



5 第7号溝跡（第13図27）



6 第7号溝跡（第13図28）



1 第7号溝跡（第13図40）



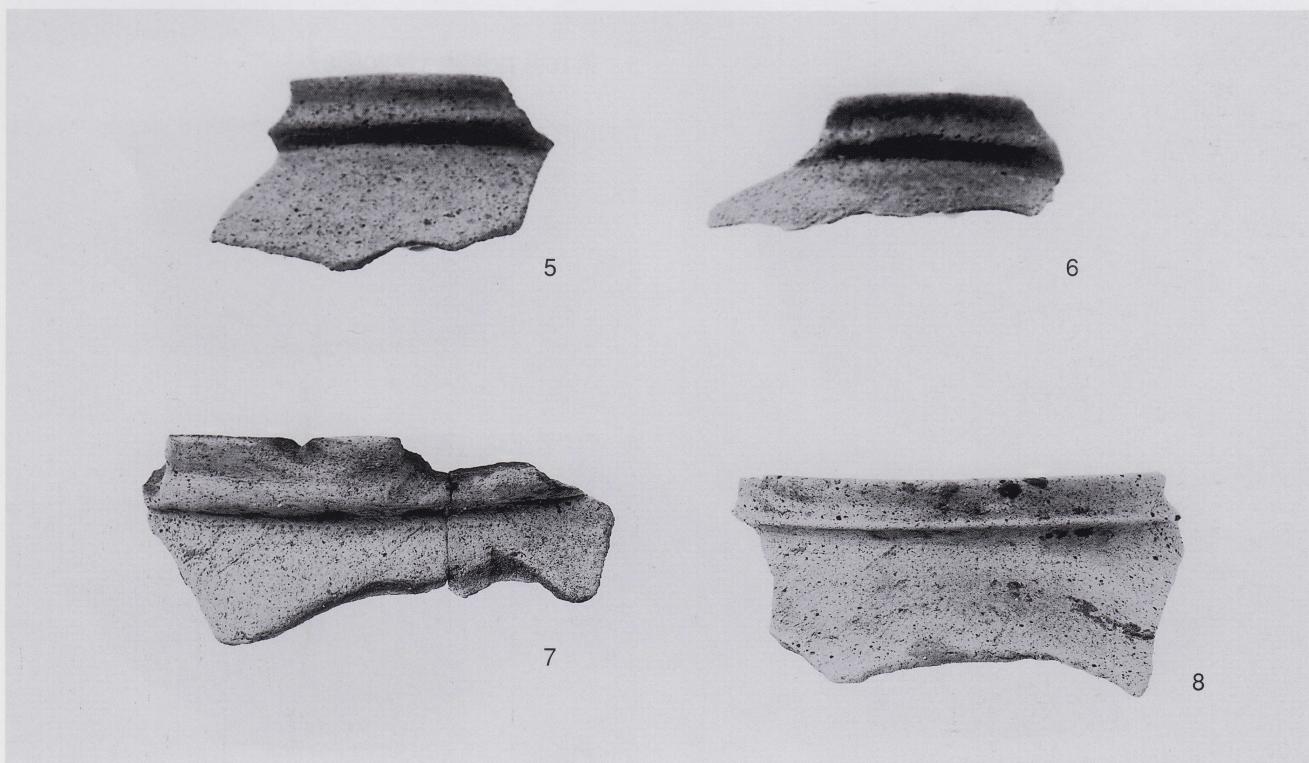
3 第7号溝跡（第13図35）



2 第7号溝跡（第13図45）



4 遺構不明（第26図2）



5~8 第7号溝跡（第13図31.29.33.32）



1 第8号井戸跡（第18図15）



2 第12号井戸跡（第19図5）



3 第12号井戸跡（第19図2）



4 第12号井戸跡（第19図4）



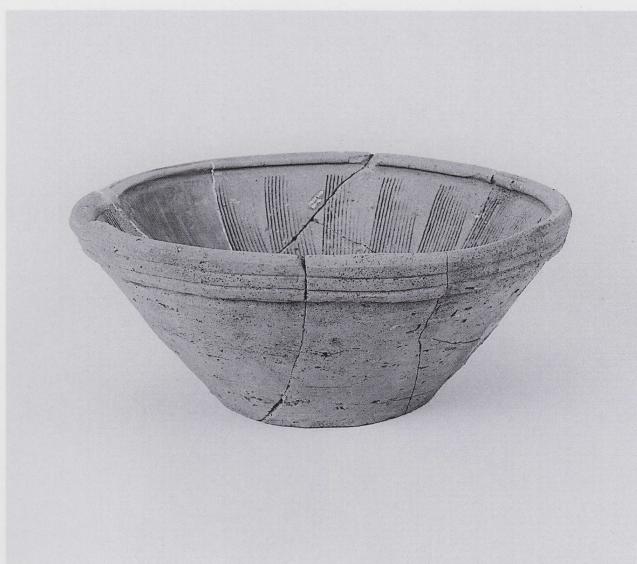
5 第16号井戸跡（第20図8）



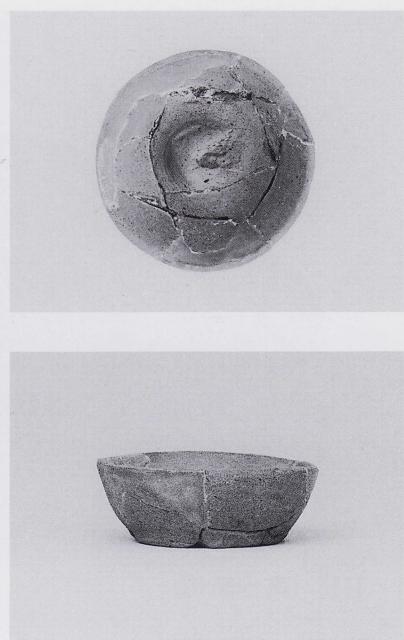
6 第2号土坑（第24図1）



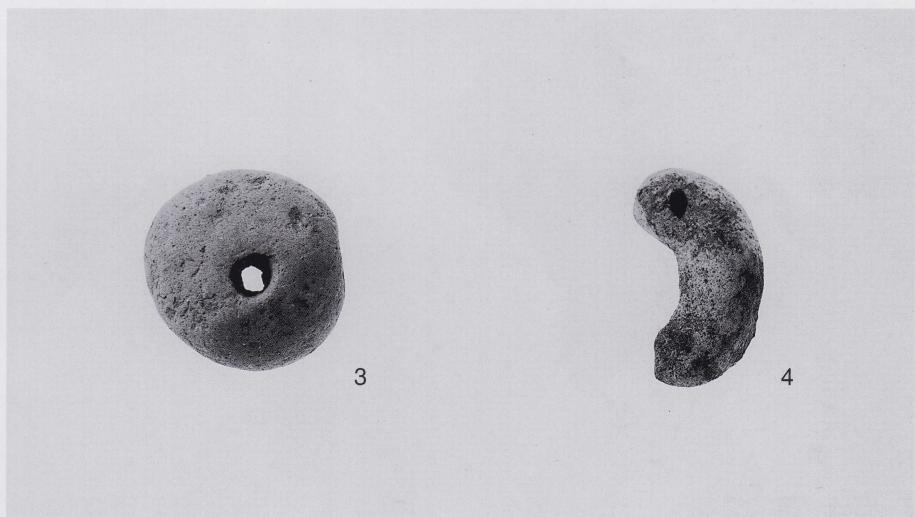
7 第12号井戸跡（第19図7）



1 第9号土坑（第24図7）



2 遺構不明（第26図7）



3 土錘（第9図10）4 土製勾玉（第26図6）



5 土人形（第9図11）6 円盤状土製品（第18図17）



1 石臼（第19図18）



2 石臼（第19図20）



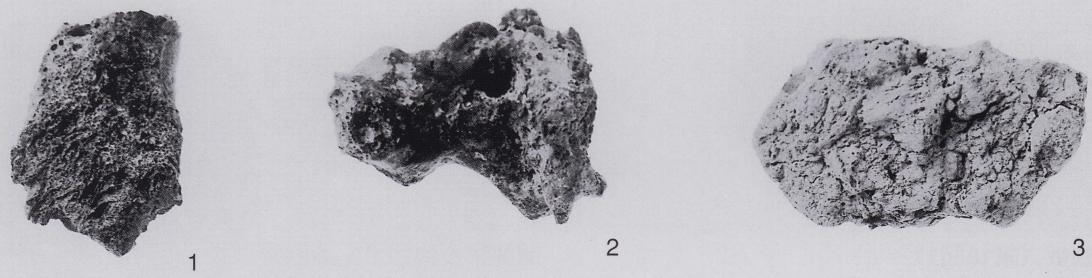
3 石臼（第20図7）



4 石臼（第20図10）



5~7 砥石（第19図15~17）

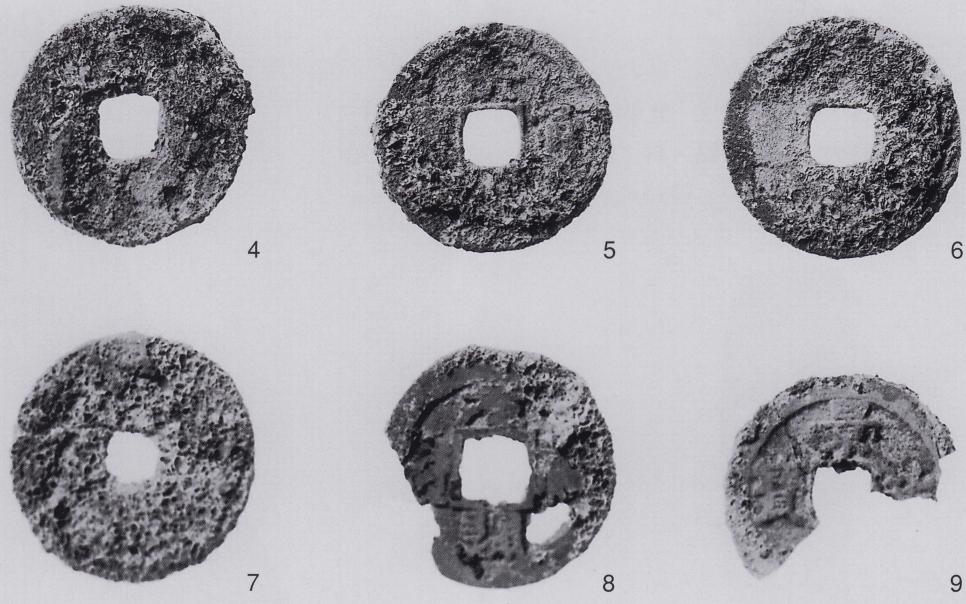


1

2

3

1 羽口（第9図25）2 鉄滓（第18図10）3 火打金（第18図9）



4

5

6

7

8

9

4～9 錢貨（第26図8～13）



1 桶底板（第18図1）



2 桶（第18図3）



3 縦杵（第18図5）



4 部材（第18図16）



5 部材（第20図2）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひがしちそうだいせき							
書名	東地総田遺跡							
副書名	東武ストア谷塚店建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第314集							
著者氏名	瀧瀬芳之							
編集機関	財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2005(平成17)年6月27日							
所 収 遺 跡	所 在 地	コード	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
ふりがな	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″				
ひがしちそうだいせき 東地総田遺跡	さいたまけんそうかしや 埼玉県草加市谷 つかまちあざにしちそうだ 塚町字西地総田 こうちばんちほか 耕地922番地他	11004	04	35°48'37"	139°47'45"	20040901～ 20041029	900	東武ストア 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東地総田遺跡	集落跡	古墳時代前期 ～近世	溝跡 井戸跡 土坑 ピット	8条 17基 15基 105基	土師器・須恵器・陶磁器 ・勾玉・土錘・砥石・石臼・杵・桶・部材・火打金・錢貨	土製勾玉・異形器 台が出土		

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第314集

草加市

東地総田遺跡

東武ストア谷塚店建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成17年6月17日 印刷

平成17年6月27日 発行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 埼玉県大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493（39）3955

印刷／巧和工芸印刷株式会社